

金 武 1

金武地区農村振興総合整備統合補助事業関係調査報告1

—浦江遺跡第5次調査1—

2004

福岡市教育委員会

金 武 1

金武地区農村振興総合整備統合補助事業関係調査報告1

—浦江遺跡第5次調査1—



2004

福岡市教育委員会

序

福岡市は玄界灘を挟んで大陸と接し、古より対外交渉の門戸として栄えて参りました。このため市内には稲作農耕の始まりを示す板付遺跡や古代の迎賓館である大宰府鴻臚館など貴重な遺跡が残されています。福岡市ではこうした文化財の保護と活用を進めているところです。近年アジアの玄関として福岡市の役割が高まっています。市内の開発も都市部から周辺の農村部まで広く行われています。

本書は金武地区農村振興総合整備統合補助事業に伴う浦江遺跡第5次調査の報告です。調査では吉武熊山古墳に次ぎ市内2例目となる装飾古墳の発見がありました。あわせて縄文時代から中世に至る多くの成果も得ることが出来ました。

幸い地元の皆さまのご理解をいただき、装飾古墳は保存することが出来ました。

本書が文化財保護の一助となり、地域の歴史資料として、また学術資料として活用頂ければ幸いです。

最後となりましたが、発掘調査や装飾古墳保存に際しまして、吉武金武土地改良区ならびに、地元の皆さまをはじめとする関係諸機関、関係各位のご理解とご協力に厚くお礼を申し上げます。

平成16年3月31日

福岡市教育委員会
教育長 生田 征生

例 言

1. 本書は金武地区農村振興総合整備統合補助事業に伴い、2002年1月から12月に行われた浦江遺跡第5次調査の第1回目の報告であり、3区と5・6a区を掲載する。調査内容が膨大で多岐に及ぶために整理作業が終了した部分から隨時報告するものである。
2. 浦江遺跡群は遺跡略号をURAとし、今回の調査が第5次調査となるため略号をURA-5とする。なお3・5区で発見された古墳群は報告中で「浦江古墳群」と仮称する場合があるが、混乱を招くために収蔵整理において別に遺跡略号は付けない。
3. 本書の執筆は各担当者が行い、分担は目次に記した。記名のない部分は吉留秀敏による。
4. 本書に掲載した遺構実測は調査担当以外にを行った。また遺物実測は調査担当以外に遠部慎、名取さつき、矢野幸子、宮元香織、西山めぐみ、下原幸裕が行った。
5. 本書の編集は吉留秀敏が行った。
6. 本書に掲載した遺物、記録類は福岡市埋蔵文化財センターに収蔵される。

目 次

1. 遺跡の位置と過去の調査	1
2. 調査の概要	2
1) 調査に至る経過	2
2) 調査組織	2
3) 調査経過	3
4) 調査の概要	3
3. 調査報告	5
1) 金武柳遺跡試掘報告（米倉秀紀）	5
2) 3区の調査（赤坂亨・藏富士寛）	6
3) 5・6a区（吉留秀敏）	65
4. 科学的分析	76
1) 年代測定	76
2) 石材同定	76

挿図目次

Fig. 1 周辺の主な遺跡	1
Fig. 2 浦江遺跡5次調査全体図	4
Fig. 3 柳遺跡の位置と地形	5
Fig. 4 柳遺跡出土石器	5
Fig. 5 3区全体図	6
Fig. 6 壇穴式住居 SC23・出土遺物	7
Fig. 7 SC47	8
Fig. 8 SC47出土遺物	9
Fig. 9 壇穴式住居 SC80・81	10
Fig. 10 SC80・81・124・125出土遺物	11
Fig. 11 壇穴式住居 SC124・125	12
Fig. 12 SK18-19-82-83-84-85-87-88-89-98-100-101-103-104-13	13
Fig. 13 捩立柱建物 SB121・122・SB121出土遺物	14
Fig. 14 SB175	15
Fig. 15 その他の出土遺物	16
Fig. 16 SO02埴丘	17
Fig. 17 SO02主体部	17
Fig. 18 SO02主体部閉塞	18
Fig. 19 SO02埴丘－主体部断面	18
Fig. 20 SO02主体部内遺物出土状況	19
Fig. 21 SO02主体部内出土遺物 1	20
Fig. 22 SO02主体部内出土遺物 2	21
Fig. 23 SO02主体部内出土遺物 3	21
Fig. 24 SO02周溝出土遺物	22
Fig. 25 SO03埴丘	23
Fig. 26 SO03主体部	24
Fig. 27 SO03埴丘－主体部断面	25
Fig. 28 SO03主体部内遺物出土状況	25
Fig. 29 SO03周溝内遺物出土状況	26
Fig. 30 SO03主体部内出土遺物	27
Fig. 31 SO03周溝内出土遺物 1	28
Fig. 32 SO03周溝内出土遺物 2	29

Fig. 33 SO04埴丘	30
Fig. 34 SO04主体部	30
Fig. 35 SO04埴丘－主体部断面	31
Fig. 36 SO04主体部内遺物出土状況	31
Fig. 37 SO04周溝内遺物出土状況	32
Fig. 38 SO04主体部内出土遺物	33
Fig. 39 SO04周溝内出土遺物	34
Fig. 40 SO05埴丘	35
Fig. 41 SO05主体部	36
Fig. 42 SO05主体部敷石	36
Fig. 43 SO05埴丘－主体部断面	37
Fig. 44 SO05主体部内遺物出土状況	37
Fig. 45 SO05周溝内遺物出土状況	38
Fig. 46 SO05主体部内出土遺物	39
Fig. 47 SO05周溝内出土遺物 1	40
Fig. 48 SO05周溝内出土遺物 2	41
Fig. 49 SO06埴丘	42
Fig. 50 SO06主体部	42
Fig. 51 SO06埴丘－主体部断面	43
Fig. 52 SO06主体部内遺物出土状況	43
Fig. 53 SO06周溝内遺物出土状況	44
Fig. 54 SO06周溝内出土遺物	45
Fig. 55 SO07埴丘	46
Fig. 56 SO07主体部	46
Fig. 57 SO07主体部閉塞	46
Fig. 58 SO07埴丘－主体部断面	47
Fig. 59 SO07主体部内遺物出土状況	47
Fig. 60 SO07周溝内遺物出土状況	47
Fig. 61 SO07主体部内出土遺物	48
Fig. 62 SO07周溝内出土遺物	48
Fig. 63 SO08埴丘	49
Fig. 64 SO08主体部	49
Fig. 65 SO08主体部閉塞	50
Fig. 66 SO08埴丘－主体部断面	50
Fig. 67 SO08主体部内遺物出土状況	51
Fig. 68 SO08周溝内遺物出土状況	51
Fig. 69 SO08主体部内出土遺物 1	52
Fig. 70 SO08主体部内出土遺物 2	53
Fig. 71 SO08主体部内出土遺物 3	54
Fig. 72 SO08周溝内出土遺物	54
Fig. 73 SO09埴丘	55
Fig. 74 SO09主体部	55
Fig. 75 SO09埴丘－主体部断面	56
Fig. 76 SO09主体部内遺物出土状況	56
Fig. 77 SO09主体部出土遺物	57
Fig. 78 SO09周溝内出土遺物	58
Fig. 79 SO15埴丘	59
Fig. 80 SO15主体部	59
Fig. 81 SO15埴丘－主体部断面	60
Fig. 82 SO15主体部内遺物出土状況	60
Fig. 83 SO15主体部内出土遺物	61
Fig. 84 SO15周溝内出土遺物	61
Fig. 85 SO53埴丘	62
Fig. 86 SO53埴丘断面	62
Fig. 87 SO53周溝内出土遺物	62
Fig. 88 その他の遺構	63
Fig. 89 その他の遺物	64
Fig. 90 5区・6a区全体図	65
Fig. 91 SK07	66
Fig. 92 SK07出土遺物 1	66
Fig. 93 SK07出土遺物 2	67
Fig. 94 SK07出土遺物 3	68
Fig. 95 SC04実測図	69
Fig. 96 SC04・その他の弥生時代遺物	70
Fig. 97 2号墳(SO02)石室実測図、遺物出土状況図	71
Fig. 98 SO02出土遺物 1 その他	72
Fig. 99 SO02出土遺物 2	73
Fig. 100 SO02出土遺物 3	74
Fig. 101 Rb-Sr-Zr強度比	76

1. 遺跡の位置と過去の調査

浦江遺跡は福岡市西部の早良平野の南端部に位置する。早良平野は背振山地に端を発し博多湾に注ぐ室見川が中央を北流し、その流域に広がる幅6 km、奥行き8 kmの三角形状の小平野である。東側は油山から派生し野芥、飯倉に延びる低平な丘陵が連なり、西側には飯盛山、西山などの小山塊が聳立する。この西側の山塊の裾部には平野に向かって複数の扇状地が展開する。室見川はこうした扇状地の扇端部を浸食し、小規模な段丘面が数面形成している。また山塊から室見川に注ぐ小河川は扇状地を樹枝状に浸食し小規模の谷地が多数形成されている。このように遺跡は複合扇状地と浸食谷、そして段丘面という複雑な地形上に立地している。浦江遺跡は西山北東麓に位置し、独立した小規模な扇状地上に展開する。

浦江遺跡と同じ早良平野西部の遺跡としては北側に城田遺跡、吉武遺跡、羽根戸遺跡、野方遺跡などの弥生時代～古墳時代の拠点集落がある。その周辺には小規模な集落・墳墓遺跡が多数分布している。また

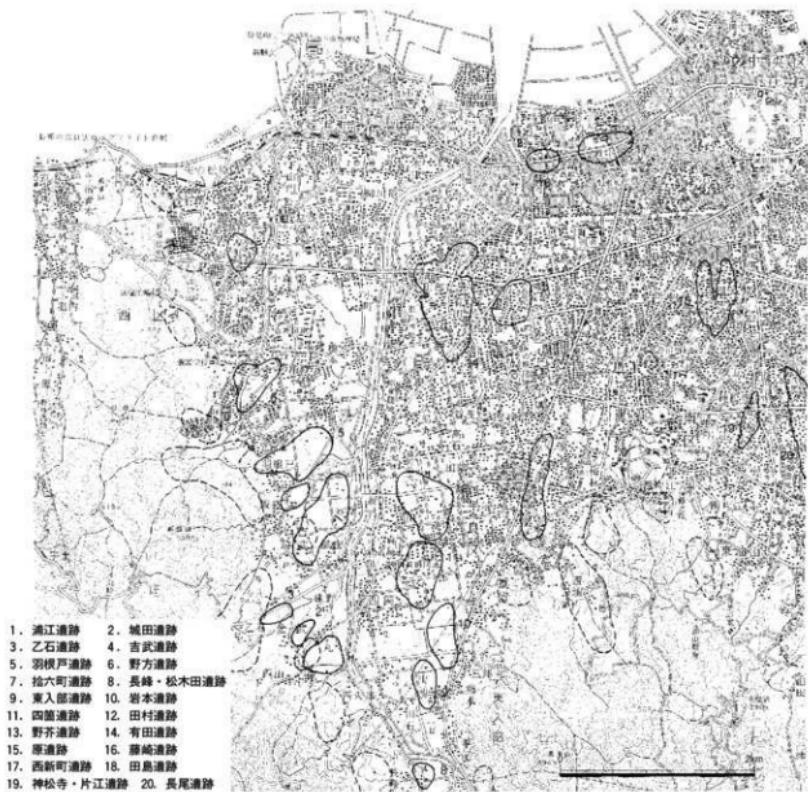


Fig. 1 周辺の主な遺跡（破線は古墳群）

古墳時代にはこの段丘上～山麓部に古墳造営がさかんとなる。先駆的な宮ノ前遺跡C地点の墳丘墓、前半期の前方後円墳である羽根戸南古墳群G2、G3号墳や大型円墳の橋渡古墳などが造られる。後半期には飯盛山山麓に展開する羽根戸古墳群や金武古墳群などが早良平野において最大の群集墳地帯となる。

浦江遺跡はこれまでに福岡市教育委員会による4次の発掘調査が行われている。1次調査は1984年、2次調査は1991年1月に遺跡内西側で行われ、古墳時代後期の住居跡などが検出された（市報165・422集）。3次調査は1991年11月に遺跡内東側の段丘縁部で行われ、弥生時代中期の甕棺2基が発見された（年報Vol.6）。4次調査は1995年11月～12月、1996年6月～11月に遺跡内南西端で行われた（市報614集）。绳文時代の落とし穴群、後期古墳1基、古代の建物群、製鉄遺構、中世の建物などが検出された。このように浦江遺跡では今回の調査以前に绳文時代から中世に及ぶ集落や墳墓、生産遺跡の存在が予測された。

2. 調査の概要

1) 調査に至る経過

平成10(1998)年に福岡市農林水産局より教育委員会埋蔵文化財課に対し、西区金武地区における集落基盤整備事業の実施に関わり当該地域の埋蔵文化財の確認について事前の問い合わせがあった。これを受けた埋蔵文化財課では平成11年以降、対象地の既調査記録の検討と現地踏査を行い、遺跡の確認を行った。平成11(1999)年2月15日～3月24日に平成14年度対象地である浦江遺跡内大塚地区の試掘調査を実施した。平成12、13年度に当初対象地となった13、14年度は場整備部分の試掘調査を行った。その結果、平成13年度対象地（旧柳遺跡）では遺構は存在しなかったが、平成14年度対象地（浦江遺跡）ではほぼ全域に濃密な遺跡の存在が確かめられた。この結果を受けて両者は幾度かの協議を行い、遺存する埋蔵文化財の保護についての対策案について検討を行った。しかし、当該地が扇状地上の斜面であり、広い水田面造成のため大規模な造成工事の実施が必要となり、遺跡への影響を避けることが困難であった。全体として盛り土量を増やすこととなつたが、なお工事による影響を免れない範囲については発掘調査を実施し、記録保存を図ることとなつた。

平成13年度から新規5カ年国庫補助事業として金武地区農村振興総合整備統合補助事業が着手されたことを受け、埋蔵文化財課では同年度1月から浦江遺跡の一部発掘調査を開始した。平成14年度は引き続き浦江遺跡の発掘調査を進めた。

2) 調査組織

調査主体 福岡市教育委員会

教育長 生田征生 文化財部長 塙徹

調査庶務 文化財整備課

文化財整備課長 平原義行 管理係長 市坪敏郎 管理係 後藤泰子

調査担当 埋蔵文化財課

課長 山崎純男 調査第1係長 力武卓治

主査（平成13年度）米倉秀紀 常松幹雄 久住猛雄 蔵富士寛

（平成14年度）杉山富雄 吉留秀敏 池田祐司 蔵富士寛 阿部泰之 赤坂亨

浦江遺跡5次調査・整理協力者（アイウ順）

伊崎俊秋 石丸洋 石山勲 上杉彰紀 小田富士雄 蒲原宏行 小池史哲 甲元眞之 小松謙

杉井健 鈴木正博 高木恭二 武末純一 生田目和利 西谷正 橋宜田佳男 林潤也 深野信之

藤山隆造 松木茂 村上昇 渡邊正氣

3) 調査経過

平成14年度事業対象地は浦江遺跡を主とする約13haの範囲であった。ほぼ全域が水田であり、一部に畑地、道路、水路などがあった。事業は単年度で年度内に発掘調査と造成工事を完了する必要があった。

発掘調査は遺跡の存在する範囲で道路や用排水路などの構造物の範囲や、造成工事により造構面が削されたり、大規模な盛り土により遺跡保存に影響を与える範囲に限定した。それでも調査対象地区は24地区、面積は全体で37,000m²を上回る規模となり、単年度の調査としては極めて困難な事業内容であった。そのため調査は造成工事の工程に合わせ、西側から段階的に進め、年度後半期は工事と同時並行に行い調査終了させる方式をとった。調査は複数の担当職員を数地点の調査区に配置し、同時に進行した。

調査進行にあたって、期間中は地権者を含む土地改良区、福岡市農業水産局、教育委員会の三者による月1回の定例会議を開催し、事業遂行過程で発生した問題に対応することとした。

調査の進行初期に1区から周溝と墳丘を有する壺棺墓群が発見された。この壺棺群は1991年の3次調査で確認され、存在が予測されていたものであったが、墳丘墓を構成することは新たな発見となった。この調査については重要性からも本体調査と切り離し、別途重要遺跡確認調査として調査を進める事となった。また3区で発見された古墳群のうち最大規模の1号墳石室奥壁に装飾壁画が発見された。装飾古墳としては本遺跡の北西約700mにある金武熊ノ山古墳群7号墳（福岡市指定史跡）に次ぎ市内2例目の発見であった。このため福岡市教育委員会では記者発表と市民への公開を目的に現地説明会を実施した。2002年8月2日に実施した現地説明会には250名以上の見学者があった。また地権者や土地改良区並びに工事施行担当部局・業者を交えて保存協議を開始した。なおこの1号墳は本体調査と切り離し、別途重要遺跡確認調査として調査を行った。また保存協議の結果、当面盛り土保存することとなり、測量と盛り土工事を実施して保存に対応した。調査は厳寒の中、重層遺跡となった3区古墳群下の弥生時代、绳文時代包含層の調査を最後とし、平成14(2002)年12月30日に全てを終了した。

4) 調査の概要

浦江遺跡は北側を流れる龍谷川により形成された扇状地上に立地する。南西端を扇頂部とし北から東側に扇状地形が広がる。東側が扇端部でありかつ見川との段丘面となり、比高差10mの段丘崖をなしている。扇央部は平坦でなく、浅い谷状地形が扇頂部から数条放射状に認められる。これは更新世中～後期に形成された古段階の扇状地がその後侵食を受け形成されたものであり、更新世末から完新世初期の最終扇状地形成時までに、完全な埋没を免れた部分が現地表面に残されたものである。また扇状地形成において基盤となった花崗岩の残丘頂部が扇央部に突出している部分がある。これは3区1号墳東側と13区にあり、前者は古墳の墳丘造営時に取り込まれる。後者は地元で大塚と呼ばれていたが古墳ではない。

調査内容の概要是表1に示した。時代ごとに概要を示すと以下のようになる。

旧石器時代は8、12区に台形石器や細石刃石器群が出土した。両地区は遺跡内でも南側にあたり、新期の扇状堆積物による侵食や被覆がない。绳文時代は3、6、24区にあり、绳文時代早期の貯蔵穴、集石炉と共に土器・石器類が出土し、他に後期～晚期の土器・石器類が少量出土した。弥生時代は中期中頃まで扇端部の1、24区に集落や墳墓があり、中期後半～末になると扇頂部に近い3、6区に集落が移る。この時期に扇央部の2区に灌漑水路が掘削されている。古墳時代は3、5区に後期群集墳がある。調査は合計14基であり、古墳は未調査範囲にも展開する。古代は扇端部の17、19区で大型建物が、8、20区では建物と灌漑水路が検出された。前者は規模や配置から何らかの官衙施設とみられた。中世は1～3、12、13、15、18、23、24区で建物や溝、井戸、穴倉、鍛冶などの遺構が検出された。その中で13区は大塚と呼ばれた丘を壇状に造成して居館が設けられている。中世浦江集落の中心的施設であったと推定される。



Fig. 2 浦江遺跡5次調査全体図 (1/4,000) アミ部は本報告書掲載部分

表1. 浦江遺跡第5次調査地区別発掘調査一覧

区	調査面積(m ²)	調査期間	主要検出構・遺物	担当者
1	6,472	02.01~08	弥生集落・墳丘墓(壺棺群)・中世砦	常松・吉留・藏富士・阿部
2	3,109	02.01~07	弥生溝・中世集落	木倉・久住
3	5,311	02.01~12	縄文包含層・弥生集落・古墳11基(装飾古墳1基)・中世建物	藏富士・赤坂・吉留
4	530	02.05	柱穴	吉留
5	1,173	02.05~07	弥生集落・古墳3基	吉留
6	809	02.05~08	縄文貯蔵穴・弥生集落・中世	吉留
7	1,460	02.05~08	弥生溝・弥生集落	吉留
8	1,112	02.05~08	古代溝・中世建物	池田
9	280	02.07	遺物散布のみ	吉留
10	200	02.07	遺物散布のみ	吉留
11	301	02.07	柱穴	池田
12	3,295	02.08~10	旧石器・弥生集落・中世	池田
13	3,731	02.09~11	中世居館・穴蔵・墓地	藏富士
14	614	02.09~11	中世	藏富士
15	964	02.10~11	中世集落・井戸・鉄滓	阿部
16	480	02.10~12	弥生集落	藏富士
17	1,133	02.10~12	弥生集落・古代建物	藏富士
18	138	02.10~12	中世集落	阿部
19	1,045	02.10~12	弥生集落・古代建物	阿部
20	643	02.10~12	弥生溝・古代・中世	吉留
21	1,687	02.10~12	弥生住居・中世	吉留
22	1,284	02.10~12	弥生集落・中世	吉留
23	1,232	02.11~12	中世集落・鍛冶遺構	吉留
24	600	02.11~12	縄文集石炉 ^a ・弥生集落・中世	杉山

3. 調査報告

1) 金武柳地区試掘調査報告

1. はじめに

当事業の初年度（平成13年度）は、事業地内南西部の柳地区約2.0haで、同地内には金武柳遺跡があり、地内全域を対象に平成13年5月9日から5月16日まで試掘調査を実施した。

2. 立地

柳地区は竜谷川南岸の河岸段丘状の様相を呈し、全体が西から東に傾斜する急な斜面を成している。地内西端と東端は20m以上の標高差がある。隣接する田の標高差は50cmから1m以上あり、棚田状の景観を成している。金武柳遺跡は、舌状に張り出した地点にある小さな範囲の遺跡である。

3. 調査の概要

試掘トレンチは19本入れた。土層は地点によって異なるが、大まかな基本土層は、耕作土の下に橙色系の粘質土、その下に粘質土もしくは粗砂層で、50cm以上の大礫が混じっている。谷底近くでは礫層の上に砂や砂質層が厚く堆積している。地内東端近くの道路近くではローム層を確認した。以上の状況から、地内は上方から堆積した土で形成され、遺構は金武柳遺跡内も含めて確認できなかった。

出土遺物は近世以降の陶器数点の他、スクレーバーが1点出土した。このスクレーバーはトレンチ18の客土層からの出土で、この客土は地元の人の話では、南側の丘陵の土であることから、道路を挟んだ南側に該期の遺跡があるものと思われる。

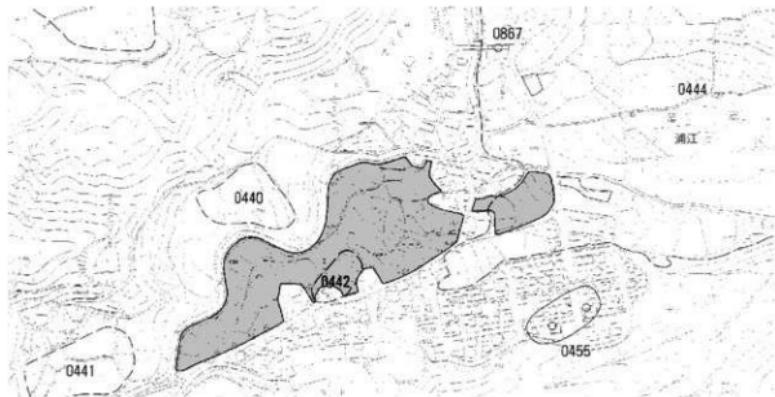


Fig. 3 柳遺跡の位置と地形 (1/6,000)

1はサヌカイト製のスクレーバーで、長さ6.1cm、幅7.1cm、厚さ1.2cmを測る。数か所に新しい大きな剥離がある。基部には自然面を残し、本来3側縁を加工しているものと思われる。基部には抉り状の剥離があり、欠失している側に同様の抉りがあったならば、石匙に近い形態となる。縄文時代草創期・早期に所産と思われる。

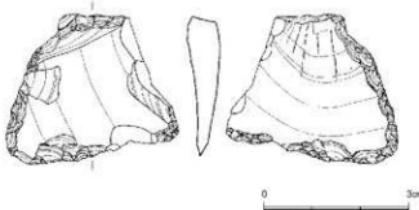


Fig. 4 柳遺跡出土石器 (1/1)

2) 3区の調査

1. 調査概要

西から東に向かってなだらかに傾斜する扇状地である。標高は46.3m～49.3mであり東西の比高差は約3mである。黒色土が地山であるが一部に風化した花崗岩脈が露出している。

調査以前は水田として用いられており、傾斜する地形に合わせて段を設け棚田としていた。3区はこの棚田化の影響で地区がSO08東側とSO01東側を結ぶ線で大きく上段と下段に分けられている。調査着手以前は、特に東端の下段は上段との比高差が大きく、削平により遺構は残っていないと思われた。しかし堅穴式住居が上段からの落ち際に残っているなど遺構の遺存状態は良好で、この地形改変が近世以前に遡る

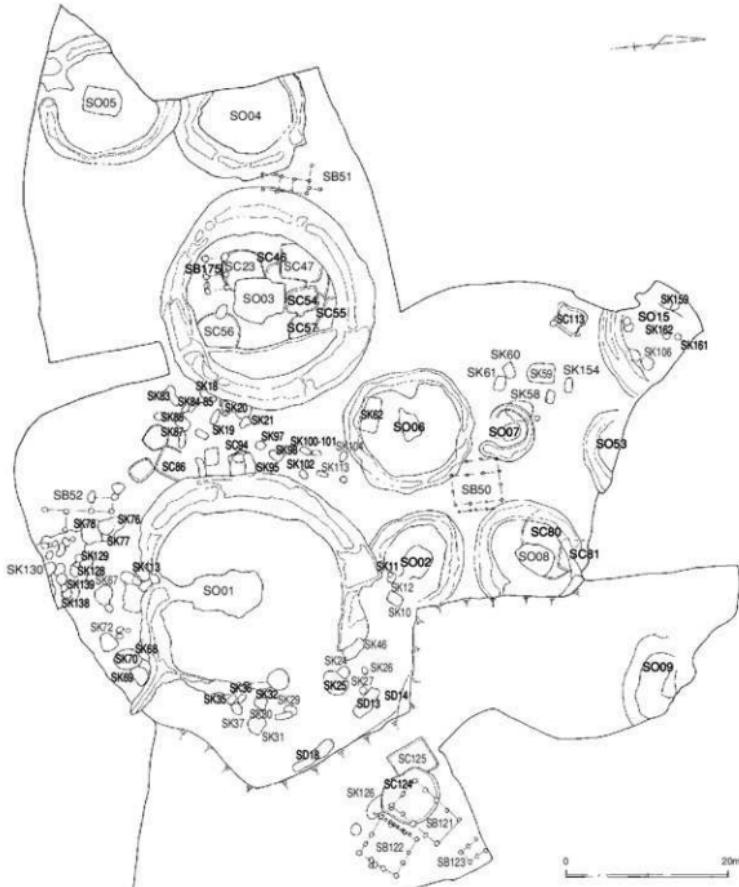


Fig. 5 3区全体図 (1/600)

可能性があることをうかがわせた。

同様に上段も遺構の遺存状況がよく、天井石を飛ばされた形で10基の横穴式石室が検出された。その中でもSO01は装飾古墳であり福岡市では2例目の貴重な発見となった。なおこのSO01は協議の結果保存される事になり、現在は埋め戻して保存されている。

調査の結果、縄文時代の土器出土地点、弥生時代の堅穴式住居16軒、土坑137基、溝5条、円墳10基（石室あり9基）、掘立柱建物7軒、ピット多数を検出した。

2. 遺構と遺物

(1) 弥生時代

a. 堅穴式住居

SC23 (Fig. 6)

調査区の西側に位置し、SO03の石室により北側の隅が切られている。標高は床面で約49.00mである。SB175の柱穴によって南西隅と北東隅を切られている。住居址内の壁に沿って深さ5cm幅20cmの溝をめぐらせている。平面形は円形を呈し東西7m南北7mを測る。深さは30cmである。主柱穴は5本であり、その他に柱穴がないことから建替は行われていないものと考えられる。

遺物は砥石 (Fig. 6-1) が床面北東柱穴付近から検出された。弥生土器小片が出土している。

SC47 (Fig. 7)

調査区の西側に位置し、SO03の周溝により北側の隅が切られている。標高は床面で約48.4mである。住居の平面形は方形であり、南北8.9m、東西4.4mを測る。深さは40cmである。北東辺は幅40cm、高5cmのベッド状遺構になっている。柱穴とみられるピットは1基のみである。東辺壁際には1.6m×1mの不定形円形土坑がある。住居中央部に炭化物が集中して検出された。壁際土坑内の土器は土坑下半に集中し花崗岩礫と共に、あるいはつぶされるように下部から出土した。土坑内遺物は本住居址機能時～廃棄時に投棄されたものと推定される。これに対し住居址内の中・上位より出土した遺物は本住居址廃棄後しば

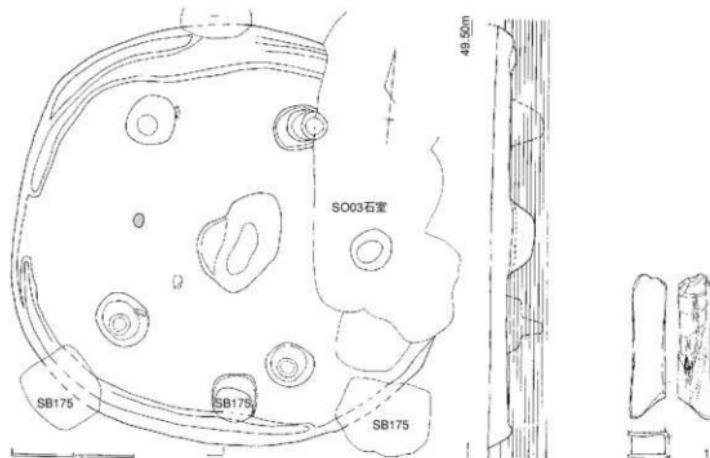


Fig. 6 堅穴式住居 SC23 (1/60)・出土遺物 (1/4)

らくした後に投棄されたものと推定される。

土器は住居址内の中・上位より壺 (Fig. 8-1), 壺 (2~8), 高杯 (9), 器台 (10·11) が、壁際土坑内より壺 (12) 壺 (13~15), がそれぞれ出土している。両者はどちらも須玖II式の範疇であり、土器からは時期差は認めにくい。本住居址は機能時から覆土流入時までが短期間であったようだ。石器は出土していないが壁際土坑内より花崗岩礫が、床面より台石が出土している。

SC80 (Fig. 9)

調査区の北端に位置し、水田の段によって住居址北側、SO08周溝により北西~北側、SO08石室により東側がそれぞれ切られている。両住居址は切り合い関係よりSC80→SC81の順に築造されたといえる。

平面形は円形を呈し、南北7.2m以上、東西7.5mを測る。中央に185cm×115cmの不定格円形の土坑がある。主柱穴は7本であり、1回以上は建て替えが行われている。北側の4本の主柱位置は大きく変更せず、南側の3本の主柱を東側に約0.8m拡大した円周位置に変更している。また中央土坑周辺では上面が被熱した台石が北側から、炭化物が南側より検出されている。

遺物は石斧 (Fig. 10-1·2), 砥石 (3) 石劍 (4), が出土した。土器は器台 (5)などの小片がある程度出土したが固化できるものはなかった。朱彩された土器片が散見され弥生時代中期の土器と考えられる。

SC81 (Fig. 9)

SC80の北東を切り、SO08周溝と弥生時代の溝SD64に北側を切られている。平面形は方形を呈し南北2.6m以上、東西4.0mを測る。住居址内のピットはSC80の柱穴と推定され、本住居址に伴うものは確認できなかった。遺物は壺底部 (Fig. 10-6)など弥生土器片が少量出土している。

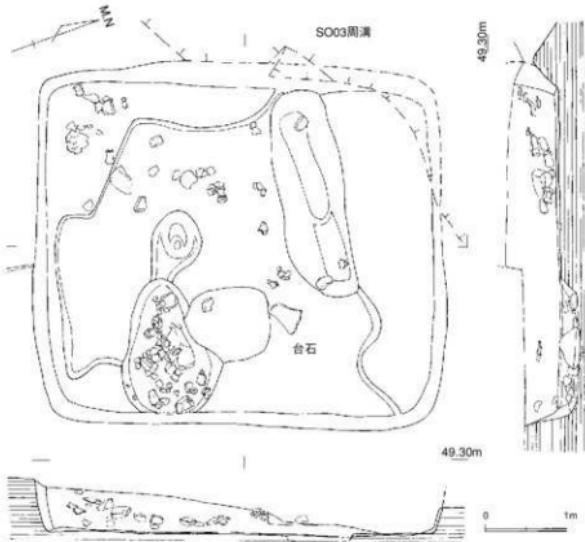


Fig. 7 SC47 (1/60)

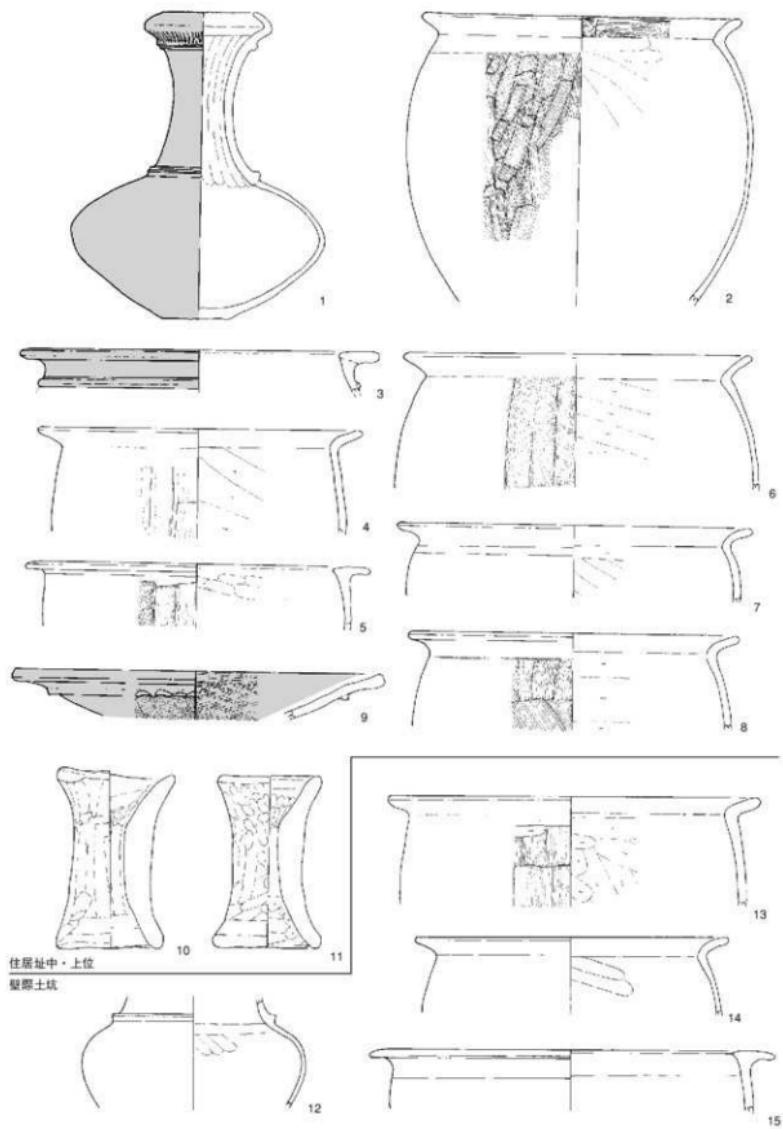


Fig. 8 SC47出土遺物 (1/4)

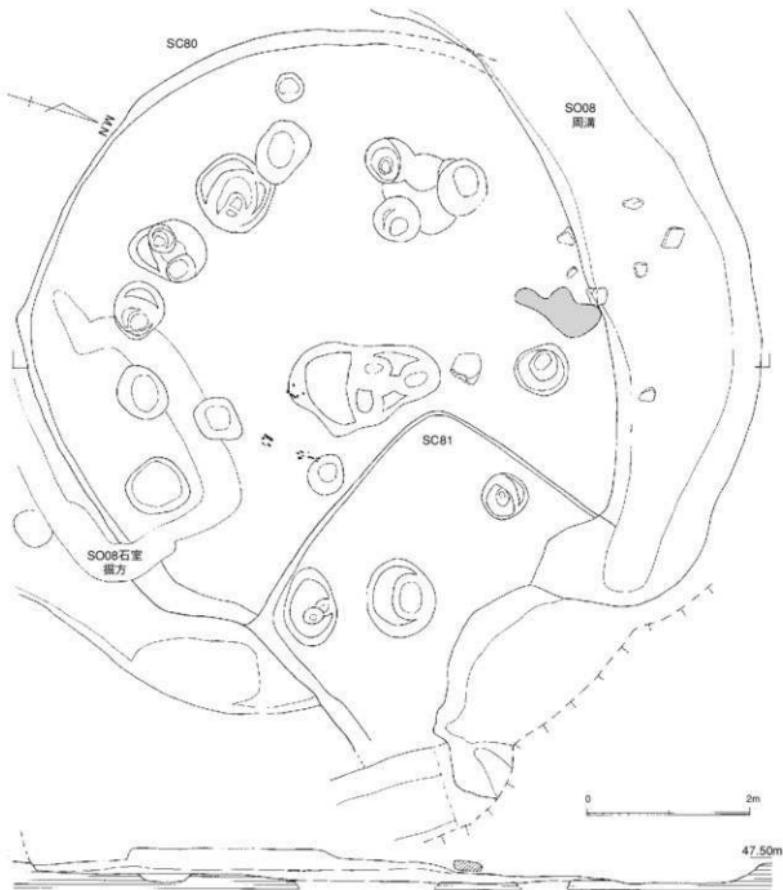


Fig. 9 懸穴式住居 SC80・81 (1/60)

SC124 (Fig. 11)

調査区の東端である下段に位置していて、標高は床面で約46.2mである。SC125の南側を切っており、SC125→SC124の順に構築されている。当初は削平されていると考えられていた上段からの段落ち部付近でこの住居址が検出されたことは、3区における上段・下段の形成が弥生時代・古墳時代にまで遡る可能性があることを示唆させるものである。平面形は円形であり、床面は上下2層に分かれている。住居構築時は下面を床としていたが、建替え時に柱材の抜き穴を埋めるとともに盛り土して床面を5~10cm上げて、上面の床を作り上げている。また同時に住居址も外側へ50cm前後拡張している。そのため下面の床

は南北5.7m東西6.4m、上面の床は南北6.5m東西7.4mの円形を呈する。上面で検出された柱穴から上面での主柱穴は5本であり、柱穴はほぼ正五角形を呈する。上面では柱穴の検出数が少なく、大きな柱位置の変更は無かったようである。下面の柱穴は多く判別しがたいが、主柱穴は5本であり、柱穴は不定五角形を呈すると推定した。柱穴の五角形は上面に比べて柱間が長く、中心も北側に寄っている。下面の柱穴は北側の1基を除きほぼ3つ以上は周間に存在する事から、柱の建替えが少なくとも3回以上行われたようである。このため新たに柱穴を作る余地が無く、下面の床における建替えが限界にきたため床を作り直すとともに拡張して新たに住居址を作り直したものと考える。中央には150cm×70cmと130cm×80cmの2つの楕円形土坑があり、柱穴との関係から前者が上面、後者が下面に伴うものと推定される。上面では楕円形土坑の北側と南側に焼土塊が見られ、土坑の周囲には炭化物混じりの黒色土が広がっている。また上面における柱穴の五角形の外側、北東約30cmの地点に、暗青灰の還元色を呈する炉壁が焼土に混じって検出されている。下面では焼土および炭化物の集中は検出されなかった。遺物は壺底部(Fig. 10-7)を図示したが、図化できない小片が多く出土している。弥生時代中期の範疇である。

SC125 (Fig. 11)

調査区の東端である下段に位置していて、標高は床面で約46.5mである。SC124によって南東隅を切られている。平面形は方形であり、東西5.0m南北4.1mを測る。深さは10~15cmである。中央に円形の土坑が2基、北東と南西に1基ずつピットが存在する。焼土等は検出されなかった。

遺物は弥生土器の小片が少量出土している。

b. 土坑

弥生時代の土坑は3区全体から検出されているが、特にSO01周辺とSO07とSO15の間に多く分布している。1号墳の北-東-南にかけては花崗岩の風化した岩脈に円形で径1~数mの貯蔵穴と思われる土坑が30基ほど見つかっている。この付近には古代~中世にかけての土坑も検出されており、その後も継続して用いられるようである。花崗岩質の地盤が貯蔵穴に適しているためであろうか。また、SO07~15の間の土坑は1辺2m前後の長方形で深さ50cm前後であり、5基検出されている。住居址には小さく、焼土・炭化物も検出されておらず、遺物も少ないためその性格は不明である。残存状況の良好なSO01・03・15墳丘下や下段からも弥生時代の土坑が検出されている。

SO01西側のSO03との間に長軸1.5~2.0m×短軸0.5m前後の楕円形で、深さが0.5mで床面が平らな土坑が多数検出されている(Fig. 5)。ここでは代表的なものだけを図示した(Fig. 12)。SK18のような長軸がN-50°~E前後の一群と、SK84のような長軸がN-35°~W前後の一群との2群に大きく分けられ、一定の規格の基に作られたことがうかがえる。いずれも図化できる遺物はなく、弥生土器の小片が出土したのみである。ほぼ人間一人を伸展葬にできる形態であることとその規格性から土坑墓と推定されるが、それを裏付けるような人骨・副葬品などの出土はなかった。以下に図示した土坑の長軸方位と大



Fig. 10 SC80・81・124・125出土遺物(1/4)

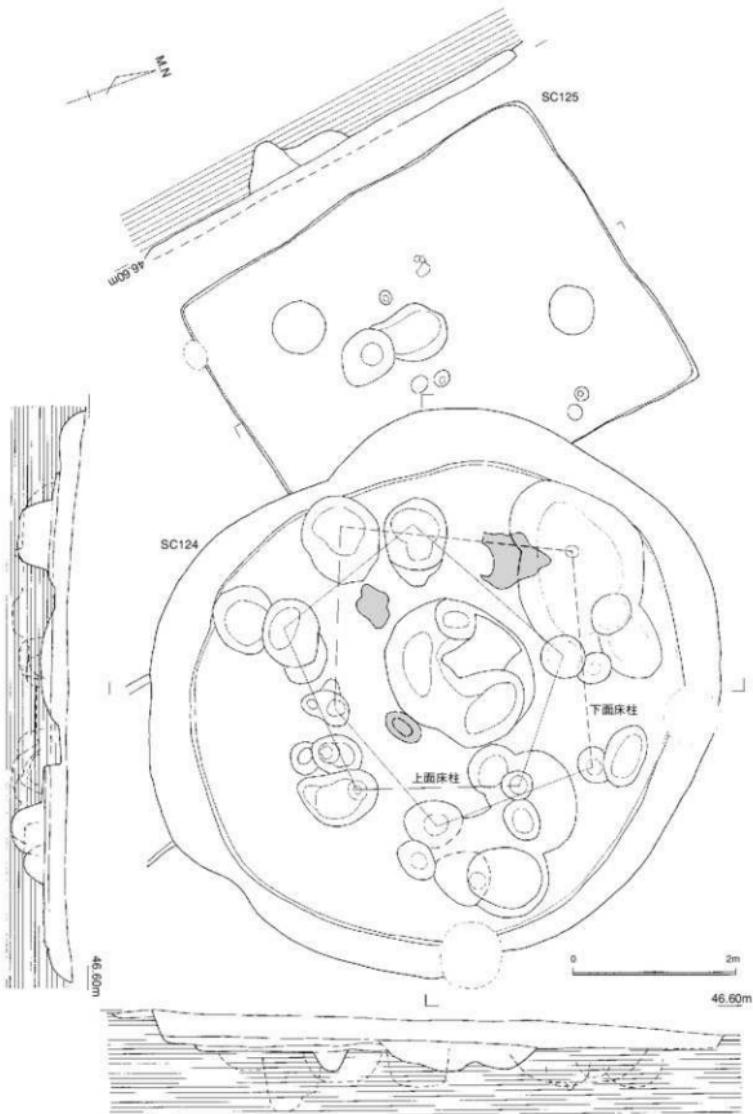


Fig. 11 壁穴式住居 SC124 · 125 (1/60)

きさを表にまとめた。

土坑No	長軸方向	長×短×深(cm)	土坑No	長軸方向	長×短×深(cm)
SK18	N-49°-E	210×92×40	SK88	N-58°-E	218×146×23
SK19	N-59°-W	210×92×53	SK89	N-47°-E	168×86×32
SK82	N-25°-W	154×56×32	SK98	N-33°-E	190×120×16
SK83	N-49°-E	238×90-140×26	SK100	N-35°-E	150×92×22
SK84	N-36°-W	214×77×26	SK101	N-14°-E	110×64×56
SK85	N-36°-W	190×60×38	SK103	N-34°-E	146×60×28
SK87	N-73°-W	204×80×11	SK104	N-55°-W	144×78×50

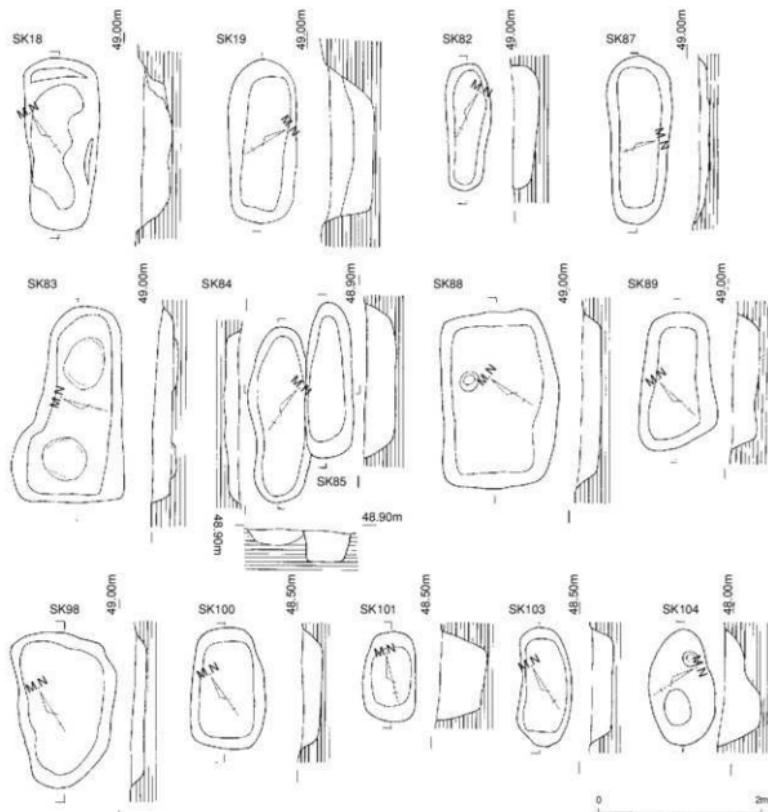


Fig. 12 SK18・19・82・83・84・85・87・88・89・98・100・101・103・104 (1/60)

c. 掘立柱建物

SO03墳丘内から1棟、下段から3棟検出された。いずれも図化できる遺物は出土していないため厳密な時期は不明である。しかし弥生土器の小片が出土していることから弥生時代の掘立柱建物の可能性がありここでとりあげた。

SB121 (Fig. 13)

3区の下段にSC124を切る形で存在している。北東の短辺の真ん中の柱穴が検出されていないが2間×4間の大型の掘立柱建物である。桁行方位はN-52°-Eであり、ほぼ扇状地形の傾斜方向に沿っている。柱穴は北東側ほど浅くなっている。また南東に平行に並びSB122が切っている柱穴列があり、SB121に伴うものである可能性があるがその性格は不明である。柱穴内より紙石 (Fig. 13-1) が出土している。

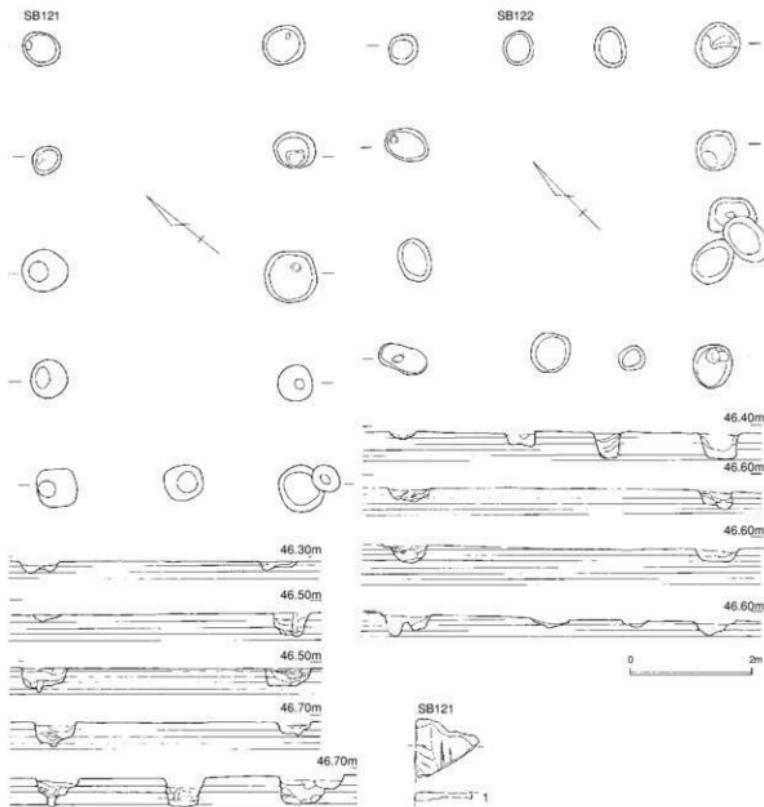


Fig. 13 掘立柱建物 SB121・122 (1/80)・SB121出土遺物 (1/4)

SB122 (Fig. 13)

ほぼSB121の南東側に隣接している3間×3間の大型の掘立柱建物である。桁行方位はN-45°-Eで、SB121の方位とはほぼ一致し、両者は関連ある建物である可能性が高い。重複した柱穴があり、柱の建替を行っているようである。柱穴列を切る形で作られているが、これがSB121に伴うものであれば、両者の並存がうかがえながらもSB121→SB122の順で構築された可能性がある。

SB123 (Fig. 5)

3区下段の東端で検出された。1間×2間以上の掘立柱建物で、桁行方位はN-35°-Wである。SB121・122とはやや軸がずれ、両者との関係は不明である。柱穴の掘り込みは浅く残存状況は悪い。

SB175 (Fig. 14)

SO03墳丘内に弥生時代穴式住居SC23を切る形で存在する1間×2間の掘立柱建物で、桁行方位はN-84°-Eである。柱穴はいずれも50cm以上の深さを測る。周辺には関連する掘立柱建物は検出されなかった。

d. その他の出土遺物 (Fig. 15)

取り上げられなかった遺構および遺構外出土の弥生時代の石器と鉄器を示す。Fig. 15-1~9は石包丁、10は石剣再利用の石斧、11~17は石斧、18はくぼみ石、19~25は砥石、26は石鎌、27は磨石、28は鉄斧である。なお15には4箇所、16には1箇所抉りが入っている。また、鉄斧は刃部が欠損している。

またこれらを出土遺構ごとにみると、1がSC56、2・5・17・24・27がSO03周溝、3がSK128、4がSO01石室、6・16・21が遺構面、7・10がビット、9・22がSO01周溝、11がSO05墳丘下、12がSO01東側掘り下げ区、13がSK165、14がSD119、15がSO02石室西側壁の根込石として、18がSO06周溝入口付近、19・20がSC86、23がSO15周溝、25がSO03周辺、26がSO09、28がSD28からそれぞれ出土している。

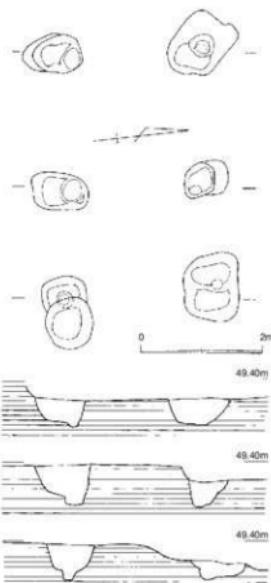


Fig. 14 SB175 (1/80)

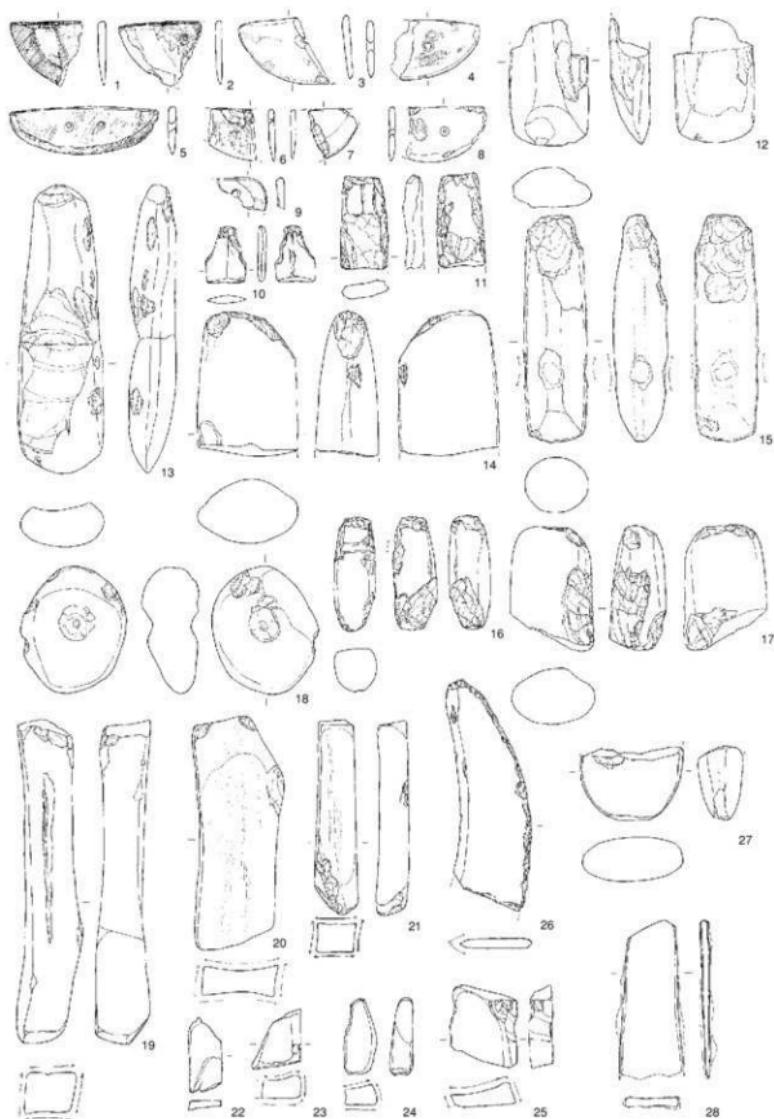


Fig. 15 その他の出土遺物

(2)古墳時代

SO02

墳丘 長軸方向に長いやや楕円形の墳形を呈する (Fig. 16)。短軸方向で長さ8.5m, 玄室の中心が墳丘の中心にあたると想定すれば、長軸方向では長さ12m程に復元できるだろう。他時期の遺構が多く切り合っており、石室入口側の墳端は明らかにできなかった。墳丘には深さ30~40cm、幅1.5~2 m程の周溝が巡る。周溝南側は崖面となり、その一部が失われ、西側はSO01周溝との切り合いを持つ。その切り合い関係は土層観察からも明確にし得なかつたが、

遺構検出の段階ではSO01を後に出すものとして判断している。墳丘の大部分は後世の削平によって失われ、盛土部分は残っていない。

主体部 南東方向 (S-52°-E)に向かって開口する単室構造の横穴式石室である (Fig. 17)。天井や石室壁体の大部分が失われ、基底部1段分の石積みを残すのみである。使用する石材はすべて花崗岩である。玄室は長さ2.4m、幅1.8mの長方形プランで、玄門部の立石は内側へわずかな張り出しを持つ。右袖部の石材は動いているが、樋石をみる限り玄門幅は50~60cm程であろう。玄室に残る

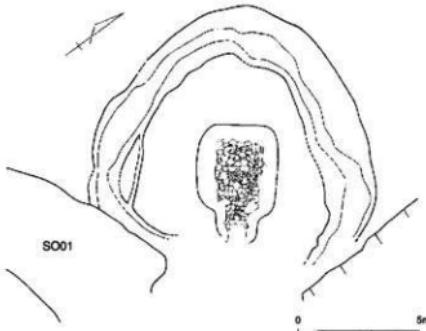


Fig. 16 SO02墳丘 (1/200)

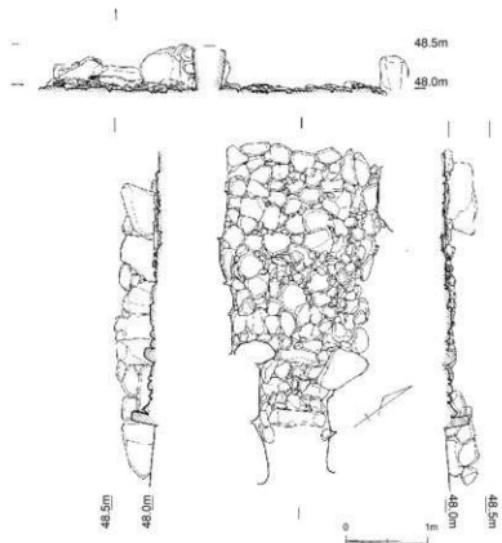


Fig. 17 SO02主体部 (1/60)

壁体では、左側壁側の石材が扁平石材を縦位に、右側壁側に残る1石は横位に配するという特徴がある。羨道部に天井石は存在しないが、壁体の状況より長さは1.4m程に復元できる。羨道幅は80cm、そして玄門部と袖石の途中に櫛石を配する。玄室と羨道櫛石までの床面には敷石を施す。やや大形の扁平石と小石を組み合わせており、床数は1面のみである。玄室部分では石敷きの上に小石がまとまって存在しているが、これは床面の残存ではなく、屍床の区画を意図したものだろう（後述）。羨道部では閉塞が一部残存している。閉塞は櫛石の外側で塊石積みにより行う。その為か、羨道部の櫛石（第2櫛石）は玄門部のそれ（第1櫛石）よりも一段高くなっている。尚、残る閉塞石基底面と石室構築面は20cm程の差があるが（Fig. 18）、このことは石室使用時のいずれかの段階ではこの部分が石室内に向かって段状に下降していたことを示す。第2櫛石はむしろ框状を呈していたといえよう。

ここで、石室と墳丘との状況をまとめることにする（Fig. 19）。先にも述べたように墳丘盛土は全く残っておらず、現存する墳丘はすべて地山の削り出し部分である。石室構築にあたり現状では50cm程、ちょうど腰石の上端が隠れるほどの墓坑掘り込みが認められる。上面は削平されているが、本来の深さもさほど変わりのないものであったと考えて良いだろう。腰石上端のレベルが墳丘—石室構築上の一つの作業段階となっていた可能性が高い。そして墓坑は玄室—羨道—墓道と進むにつれて浅くなっている。遺物出土状況 周溝内からと石室内からの出土がある。特に玄室内からは須恵器や鉄製品等、まとまった量の遺物の出土をみた（Fig. 20）。石室内出土の遺物はすべて玄室よりの出土である。土器は両袖部と中央や右よりの部分という3ヶ所にまとまって検出された。若干の移動はあるが、ほぼ原位置を保っていると見て良いだろう。これらをA～C群とする。A群は左袖部より検出した土器の一群で、蓋杯、壺、甕、平瓶よりなる。B群は右袖部より検出した土器の一群で、杯蓋、壺よりなる。A群とは平瓶が無い点が異なる。C群は玄室中央部のやや右よりの位置より出土した土器群で、蓋杯のみで構成される。鉄器の多くは鎌、刀子である。鉄器の分布をみれば、ちょうどC群を取り囲むように分布していることが分かる。また、排土中からではあるが、耳環1、小玉1が出土している。

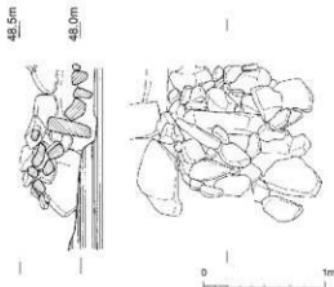


Fig. 18 SO02主体部閉塞 (1/40)

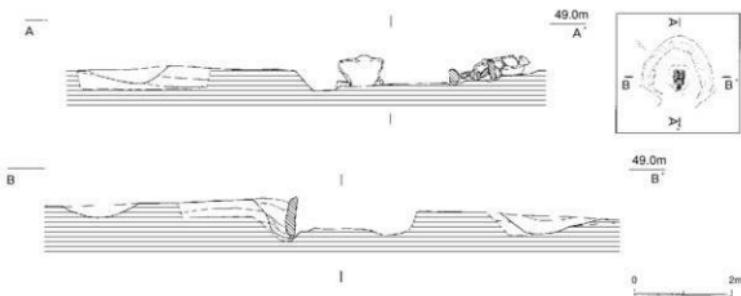


Fig. 19 SO02墳丘-主体部断面 (1/100)

周溝からはあまり多くの遺物は出土していない。ただFig.24の壺は周溝内からまとめて出土している。遺物量が少ないので、石室入口側の周溝部分を明確にし得なかったこともあるだろう。また、南西側の周溝が、SO01周溝と切り合いにあることも原因の一つとして挙げうるかもしれない。

出土遺物 主体部内からは容器類（須恵器等）の他、鉄錐、刀子、鉄刀（茎部分）といった鉄製品、耳環、玉類が出土した。容器の出土位置は大きくA～Cの3群に分けられる。A群からは杯蓋4、杯身8、壺1、壺2が出土した（Fig.21）。杯蓋はすべて天井部にヘラケズリを施し、天井部と体部に境を持たず口縁端部は丸く收めるものである。杯身の口縁部は段をなさず、立ち上がりは短く内傾する。蓋杯は多くが個々に出土しているが、10・11と12・13は組み合わされて出土している。蓋杯にはいわゆる杯H類がほとんどで、杯G類はA～C群の内でもこの12・13のみである。蓋杯13個体中、ヘラ記号を持たないものは1個体しか存在しない。15はやや小形の壺である。胴部全面に横方向のカキメ調整を施す。16・平瓶は共に口頭部にヘラ記号を持つ。16は口頭部に太い沈線を持ち、胴部外面にはカキメ調整、底部には静止ヘラケズリを施す。17は胴部にカキメ調整を施し、肩部には刺突により綾杉状の文様を施す。B群では杯蓋4、杯身6、壺2が出土した（Fig.21）。杯蓋の内、18と20が天井部と体部の境に浅い沈線を有し、18の口縁部は段をなしている。蓋杯10個体の内、5個体が天井部もしくは底部にヘラ記号を有する。29は口頭部が短く外反する壺であり、肩部にヘラ記号を有する。胴部下半は回転ヘラケズリ調整。C群は蓋杯のみで構成される（Fig.22）。杯蓋4、杯身6が存在する。4と7は天井部・底部のヘラ切り未調整である。10個体の内、7個体がヘラ記号を有する。

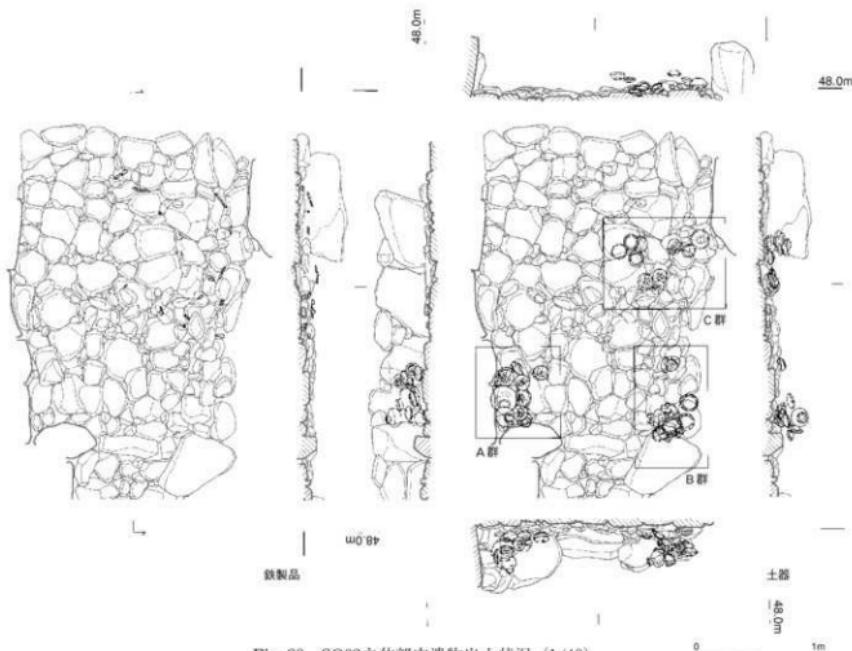


Fig. 20 SO02主体部内遺物出土状況 (1/40)

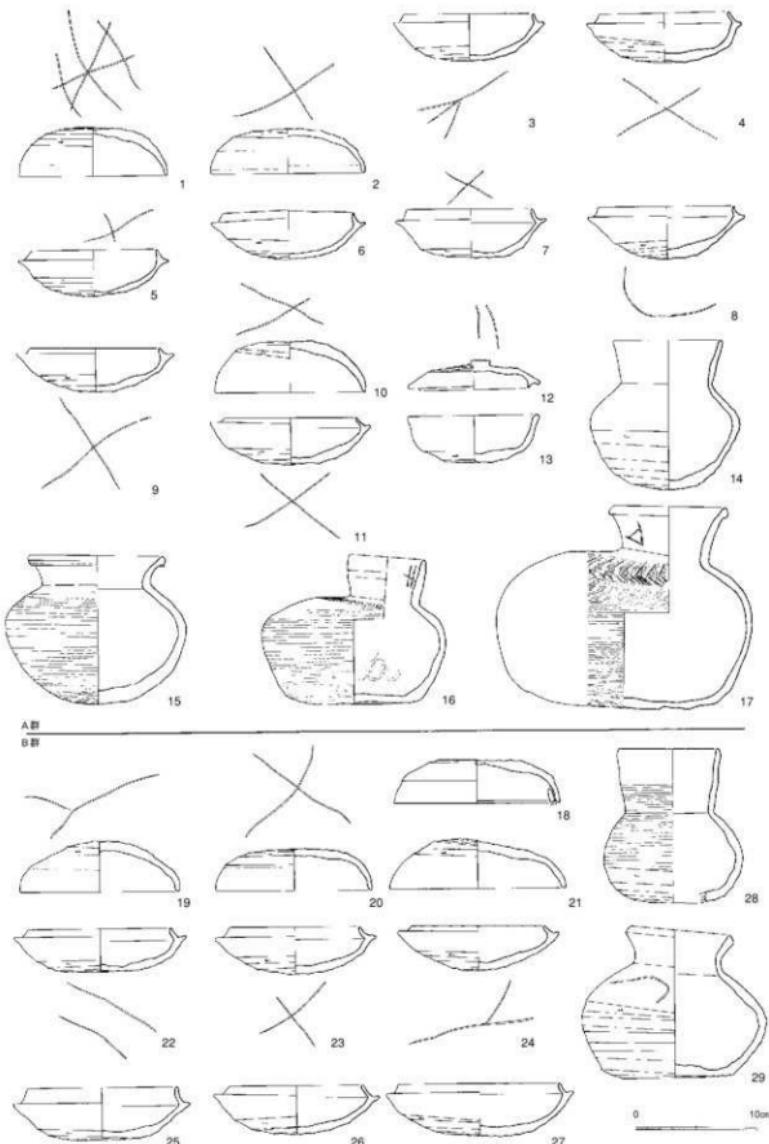


Fig. 21 SO02主体部内出土遺物 1 (1/4)

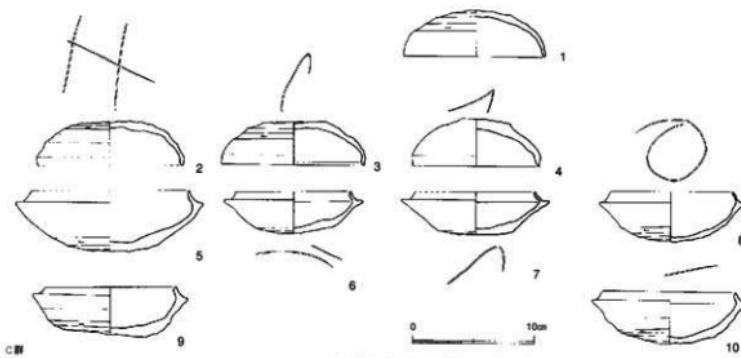


Fig. 22 SO02主体部内出土遺物2 (1/4)

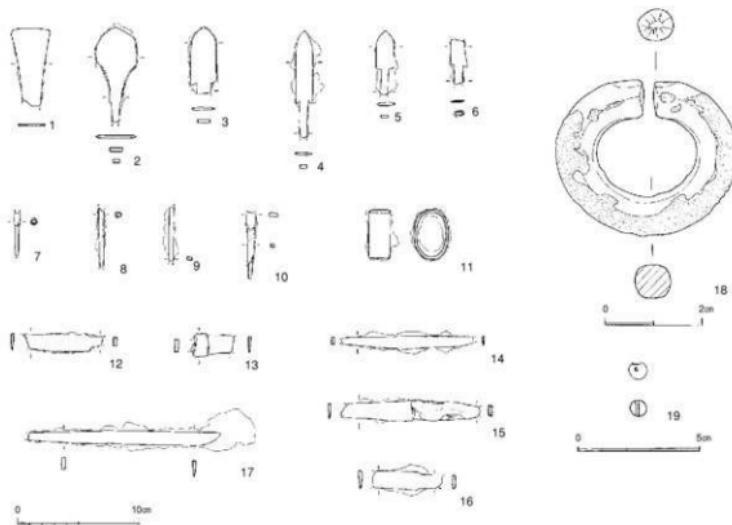


Fig. 23 SO02主体部内出土遺物3 (1/1, 1/2, 1/4)

Fig. 23は主体部内出土の鉄製品、装身具を示している。1～10は鉄鎌である。1は方頭鎌、2～6は三角形鎌である。3～6は両側に逆刺を有する。7～10は茎部を中心とした破片。一部に木質部が残る個体がある。11は大刀の鍔部分であろうか。12～17は刀子である。両刃をなし、13と15は木質部分が残る。18は耳環である。銅心銀箔鍍金によるもので、外径3.2～3.7cm、内径1.7～2.1cmを測る。玄室排土中より出土。19は丸玉である。一部を欠損する。ガラス製で、黒色を呈する。

周溝から出土した遺物はあまり多くはない。ここでは壹点のみを図化した (Fig. 24)。出土時は破碎されていたが、ほぼ完形に復元できた。外器面には平行タキ、内面には円弧タキの痕跡が残る。外器面にはカキメ調整、のち一部スリケシを行っている。

小結 SO02はややいびつな墳丘形態を探っているが、円墳と
考えて良いだろう。また、今回調査した古墳の中で、他の古墳（SO01）とはっきりとした周溝の切り合
いを持つものもSO02のみである。主体部に関しては、敷石を有すること、そして主体部内に多くの遺物、
特に容器類を残していることは他の古墳とも共通する。ただ、敷石として大きめの石材を多用しているこ
とはSO02の特徴として挙げができるだろう。また、主体部内に副葬された須恵器も他の古墳に比
してヘラ記号を持つ個体が多い。このことは須恵器の供給元、そして同一群内における各古墳の質的な差
違を考える上でも示唆的である。副葬土器は大半が須恵器であったようで、蓋杯の量が多い。あくまでも
調査段階のことであるが、杯身の量が杯蓋の量を大きく凌駕している。またセッタ関係にあるものが2個
体分と少ないことについては、これら土器群が室内の「かたづけ」により二次的に移動されていることも
要因の一つとなりうるのかもしれない。出土須恵器の多くはTK209～TK217型式期に位置づけることが
できるが、一部にTK10型式期に相当する資料が存在する。Fig. 21の18や20はこの時期に相当する資料と
して挙げができる。この杯蓋に対応する杯身をまだ見出しえてないが、口径のやや大きい杯身の一
群はこの時期に相当するものである可能性が高い。したがって、SO02の築造時期はこの蓋杯が示す時期、
TK10型式期でもやや新しい段階と考えておきたい。ところで、A群やC群の土器に比べて、B群には古
手の須恵器が集中して配置されている。「かたづけ」の手順を示しているのだろうか。

玄室敷石上に配された小石群を屍床区画として配されたものと考えていることは既に触れた。そのことについてここで詳しく述べておくことにしたい。玄室の床面をみると、小石がちょうど半ばを仕切るように、T字形に置かれていることが分かる (Fig. 17)。そして内部における副葬品の配置をみると、土器A・B群が手前の区画、C群が奥の区画に対応するように配置され、一見意味の無い配列のようにもみえる鉄製品はちょうど奥の区画を取り巻くように置かれていることが分かる (Fig. 20)。この状況をみれば、この小石の配置が意味あるものであったことは明らかであり、現状では特に奥の区画が遺体を納める空間、つまり屍床として機能していたと考えることが最も合理的であるだろう。ちなみに耳環、小玉もこの区画部分からの出土より出土している。ところで前の区画にどのような意味があったのかは不明である。少なくとも屍床であったことを示すような痕跡は見出されていない。

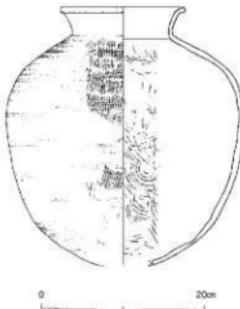


Fig. 24 SQ02層出土遺物 (1/6)

SO03

墳丘 墳径21mを測り、浦江古墳群ではSO01と並ぶ大形の円墳である (Fig. 25)。近接して存在する古墳 (SO04) はあるが、古墳同士の切り合いはない。墳丘は削平され、盛土は残っていない。尚、墳丘上の段部分は後世の耕作に伴う造成によるものである。周囲には幅2~5.5m、深さ50~80mを測る周溝が巡る。周溝は全周しており、主体部へといたる通路部分は存在しない。しかし、墳丘南西側の周溝は極端に幅狭になっており、これは主体部入口の位置 (後述) と関係しているのかもしれない。それに対し、西側の周溝幅はやや幅広となる。また、北東側にあたる周溝外側の堀方は2段を呈しているが、これが本来の姿であるかは不明である。

主体部 横穴式石室であるが、周囲は様々な擾乱を受け、現状では敷石と石材の一部が残るのみである (Fig. 26)。このように遺存状況は極めて悪いが、敷石と石材の抜き取り痕をみると、ある程度石室の状況を窺うことができる。敷石の東・西端は比較的直線状をなしており、この部分が石室壁際に相当するだろう。これは部分的に残っている壁材の位置とも矛盾はない。とすれば、敷石南西側の隅角をなす部分は、その南側に存在する抜き跡をみれば玄室（左）袖部に当たることが分かる。敷石部分の南側に入口があるとすれば、奥壁は当然北側となる。この場合、北側の東西に延びる抜き跡が奥壁の場所となり、

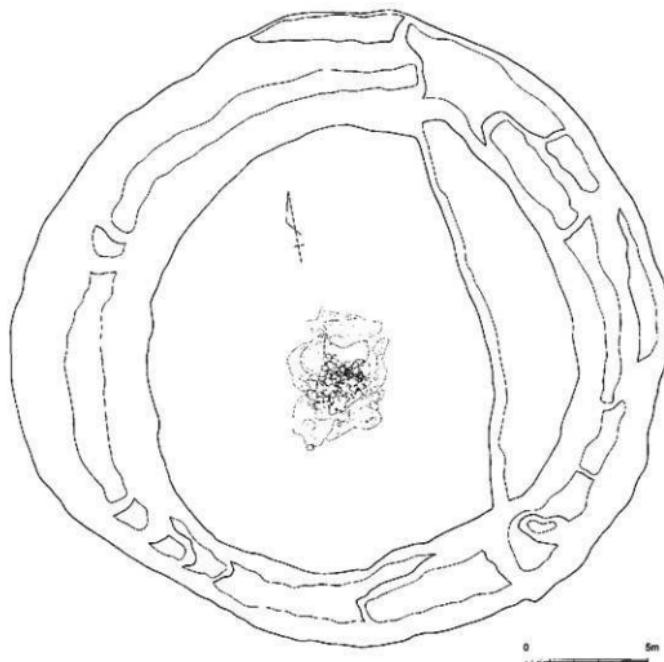


Fig. 25 SO03墳丘 (1/200)

抜き跡の西側に残るいくつかの石材は石室石材の根石とみなすことができるだろう。以上を勘案すれば、SO03の主体部である横穴式石室は、南西方向（S-11°-W）に開口し、長さ2.7m、幅2.2mを測る玄室平面プランを有するものであることがわかる。そして玄門幅は80cm程に想定できるだろう。ある程度の復元が可能な玄室部分に対し、羨道部分の状況はよく分からぬ。これにはSO02主体部でみた石室入口へといくにつれて次第に石室堀方が浅くなるという石室構造上の特徴が現れているのかもしれない。

敷石は20~30cmの大形な扁平石材と小石によって成り立っている。玄室中央部では大形石材の上に小石が存在するという体裁を探っており、大形石材と小石の組み合わせによって床面が形成されていたのではないだろう。大形石材の配置をみればむしろこの石材を敷いた床面が一面存在していたと考える方が良いだろう。小石については更に上面の床面敷石であった可能性もあるが、SO02主体部でみたように屍床区画といった用途に使用されている例もあり、現状からはいずれとも判断できない。

Fig. 27は主体部を含めた墳丘断面図である。これをみれば、盛土が削り取られ地山部分が露出していることがわかる。主体部の周囲は攪乱を受けるがそれでも現状で深さ40~50cmと、ある程度の深さの墓坑が掘削されていたようだ。



Fig. 26 SO03主体部 (1/60)

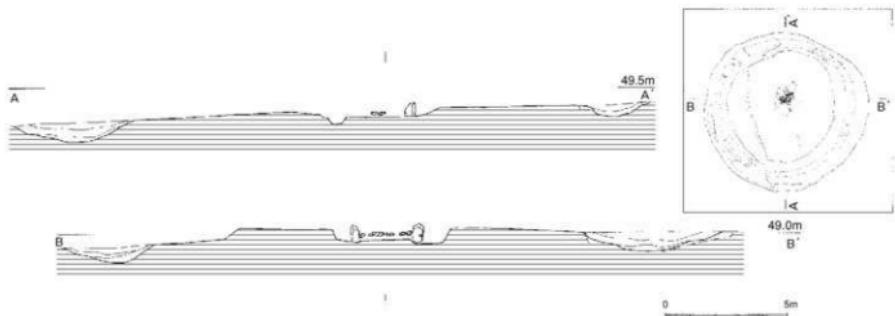


Fig. 27 SO03墳丘－主体部断面（1/200）

遺物出土状況 主体部は大きく破壊を受けていた関係で、ごくわずかの遺物が出土したのみであったが、SO03では周溝内から土器類を中心とした数多くの遺物が出土した。主体部（玄室内）からは須恵器（蓋杯）、鉄鎌、刀子、馬具（留金具・釦具）、耳環が出土した。遺物は玄室右側壁側に偏って存在し、左側にはわずかの遺物しか存在しない。それぞれ散乱してはいるが、その垂直分布をみれば床面付近に集中していることがわかる。また蓋杯は共に組み合った形で検出できた。尚、床面の一部に赤色顔料が分布する部分が存在する。

周溝からは須恵器、特に壺を中心とした遺物が出土している。遺物の出土位置は大きくA～Dの4群に分けることができる（Fig. 29）。A群からは蓋杯、壺、有蓋高杯、壺など、C群からは蓋杯、壺・壺など、B・D群からは壺を中心とした遺物が出土している。A・C群から多くの器種にわたる土器が出土していることは、これら群の位置が石室入口と近接していることに関係している。そして、A・C群とB・D群の遺物にみる違いはそれらが使用された祭祀が異なっていた可能性を示唆しているといえる。また、周溝出土遺物の器種構成をみると上で、ここではこれら遺物の中で、特にA群からまとまつた量の有蓋高杯が出土していることに注目したい（Fig. 32）。長脚の有蓋高杯は今回調査した諸古墳では、今回未報告であるSO01を除いて、あまり出土していない器種である。このことはSO03・01がこの古墳群内で突出した規模を有していることと無関係ではないだろう。この古墳群内では、有蓋高杯を使用した祭祀は群の中でも上位の階層に優先されるものであったことが、この事実から窺うことができる。

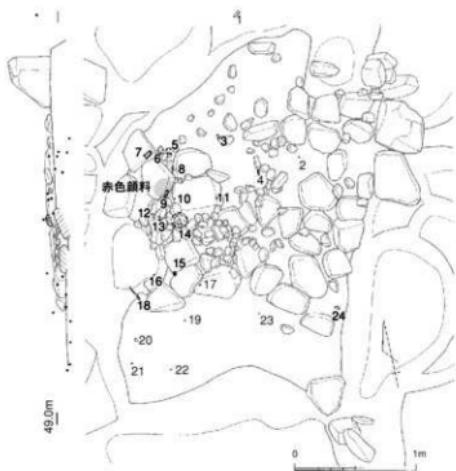


Fig. 28 SO03主体部内遺物出土状況（1/40）

出土遺物 大きく破壊を受けていたため、石室内から出土した遺物は少ない。主体部からは容器類（須恵器）、馬具、鉄鎌、刀子といった鉄製品、耳環、玉類が出土している（Fig. 30）。1は玄室床面上から出土した須恵器杯蓋である。口縁端部は段をなしている。2・3は石室部分の攪乱中から出土したものである。2は杯蓋で天井部と体部の境には弱い沈線が巡り、口縁端部はわずかに段をなす。3は有蓋高杯の蓋天井部である。4～8は馬具である。4～6は留金具である。鋸がひどく表面の状況は不明。7・8は轡片である。引手等の環状部分であろうか。9～12は鉄鎌である。長頭鎌の茎部分を中心とする破片で、11・12は樹皮巻きが残る。13～16は刀子である。16は大刀の鞘尻金具である。鋸がひどく遺存

状況も決して良くはないが、X線観察では弧文を描く象嵌が発見された。長さ3.3cm、幅2.8cmを測る。17～19は耳環である。18は銅芯鍍金、19は銅芯銀箔張鍍金のもので、19は外径2.2×2.3cm、内径1.2×1.25cm、18は現存径1.7×1.8cmを測る。17は金製の耳環である。外径1.75cm、内径1.35cmを測る。20～50は玉類である。20は管玉で、碧玉製。直径1.0cm、長さ2.6cmを測る。穿孔は一方からのみ。21～28は小玉である。すべてガラス製で濃紺色を呈する。29～50は栗玉である。ガラス製で、濃紺色を呈するもの（29～31）、紺色を呈するもの（41～46）、暗青色を呈するもの（32～34）、淡青色を呈するもの（35～39）、黄色を呈するもの（46～48）、赤色を呈するもの（49・50）がある。

周溝出土遺物は須恵器を中心とする（Fig. 31・32）。器種としては蓋杯、甕、器台、壺、平瓶、（以上Fig. 31）、有蓋高杯、甕類（以上Fig. 32）がある。1～6は蓋杯である。天井部と体部の境に区別を持たないが、3は口縁部に弱い段をなす。4は天井部にヘラ記号を有する。7～12は杯身である。立ち上がりは内傾し、口縁端部は段を持たない。底部には回転ヘラケズリを施す。10は内面にヘラ記号を有する。13・14は甕である。14は肩部に刺突文を施す。両者とも底部は静止ヘラケズリ。15は器台片である。透かしは三角形を呈し、2条の沈線の上下には波状文を施す。16は短頸壺である。胴部にはカキメ調整を施し、底部は回転ヘラケズリ調整。17は平瓶、18は台付壺である。18は口頭部を欠損する。肩部上側には2条の沈線を施し、その間を刺突文充填している。3～10は有蓋高杯、そして1・2はその蓋部である。1・2は天井部につまみを付し、口縁端部は段をなしている。有蓋高杯の杯部底面にはヘラケズリのもの（3～5・7）、カキメ調整のもの（6）がある。3～5・9・10は長脚二段透かし、9は下段のみ透かしを有する。透かしはいずれも三方より施される。Fig. 32-11・12は甕である。12は口縁部下に一条の突帶を付けた。朝倉産のものであろうか。

小結 SO03は墳径21mを測り、SO01と並んで当古墳群有数の規模を誇る古墳である。他の古墳群とは規模の上で隔絶しており、出土遺物や長脚の有蓋高杯を使用した祭祀の形態にもこのことは表されている。主体部等、SO03は大きく破壊を受けており、当古墳の築造時期を窺う手がかりは少ない。したがって、出土遺物より時期の問題について考えることにしたい。出土土器において、古式に相当するものは主体部内出

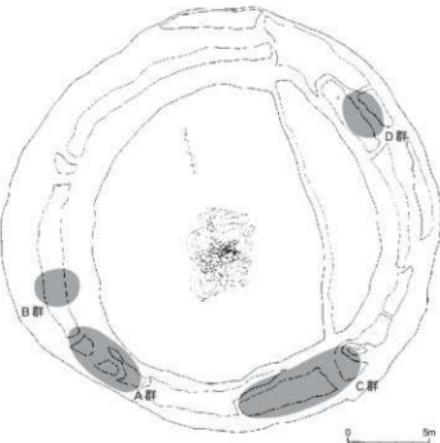


Fig. 29 SO03周溝内遺物出土状況 (1/300)

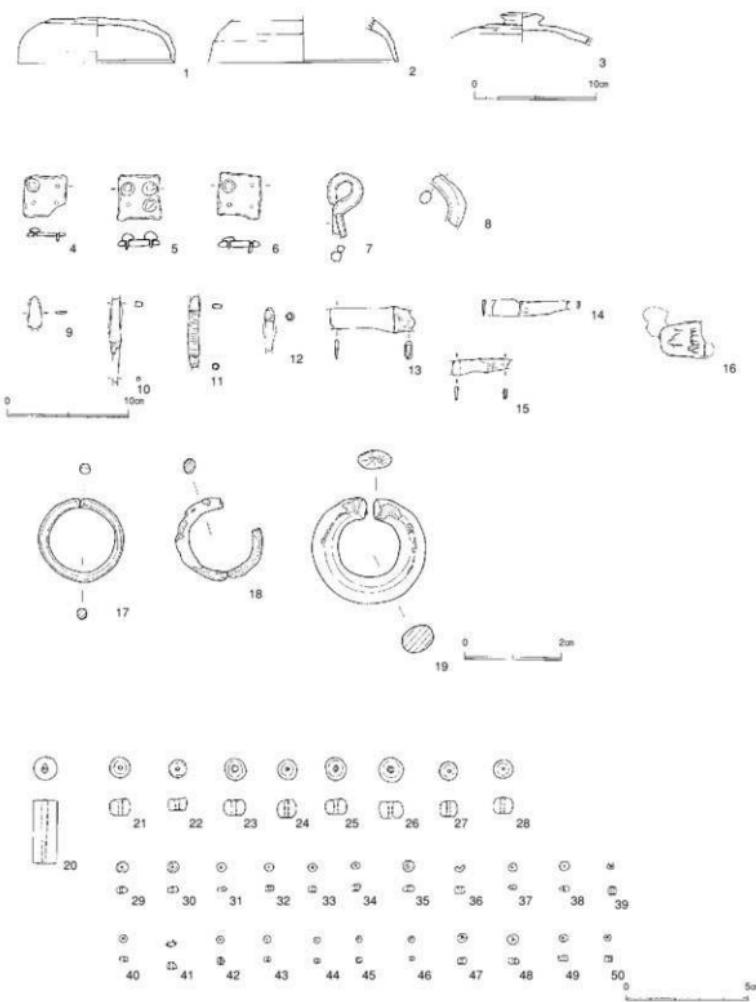


Fig. 30 SO03主体部内出土遺物 (1/1, 1/2, 1/4)

土の蓋杯や周溝出土の有蓋高杯などを挙げることができ、これらは概ねTK10型式期に位置づけることができるだろう。このような年代観で主体部や他の出土遺物をみても矛盾はなく、ここでは、SO03の築造年代をTK10型式期と考えておきたい。

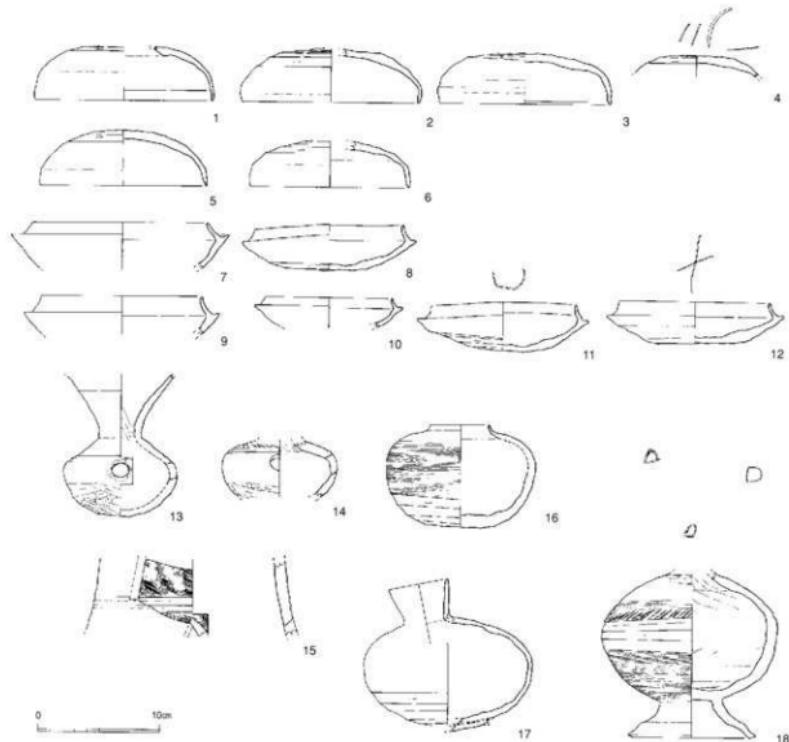


Fig. 31 SO03周溝内出土遺物 1 (1/4)

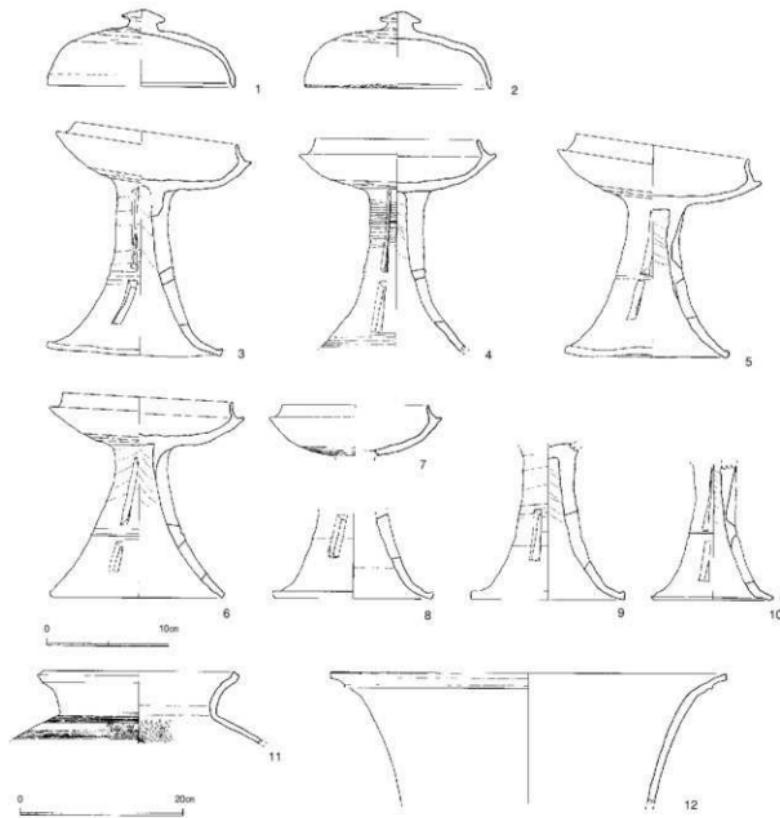


Fig.32 SO03周溝内出土遺物2 (1/4, 1/6)

Fig.28	Fig.30					
No.1 -	No.14	9 -	13	15 -	20	21 - 25
2 -		10 -	43	16 -	41	22 - 27
3 -	19	11 -	30	17 -	24	23 - 22
5 -	4	12 -	23	18 -	11	
6 -	5	13 -	17	19 -	44	
8 -	8	14 -	1	20 -	18	

SO04

墳丘 墳径 8 ~ 11m を測る円墳である (Fig. 33)。墳丘の西側は一部削り取られている。古墳には周溝が巡り、南側に存在する SO05周溝、東側に存在する SO03周溝と近接する。特に SO05周溝は間近に存在しており、本来はお互いに切り合っていた可能性もあるだろう。破壊された周溝西側の状況は不明だが、おそらく周溝は古墳の周囲を全周していたのだろう。周溝は幅1.5 ~ 2.5m、深さ30 ~ 70cm を測る。墳丘北側と南側では周溝は幅狭で浅くなる。墳丘は削平され、盛土は残っていない (Fig. 35)。主体部 横穴式石室であるが、石材の大半が抜き取られ、攢乱孔があるなど大きな破壊を受けており、石材及び敷石が部分的に残存しているに過ぎない (Fig. 34)。敷石の状況及びその周囲にある石材の抜き痕をみれば玄室の平面プランは長さ3 m、幅2 mほどに復元できるだろう。羨道部分の状況が不明だが、開口は南方向 (S - 8° - W) であろうか。ここでは石室北側を奥壁側として記述を進める。石室石材が残っているのは奥壁左右の隅部分、及び右側壁の攢乱孔中の石材のみであるが、この内原位置を保っているのは奥壁左右隅部分の石材1石ずつの計2石のみである。石材はすべて花崗岩である。敷石は、①20cm 程のやや大振りな扁平石材、②小石 からなる。石材②は広範囲に認められるが、石材①は石材②上にごく一部残存しているに過ぎない。これはまず第1面として、石材②を敷き詰めることにより床面が形成され、この後に石材①の配置がなされたことを示しているといえる。石材①による床面（第2面）が存在したかは不明だが、石材①の石敷き部分の表面は平滑に整えられており、その可能性は十分に考えられる。



Fig. 33 SO04墳丘 (1/200)

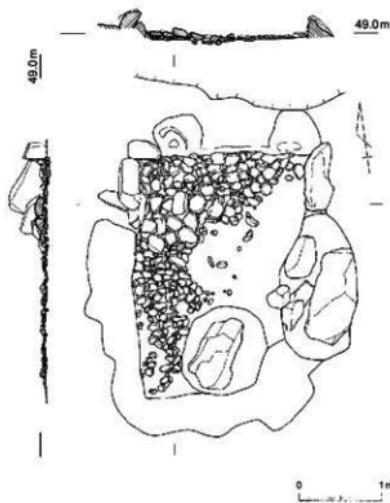


Fig. 34 SO04主体部 (1/60)

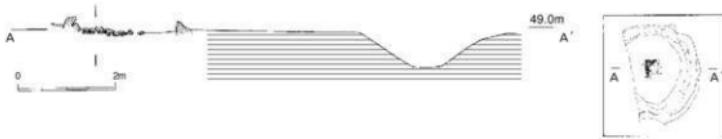


Fig. 35 SO04墳丘－主体部断面 (1/100)

遺物出土状況 主体部内からは須恵器及び鉄鏡や馬具等の残り、玉類が出土している (Fig. 36)。須恵器では蓋杯のみが6個体玄室奥壁そばの中央部にまとまって検出されている。組み合わさっているものではなくそれが単体で存在する。その内訳は杯蓋3、杯身3である。Fig. 36をみると、1-杯蓋 (Fig. 38-1), 2-杯身 (4), 3-杯蓋 (2), 4-杯身 (5), 5-杯身 (6), 6-杯蓋 (3)となり、身と蓋がそれぞれ近接した位置に配置されていることが分かる。もともとはセット関係を保って石室内に搬入されたのだろう。配置状態をみると、杯蓋は天井部を上に向けていたが杯身は伏せた状態であった。すべてが敷石(床面)の直上に位置しており、これは本来の配置を反映している可能性が高い。とすれば祭祀を行なう段階でこのような配置を意図して採ったことになり、この配置方法自体に意味があることが分かる。鉄鏡や馬具等の鉄製品は玄室右側壁側(東側)にまとまる傾向をみることができる。しかし、ほとんどすべての鉄製品が攪乱もしくはその影響を受けている位置での出土となっているため、この分布はある程度の傾向を示すに過ぎない。ただ攪乱中ではあるが、ちょうど右袖部の存在した位置に鉄製品が集中していることには注目して良いだろう。

先に述べたように、古墳は大きく破壊を受けていたので、石室内の掘り下げの際須恵器片や耳環、玉類等いくつかの遺物が出土している。そのすべてが主体部内に納められたものではないが、Fig. 36に示した遺物以上に副葬品が存在していたことは確実である。

周溝では、墳丘南側にまとまって遺物が出土している。大きく2つのまとまりがあり、それぞれを東からA、B群と呼ぶことにする (Fig. 37)。A群とB群は互いに接合関係にあるものがあり、この両者に厳密な意味での違いはない。この遺物群では壺の他に、蓋杯、甕、無蓋高杯や壺類、瓶類が出土している (Fig. 38)。特に蓋杯の出土は多い。主体部の記述の際、開口方向を南側としたが、ちょうどそれと対応する位置にA・B群が存在する。A・B群における出土土器の器種構成をみても、主体部の開口方向が南側であることを見唆しているといえる。

また、周溝出土遺物には須恵器などの土器類の他、鉄製品や玉類、耳環も含まれており、古墳破壊の際、遺物の混入しているようだ。

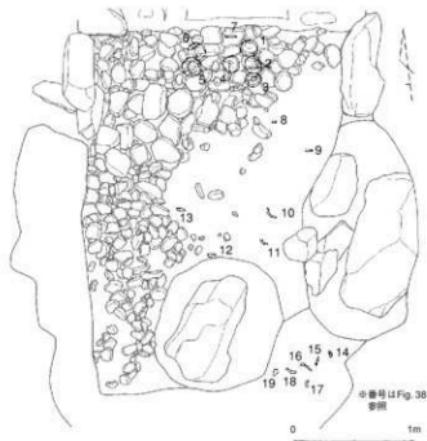


Fig. 36 SO04主体部内遺物出土状況 (1/40)

出土遺物 主体部内からは須恵器や馬具、鉄鎌、耳環、玉類が出土した (Fig. 38)。1～6は玄室床面上より出土した蓋杯である。杯蓋（1～3）では体部と天井部の境に沈線状の浅いくぼみを有し、口縁端部がわずかに段をなすもの（1・2）がある。杯身では立ち上がりがやや高く立ち上がり気味のもの（4）と立ち上がりが低く内傾するもの（5・6）がある。3・6は天井部または底部にヘラ記号を有する。

7～16は玄室掘り下げ中に出土したものである。したがって確実に主体部内出土と呼べる資料ではない。7・8は杯蓋である。7は体部と天井部の境に沈線状の浅いくぼみを有し、口縁端部がわずかに段をなす。9～14は杯身である。9は立ち上がりが高く直立し、口縁端部は浅い段を有するもので、口径（復元）は12cmを測る。15は鶴口頭部片である。端部はわずかに段をなし、シャープに仕上げられる。16は壺である。外面にはカキメ調整を施し、肩部下半にはタタキの痕跡が残る。

17～24は馬具群部分の残欠である。17～19は引手、23・24はその破片であろうか。20～22は素環の鏡板や遊環の破片であろう。25・26は鉄鎌で、茎部を中心とした破片である。27は耳環である。銅芯鍛金のもので、現存径2.1×2.1cmを測る。28は管玉。ガラス製で濃紺色を呈する。29～36は小玉である。ガラス製で濃紺色を呈する。

周溝からは須恵器、そして鉄製品、耳環、小玉が出土した (Fig. 39)。鉄製品と耳環、小玉は主体部破壊の際の混入品であろう。1は有蓋高杯蓋部である。天井部と体部の境には数条の沈線を巡らす。2～16は杯蓋である。2～6は蓋杯で、2は体部と天井部の境に沈線を巡らす。3は天井部に静止ヘラケズリを施す。7～16は杯身である。7は立ち上がりが高く直立気味であるが、他は低く内傾する。いずれの杯身も口縁端部は段をなさず、丸く収める。16は底部にヘラ記号を有する。17は鶴である。肩部に刺突文を施し、底部は静止ヘラケズリ調整。18・19は無蓋高杯である。19は脚部中央に2条の沈線を持つ。20は脚付広口壺である。22は短頸壺で、肩部には刺突文を2段に渡って施している。23は平瓶の口頭部片で、口頭部外面にはヘラ記号を有する。24は壺で、25とは同一個体である可能性が高い。外面全体に渡ってカキメ調整を施す。26は馬具で、轡の一部であろうか。外径5.3～6.0cmの環状を呈する。27は耳環である。金製で、外径1.4×1.5cm、内径1.1×1.2cmを測る。28は小玉である。ガラス製で濃紺色を呈する。

小結 SO04は墳径8～11mを測る円墳であり、今回調査した古墳の中では普通の規模である。主体部である横穴式石室はほとんど破壊されていたが、幸い床面は半ば程が遺存しており、敷石も良好な状態で検出できた。床面に敷石を持つことも当古墳群内通有の特徴であるといえる。擾乱が激しいため、主体部の構造をはっきりとした形で復元することは困難である。ただ、石室入口側にしっかりとした石室石材の堀方が存在しなかったことは注目すべきである。このことから考えれば、SO04主体部の横穴式石室は漢道を持たない、例えは入口側に前部を持つだけの構造であった可能性が高いだろう。

また、石室があれだけの破壊を受けていたのもかかわらず、室内にはいくつか当時の状況を窺うことのできる遺物が残っていた。特に玄室奥壁側で検出した副葬土器群から、蓋杯のみを玄室奥壁側へ伏せた形で安置するという供獻方法を知ることができたのは大きな成果であるといえる。また石室入口側の周溝部分でも須恵器を中心とした、まとまった量の遺物の出土をみた。

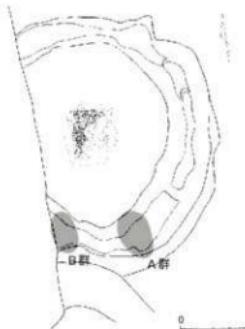


Fig. 37 SO04周溝内遺物出土状況 (1/300)

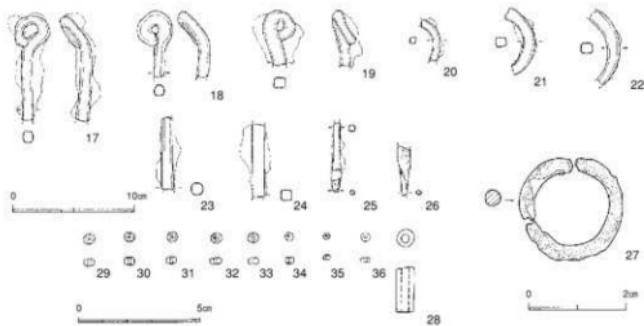
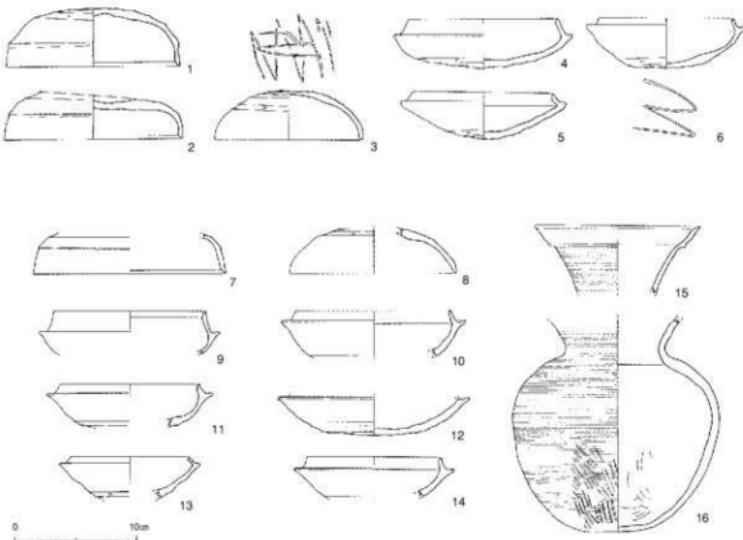


Fig. 36

Fig. 38

1	-	1	8	-	27	15	-	25
2	-	4	9	-	26	16	-	17
3	-	2	10	-	22	17	-	20
4	-	5	11	-	21	18	-	23
5	-	6	12	-	24	19	-	19
6	-	3	13	-	18			

Fig. 38 SO04主体部内出土遺物 (1/2, 1/4)

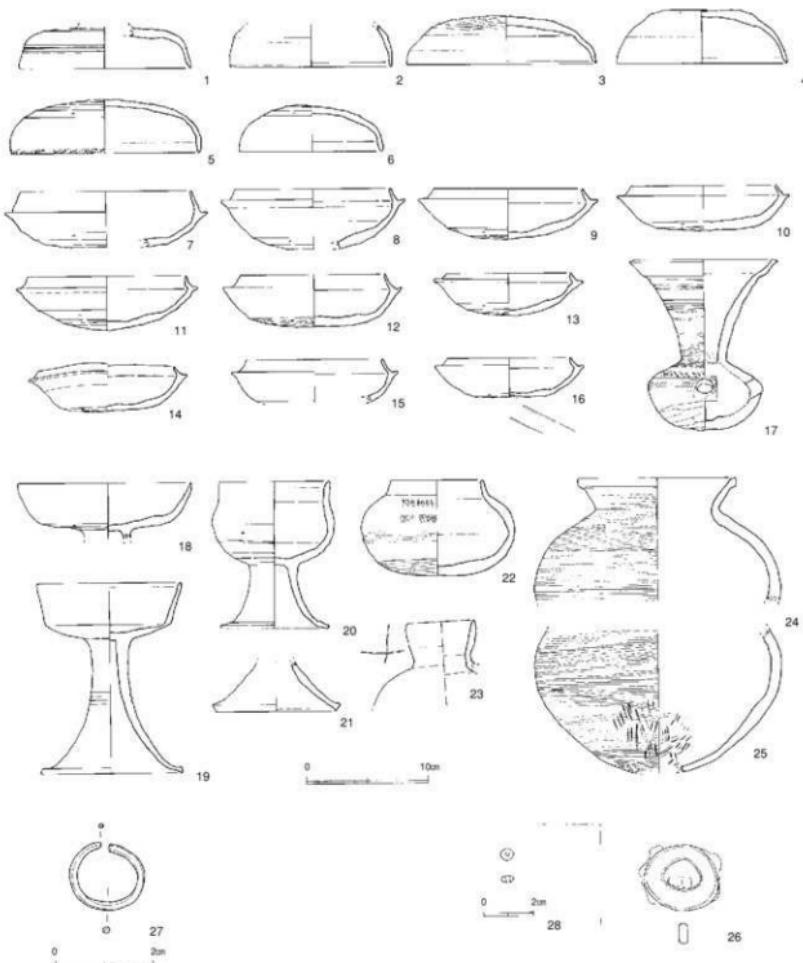


Fig. 39 SO04周溝内出土遺物 (1/2, 1/4)

では、SO04の築造年代について、出土土器より考えてみることにしたい。玄室床面から出土した土器で古相のものは、TK10型式期の特徴を備えている。周溝出土の土器もまた同様であるといえる。この年代は主体部の構造、その他の遺物とも矛盾するものではなく、ここではSO04の築造年代をTK10型式期に位置づけておくことにしたい。玄室掘り下げ中に出土した土器の中には1点、やや遡る可能性のある個体も含まれているが (Fig. 38-9), これをもって築造年代を古くする必要性はないだろう。

SO05

墳丘 墳径12mを測る円墳である (Fig. 40)。墳丘北西側は崖状をなし、一部が削り取られる。古墳の周囲には周溝が巡り、その北側はSO04と接する。周溝は幅1~2.8m、深さ40~50cmを測り、古墳の周囲を全周せず南西側の一部が途切れ、いわゆる馬蹄形の形態を探る。これは主体部入口の方向 (後述) と一致しており、主体部へといたる通路として機能していたのだろう。この通路部分は最も狭い部分で80cmである。また、通路西側の周溝は向きを変え、一部が主体部の方へと伸びている。周辺は削平を受けており、調査着手時には墳丘盛土は全く認められなかつた。しかし、調査開始時の重機による表土剥ぎの際、わずかに残っていた盛土を削り取ってしまった可能性も否定できない。

主体部 横穴式石室であり、南西方向 ($S - 18^\circ - W$) に開口する (Fig. 41)。石室壁体は基底部の1段目を残すのみで、他はすべて失われている。使用石材は花崗岩である。玄室は長さ3.7m、幅2.2~2mの長方形プランで、中央部がわずかにふくらみを持つ。高さ50~80cm、厚さ20cm程の扁平石材を立てて使用していること、左側壁6石、右側壁8石、奥壁3石と多くの石材を各壁に用いていること、以上の2点がこの横穴式石室の特徴であるといえる。左右の袖部は2石ずつの立石を用い、またその間には一段低い石材を横位に立てて樋石となしている。玄門入口の幅は60cm程であり、どこまで入口として機能していたかは考える必要がある。残存する石材の上面は右側壁側では比較的平坦となっているが、前壁側、左側壁側では凹凸が激しい。また使用されている石材の薄さを考えるとこの上に塊石積みを行っていたとは考えられず、2段目以降の石積みは板状を呈した石材の小口積みを行っていたと考えるべきだろう。羨道等を構成する石材は残っておらず、またその抜き痕も検出できなかつた。したがつてその有無も含めて詳細は不明である。

玄室の床面には敷石が施されていた (Fig. 42)。敷石は計2面有り、それぞれの敷石は土面の高さをみても平坦をなしており、この石室では大きく計2面の床面が存在したといえるだろう。ここでは上面を第2面、下面を第1面と呼ぶことにする。第1面は中央部に空白が認められるが、ほぼ全面に敷石が遺存している。小石と10~20cm程の石材を組み合わせて使用するが、中央部には小石の使用がやや目立つ。これは一部第2面との混在が生じているためである可能性もある。第2面には第1面に比して大振りな石材を使用する。奥壁側と前壁側の敷石は認められない。第1面と第2面にはほとんど間層を挟んでおらず、第1面の直上に第2面の敷石を行っている。

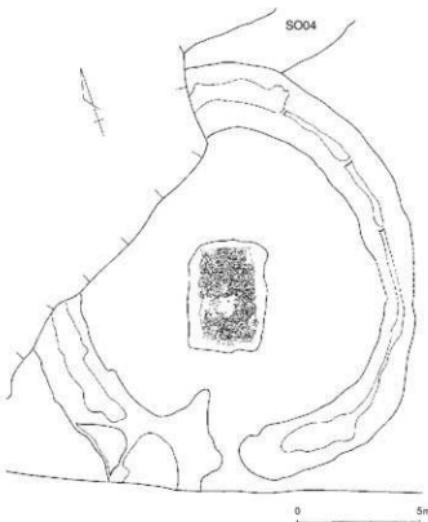


Fig. 40 SO05墳丘 (1/200)

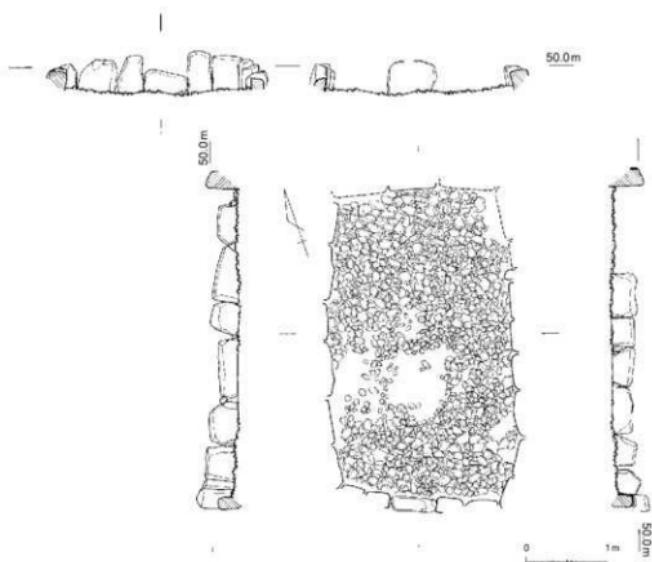


Fig. 41 SO05主体部 (1/60)

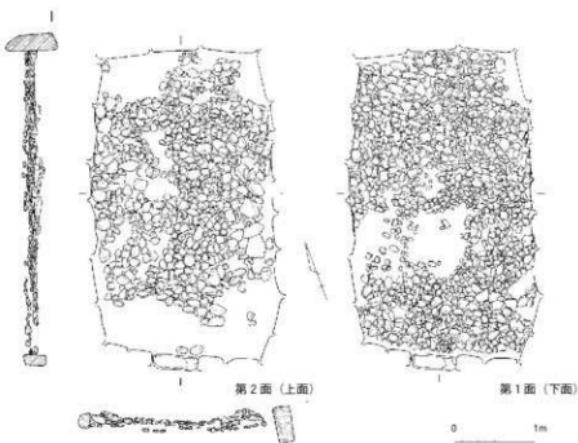


Fig. 42 SO05主体部敷石 (1/60)

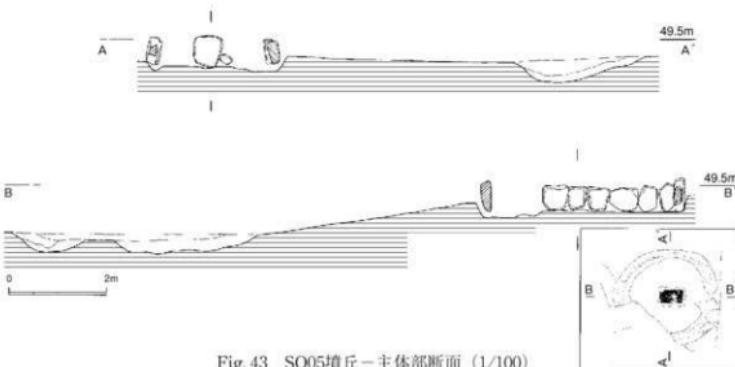


Fig. 43 SO05墳丘－主体部断面 (1/100)

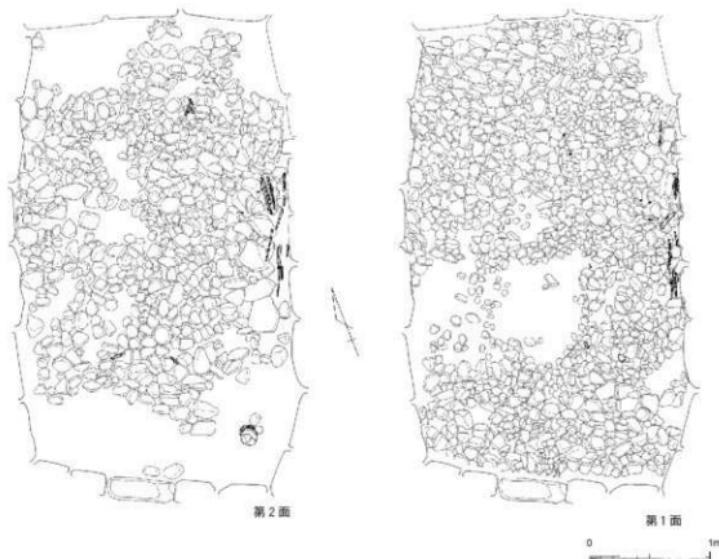


Fig. 44 SO05主体部内遺物出土状況 (1/40)

最後に墳丘と主体部の状況についてみておくことにしたい (Fig. 43)。検出した古墳の外形はすべて地山の削り出しに部分であり、先にも述べたように墳丘の盛土は確認できなかった。また周溝底部は北側に向かって低くなっている、これは旧来の地形の傾斜も反映されているのだろう。石室には深さ40~50cm程の墓坑掘り込みが認められる。当然実際は更に深いものであったといえるが、2段目以降の石積みが板状石材の小口積みであるという筆者の想定が正しければ、この掘り込み部分は1段目石材上端のレベルを超えることはないだろう。つまり、2段目の石積みと同時に墳丘盛土が行われていたのだろう。

遺物出土状況 玄室では第1面、第2面それぞれにおいて遺物が出土した。第1面からは鉄鎌、刀子、耳環、玉類、鉄滓が、第2面からは鉄鎌、刀子、玉類、須恵器(蓋杯)が出土している。鉄鎌を中心とした鉄製品の出土が多い。また、第1・2面のどちらにおいても遺物の出土は玄室の右側壁側半分にまとまり、特に鉄鎌等の鉄製品は右側壁中央の壁際に集中している。第2面出土の須恵器蓋杯は、セットの状態で右袖部際に置かれていた。

周溝からは通路部分の両側で須恵器を中心とする容器類が大量に出土した。通路より西側をA群、東側をB群とする。量的にはA群出土の土器の方が多い。A群、B群出土土器の器種構成に大きな違いはない、共に蓋杯、甕、壺類、瓶類、甕などが出土している。特に蓋杯や甕の出土が目立つ。また、周溝の一部が削り取られているが、これによりいくつか遺物も失われているようだ。

出土遺物 玄室内からは鉄鎌を中心とする鉄製品を中心とし、須恵器、耳環、玉類が出土している(Fig. 46)。1・2は須恵器蓋杯である。3~27は鉄鎌である。3・4は脇抉三角形鎌、5・6は三角形鎌、7は主頭鎌である。8~27は長頭鎌である。鎌身部が長三角形を呈するもののほか、片刃で逆刺を持つものがある(27)。28は鉄鎌である。29は小刀で、先端は両刃となっている。30~34は刀子で、一部に木質部分を残すものがある。35は耳環である。銀製で鍍金してあった可能性がある。36は管玉。ガラス製で、淡青緑色を呈する。直径0.7cm、長さ1.6cmを測る。37~62は小玉である。47~62は第1面から出土したものである。淡青色を呈するもの(37~44、47・57)、紺色を呈するもの(45、58・59)、淡緑色を呈するもの(46、60~62)がある。

周溝からは須恵器を中心とした遺物が出土した(Fig. 47・48)。Fig. 47は蓋杯である。1~17は杯蓋である。口縁端部が弱い段をなすもの(1~6、9、10、12~14)とそうでないものがあり、段をなすもので1・2、5は体部と天井部の境に浅い段をなす。11は内面、12・13は外面にそれぞれヘラ記号を有する。18~24は杯身である。立ち上がりが高く、やや直立気味の個体が存在するが(18・19・21)、この杯身の中でも古く位置づけることのできるものといえる。44は口縁部を打ち欠いている。26・33・43は底部にヘラ記号を有する。Fig. 48では甕、壺類甕等その他の器種を示している。1~6は甕である。3は頭部が比較的大い個体で、肩部には2条の沈線を巡らし、その上下に刺突文を施す。7は台付甕である。台部を欠損する。口頭部は緩やかに外反し、口縁部付近で真っ直ぐに立ち上がる。肩部には波状文を施す。8~10・13は短頸甕である。10は完形で、胴部上半にはカキメ調整を行い、底部静止ヘラケズリを施す。13は胴部中央にカキメ調整を施し、頭部と胴部半ばに刺突文を施す。肩部にヘラ記号を有する。12は提瓶である。環状の把手を持つ。14~16は甕である。

小結 SO05は径12mを測る円墳で、周溝が全周せず、馬蹄形を呈する点を特徴とする。他の古墳と同様に墳丘が削平され、主体部である横穴式石室の遺存状況も悪い。しかし、先に述べたように横穴式石室の構造は特徴的なものであり、その構造的な系譜が注目される。入口部分の構造は不明だが、石材の抜き痕が全く検出されない状況をみると、羨道を付設しない、前庭状の入口構造を持った横穴式石室である可能性が高い。副葬品をみると、①容器類の副葬が少ない ②鉄鎌を中心とした鉄製品の副葬量が多い という特徴を挙げることができる。また、多くの鉄製品の中には馬具が含まれていない。

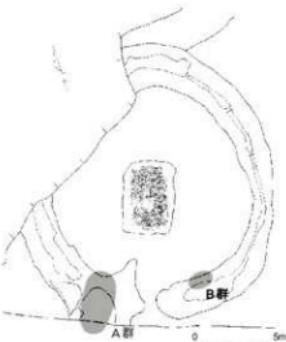


Fig. 45 SO05周溝内遺物出土状況 (1/300)

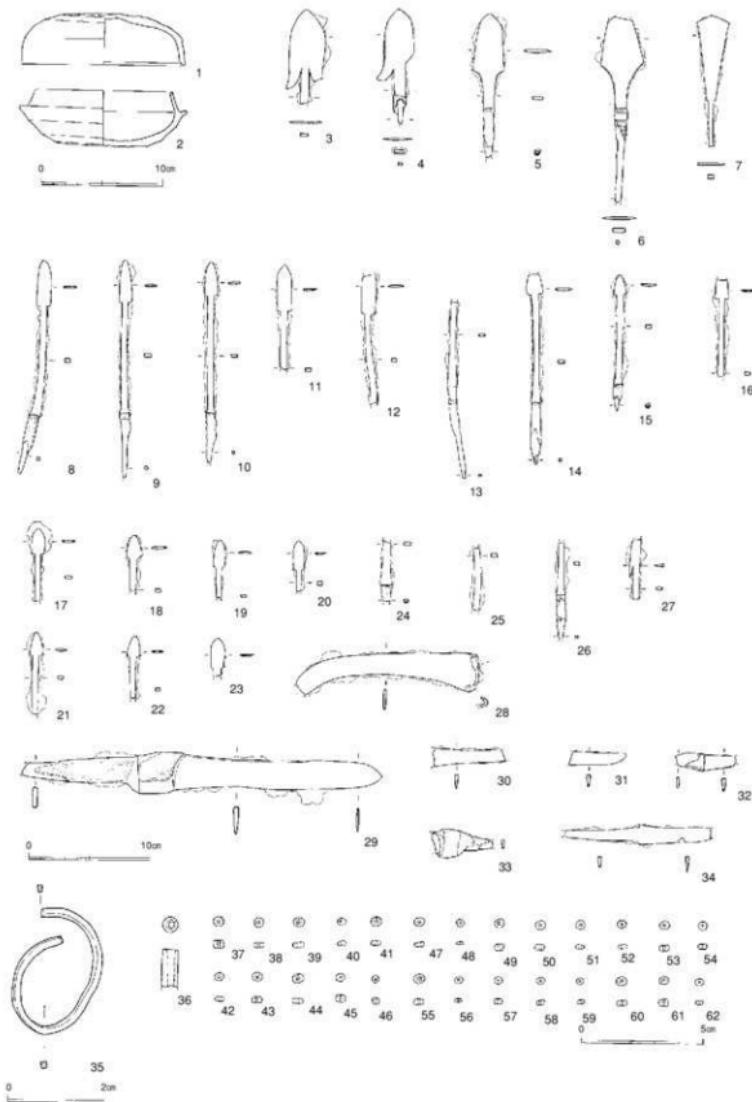


Fig. 46 SO05主体部内出土遺物 (1/1, 1/2, 1/4)

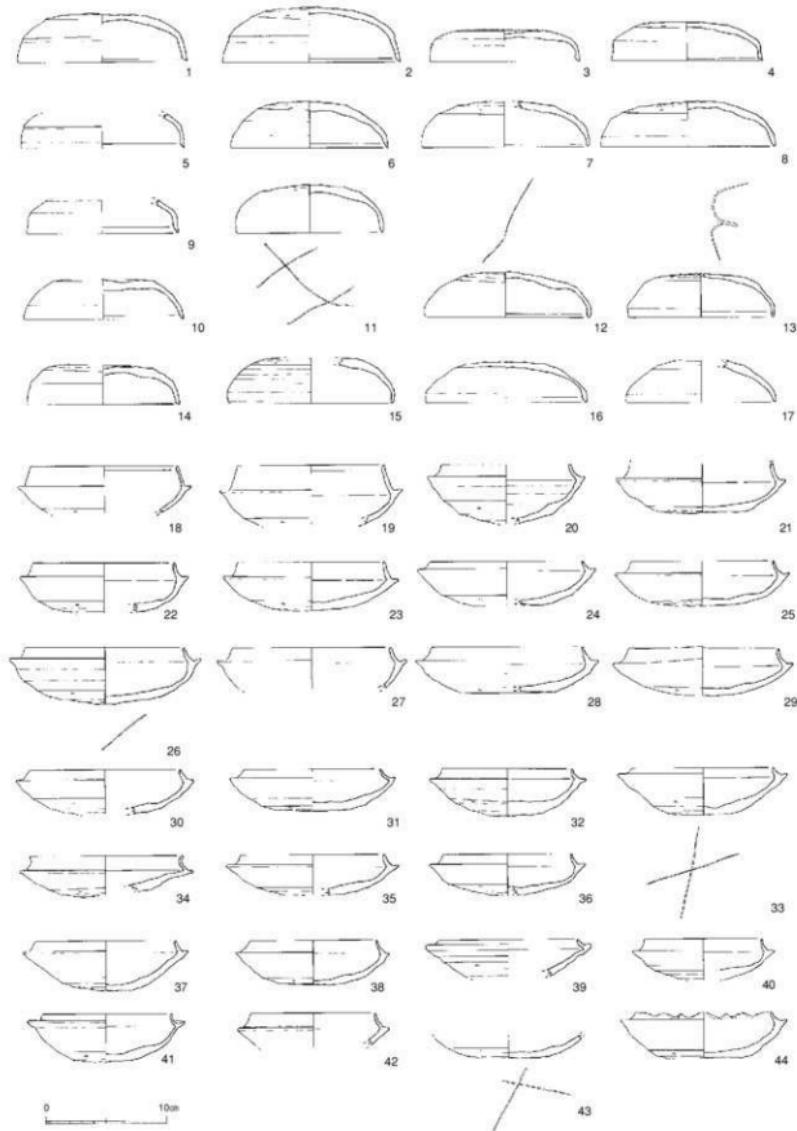


Fig. 47 SO5周溝出土遺物 1 (1/4)

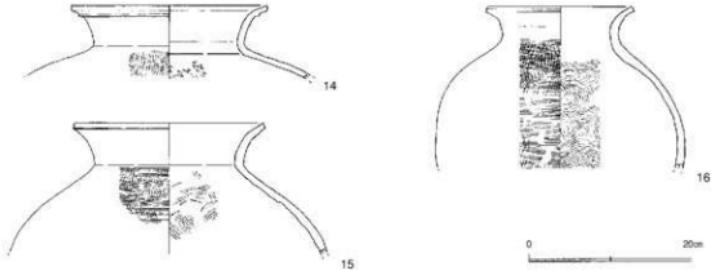
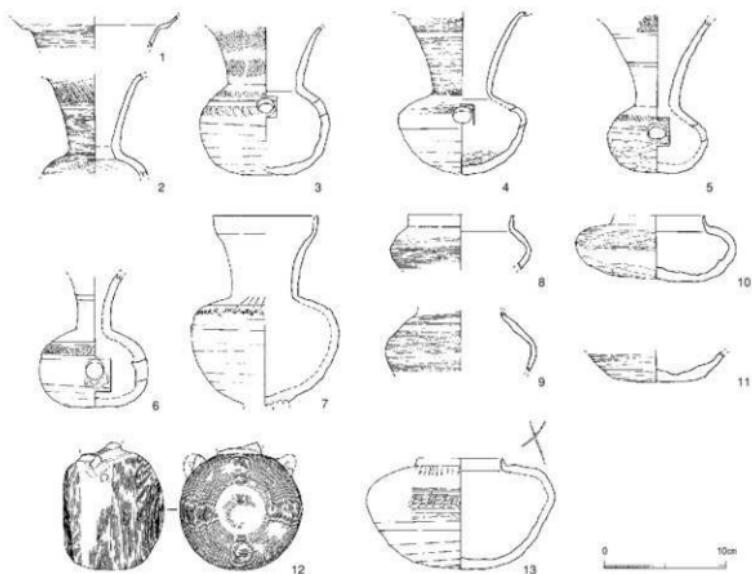


Fig. 48 SO05周溝出土遺物2 (1/4, 1/6)

最後にSO05の築造時期について述べておくことにしたい。主体部内から出土した1組の蓋杯はTK10型式期に位置づけられるもので、周溝出土の土器に関して古相を示すものは、おおむねこの時期に位置づけることができる。他の要素をみても矛盾するものではなく、SO05の築造時期はTK10型式期に位置づけることができるだろう。それではSO04との時間的な前後関係が問題となるだろう。出土土器の型式に大きな開きはなく、近接した段階に築造されていることは確かであろう。先後関係については出土遺物や石室構造の詳細な分析を行う必要があり、この問題については機会を改めて述べることにする。

SO06

墳丘 墳径12~13mを測る円墳である。ほぼ正円を描く。墳丘の削平が激しく、墳丘盛土は失われている。墳丘の半ばを東西方向に段状の落ち込みが走っているが、これは後世における耕作時の畦痕である。古墳の北側1~2mの位置に近接してSO07が存在する。周溝は古墳の周囲を全周しており、西側のそれは一部墳丘中心へと向けて1m程の張り出しをみせる。この方向には主体部である横穴式石室が存在しており、この部分は墓道として機能していたようだ。周溝は幅1.5~2m、深さは20cm程しか残っていない。

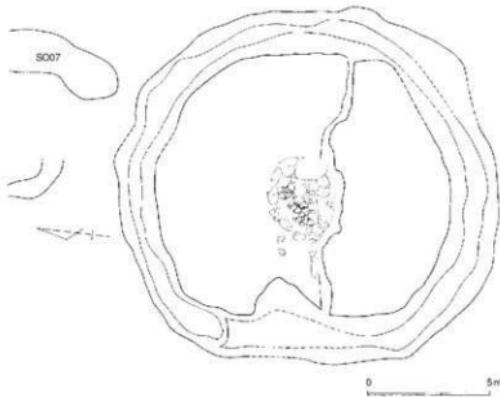


Fig. 49 SO06墳丘 (1/200)

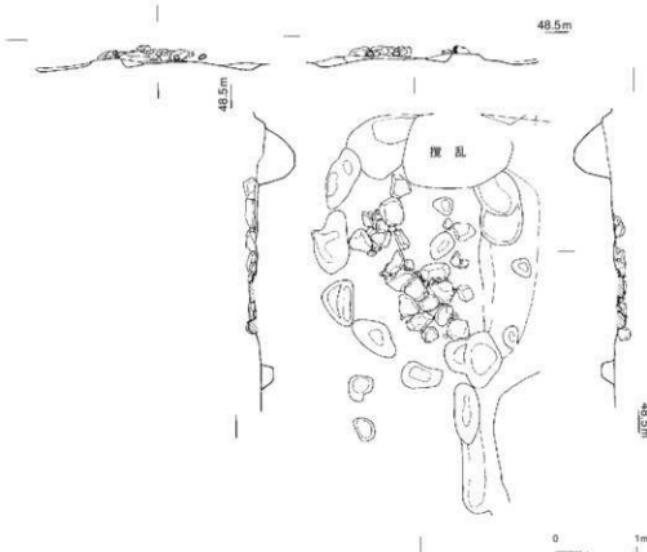


Fig. 50 SO06主体部 (1/60)

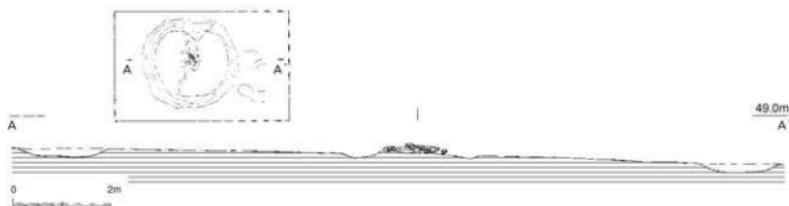


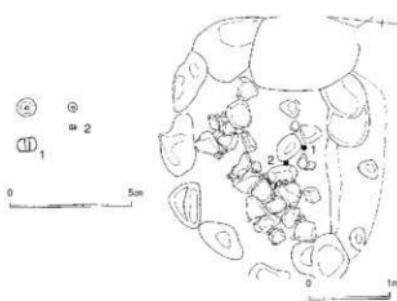
Fig. 51 SO06墳丘－主体部断面 (1/60)

主体部 SO06墳丘上の遺構検出中、墳丘の中心位置に石敷がまとまって検出された。その周囲には石材の抜き痕と考えられる掘り込みが方形に巡っていることが確認でき、この石敷が横穴式石室玄室部分の敷石であることが明らかとなった。石材の掘り込みは更に西側においてもみることができ、この部分が羨道等の通路部分に当たるものとみなすことができる。したがってSO06の主体部は、西方向 ($S-83^{\circ}-W$)に向かって開口する横穴式石室であるといえよう (Fig. 50)。すでに明らかなように、この横穴式石室は大きく破壊を受けており、石室石材は全く残っておらず、敷石の一部を残すのみである。石室本来の姿を示す情報はごく少ないが、できる限りの復元を試みることにする。

敷石の遺存状況や石材抜き痕の状況をみれば、玄室の平面プランは長さ 2 m 以上、幅 1.6 m 程に復元できる。玄室の石敷には主として大きさ 20~30 cm 程のやや扁平な塊石を使用し、その間には小石が若干量認められる。残存部分において確認できる石敷は一面のみである。敷石材は平坦面を上へと向けており、床として平滑に整えていたことが窺える。更に石材抜き痕をみると、石敷の周囲を取り囲んでいた抜き痕が西側で途切れ、更に若干ずれた位置に抜き痕が存在していることが分かる。この部分が玄室入口、そしてずれた位置に存在する抜き痕がその樋石部分に相当するのだろう。とすれば玄門幅は 60 cm 程に復元できる。石材の抜き痕をみると、羨道部分は玄門部から更に 1 m 程延びて存在していたようだ。羨道幅は 1 m 程と玄門幅に比して広く、玄門部はやや内側へ張り出していたのであろう。第 2 樋石の存在は石材の抜き痕からは確認できなかった。羨道部分より先の構造は不明である。羨道状、もしくは前庭部状のものが存在していた可能性は高い。

遺物出土状況 主体部は大きく破壊を受けていたため、内部からの遺物出土はごく少ない。ただ、敷石の間から、玉類が 2 点出土した (Fig. 52)。

周溝からは須恵器を中心とする土器類が比較的多く出土した。出土位置は石室入口付近を中心として広がり、特に周溝北西側と南西側に集中する。前者を A 群、後者を B 群としよう (Fig. 53)。A・B 群共に蓋杯、高杯、壺類、甕類などが出土しており、器種構成に大きな違いはない (Fig. 54)。尚、A 群からは滑石製の紡錘車が 3 点出土している。



出土遺物 主体部内からは小玉1点、粟玉1点がそれぞれ出土した(Fig. 52)。1はガラス製の小玉で、濃緑色を呈する。2はガラス製の粟玉で、淡緑色を呈する。

周溝からは、須恵器を中心とした容器類と紡錘車が出土した(Fig. 54)。1~10は杯蓋である。口縁端部に浅い段をなすもの(1~4, 7), 端部やや上に沈線を巡らすもの(6・8), 丸く収めるもの(5・9・10)がある。4は天井部と体部との境に沈線を持つ。11・12は短頭壺等の蓋である。口径10cm程度と小形で、口縁端部には段を有する。13~22は杯身である。いずれの個体も口縁部は丸く収める。20は底部にヘラ記号を有する。

23・24は有蓋高杯蓋部である。天井部につまみを付し、

天井部にはカキメ調整を施す。体部の半ばには、沈線状の浅いくぼみを有し、口縁端部は段をなす。25~29は高杯脚部である。25はおそらく長脚二段透かしになると考えられる。透かしの方向は三方。26~29は短脚の高杯脚部である。脚部は中央にふくらみを持ち、端部は短く水平方向に張り出しうみせる(端部が段をなす)。外面にはカキメ調整を施し、短く幅狭な方形の透かしを脚部上半に三方向から穿つ。30~33は短頭壺である。30・31は胴部中央から肩部にかけてカキメ調整を行う。31の底部は回転ヘラケズリを施す。32は肩部にカキメ調整を行い、その上に刺突文を施す。底部には回転ヘラケズリ調整。33は大形の短頭壺である。胴部上半にはカキメ調整を行う。外面、内面共にタタキの痕跡が残る。35は長頭壺である。胴部中央にカキメ調整を行い、底部は回転ヘラケズリ調整。36~38は紡錘車である。いずれも滑石製。38の側面には条痕が目立つ。36は幅4.8, 厚さ1.8cm, 37は幅4.4cm, 厚さ1.4cm, 38は幅4.1cm, 厚さ1.5cmをそれぞれ測る。

小結 SO06は墳径12~13mを測る円墳である。削平が激しく周溝もごく浅くしか残っていなかったが、周溝はきれいな円形を描き、墳丘規模は正確に把握することができた。主体部である横穴式石室の破壊が特にひどく敷石の一部しか残っていなかったが、石室石材の抜き痕からおおよその形態をつかむことができた。通路部分の構造を押さえることができたのは大きな成果である。ところで、文中ではこの通路部分を前庭部ではなく、羨道、つまり有天井部分であると記した。その根拠を以下に述べることにしたい。SO06主体部の検討で明らかになった石室平面プランを今回調査した他の諸古墳主体部を比較してみると、SO02とSO08主体部(後述)の平面プランと類似していることが分かる。SO02と08の主体部はそれぞれ天井部を失っているが、通路部分の石積みを見る限り、この部分には天井を有していたこと、つまり羨道であったことは明らかである。したがって、このSO06主体部においても有羨道化した横穴式石室であると判断した。今回の調査では判明しなかったが、SO02・08主体部、そして周辺における横穴式石室の状況をみても、SO06の横穴式石室に第2樋石が存在した可能性は高い。SO02・SO08の両横穴式石室をみても1m以上の石積み部分が延びており、SO06においても通路部分が1m以上延びていることも十分考えられる。しかし、明確な石材の堀方をみることができなかつたことを考えれば、先の部分は天井を持たない前庭部状の施設であったのだろう。

最後にSO06主体部の築造時期について考えることにしたい。周溝から出土した須恵器をみればその古相のものはTK10型式期に位置づけることができる。これは、主体部の平面形が類似するSO02とSO08(後述)の年代を考えても問題のあるものではない。では、SO02・SO08とSO06の先後関係が問題となるが、このことに関してはまた機会を改めて述べることにしたい。

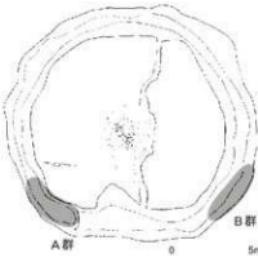


Fig. 53 SO06周溝内遺物出土状況(1/300)

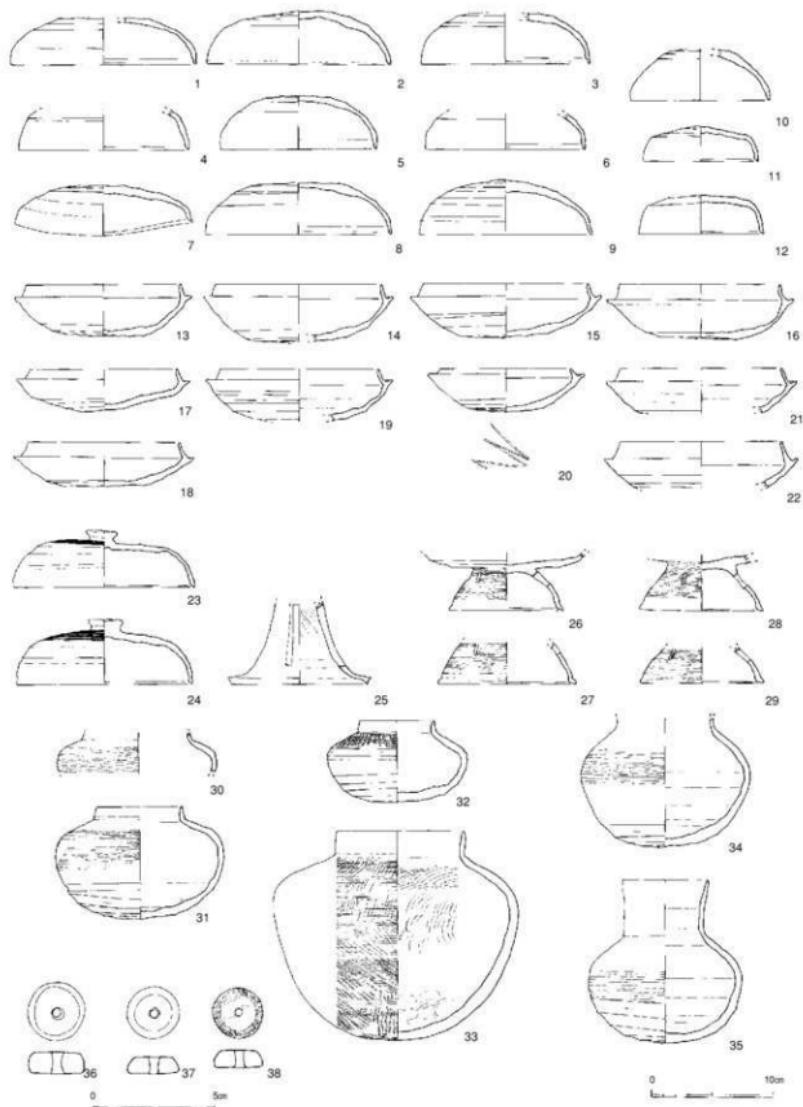


Fig. 54 SO06周溝出土遺物 (1/2, 1/4)

SO07

墳丘 墳径 5 m ほどの小形の円墳である (Fig. 55)。他の古墳と同様墳丘は削平され、盛土は残っていないかった。南側に近接して SO06 が存在する。古墳の周囲には周溝が巡るが、全周せず南側の部分で途切れている。いわゆる馬蹄形の周溝形態を示している。周溝は西側で幅 0.8m、深さ 20cm 程、東側で幅 1.7m、深さ 30cm 程と東西で大きく差が生じている。地山と周溝内埋土との違いは少なく、東側部分の周溝に関しては掘りすぎている可能性は否定できない。本来は西側と同じ規模の周溝が東側にも巡っていたのかもしれないが、周溝が馬蹄形を呈すること、そして墳丘規模に閲しても大きな修正をする必要はないだろう。

主体部 主体部は南方向 (S -14° - W) に向かって

開口する単室構造の横穴式石室である (Fig. 56)。使用石材は花崗岩。他の古墳と比しても遺存状況は比較的良い。玄室は長さ 1.4m、幅 1.1~0.8m を測るやや胴張りの長方形プランで、左側袖部の張り出しの少ない、片袖様の構造を探る。なお、右袖部隅には副葬された須恵器の一群が検出された (Fig. 59)。玄室各壁には 1~2 段の石積みが残る。基底部には左右側壁では石材を横位に据えているが、奥壁では縦位に据える部分がある。2段目の石積みは右側壁側に残る。2段目にはやや小振りな石を配しているが、南側の 1 石のみは基底部石材をも超える大形石材を用いている。玄室の床面には敷石を有する。20~30cm の大振りな石材を奥壁側と前壁側に敷き、中央部にはやや小振りな石材を用いている。現状では敷石は 1 面のみである。玄門部には欄石を有する。玄門幅は 40cm 程のごく狭いものである。この玄門部には閉塞石



Fig. 55 SO07 墳丘 (1/200)

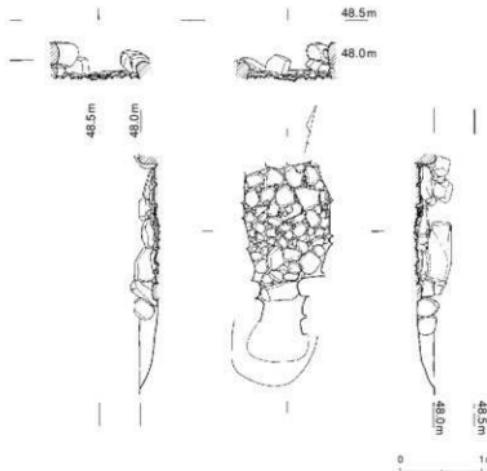


Fig. 56 SO07 主体部 (1/60)

が残っていた (Fig. 57)。一部が認められるに過ぎないが、ちょうど欄石の部分をやや大きめの塊石によって封鎖していることが分かる。閉塞石は床面より離れており、閉塞は石の他、土も加えて行っていたのであろう。追葬面、及び閉塞行為に伴う遺物の出土はなかった。

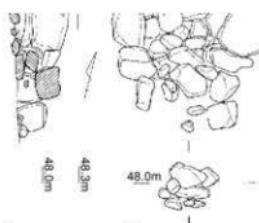


Fig. 57 SO07 主体部閉塞 (1/40)

通路部分には左側1石、右側2石の壁体が存在する。またその床面は玄室へ向かって緩やかに下るスロープ状をなしている。玄門部で閉塞を行うこと、スロープ状に下る通路床面を有すること、以上の2点を考え合わせれば、この部分には天井石が載っていなかった、つまり羨道ではなかつたと考えることができる。この横穴式石室の通路部分は前部状を呈していたのであろう。

最後に墳丘と石室の構築状況について触れておくことにしたい (Fig. 58)。図に示したように墳丘の盛土部分は残っていない。石室構築に際し、20~30cmの墓坑を掘削していることが分かる。当然上端は削られており、本来墓坑の掘り込み面はもっと高い位置にあったはずであるから、墓坑内では1段目、もしくは一部2段目の石積みが行われていたのだろう。したがって1~2段目の石積みが終了し、3段目以降の石積みと一緒に墳丘構築が行われているといえる。

遺物出土状況 主体部内からは玄室右袖部隅に蓋杯2と提瓶、奥壁左隅からは鉄鏃の残片が出土している。蓋杯は身と蓋がセットになり置かれている。提瓶は当初から口頭部を欠いた状態で出土していた。尚、石室内掘り下げ中の排土からもいくつか須恵器片が出土しているが、必ずしもこの主体部に伴うものではない。周溝からはあまり多くの遺物は出土しなかった。ただ、周溝の南西側よ

り甕が1点出土している (Fig. 60)。甕は周溝の上部より出土したもので、検出時は割れていたが、ほぼ完形に復元できた (Fig. 62)。

確実にSO07に伴うものは不明であるが、周辺全体の古墳配置をみるとやはりSO07に伴うものと考える方が良いだろう。ただ、他にこの周辺から須恵器等の遺物の出土ではなく、この甕が何らかの流れ込みにより混入したものである可能性までは否定できない。

出土遺物 石室内床面からは須恵器蓋杯2、提瓶1、鉄鏃残片1が出土し、石室内の排土中からは須恵器を中心としたいくつかの遺物が出土した (Fig. 61)。1~4は蓋杯である。1と2、3と4がそれぞれセット関係にある。

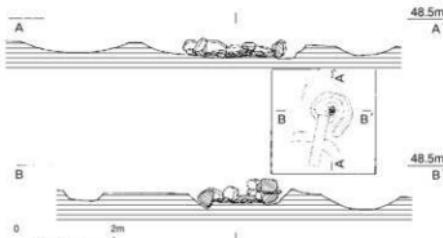


Fig. 58 SO07墳丘－主体部断面 (1/100)

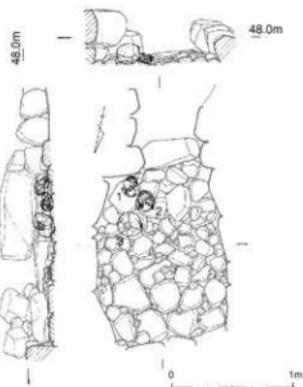


Fig. 59 主体部内遺物出土状況 (1/40)

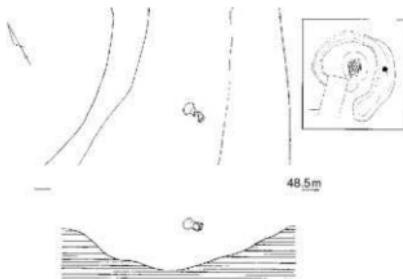


Fig. 60 SO07周溝内遺物出土状況 (1/40)

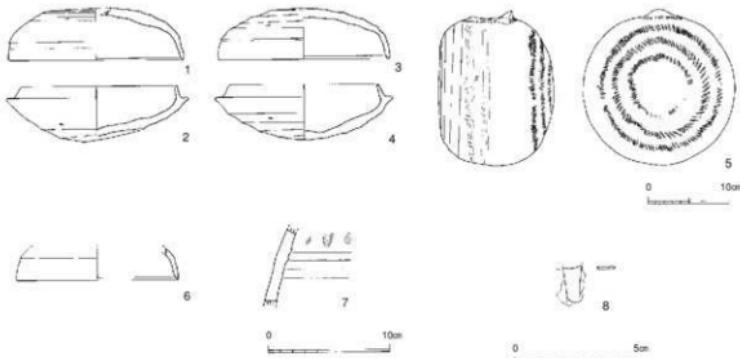


Fig. 61 SO07主体部内出土遺物 (1/2, 1/4, 1/6)

1・3は杯蓋である。共に口縁端部がわずかに段をなし、体部と天井部の境には弱い段状をなしている。2・4は杯身である。立ち上がりはやや短く直立気味であり、口縁端部は丸くおさめている。底部には広い範囲に回転ヘラケズリを施す。5は提瓶である。口頭部を欠損する。外器面には頸部、そして胴部に刺突文を施す。特に胴部の刺突文は3重に巡らせてある。胴部の側面には一部カキメ調整の痕跡が残る。蓋杯3・4は袖部際から (Fig. 59-1), 蓋杯1・2はその隣り (2) より出土している。5の提瓶の出土は最も玄室中央よりとなる (3)。

排土中からいくつか遺物が出土しているがここでは2点を示す。6は杯蓋である。口縁端部は弱い段をなし、体部と天井部の境にはわずかに段状のくぼみがある。窯等の口縁部片であろうか。中央に数条の浅い沈線が巡り、その上下には波状文を施している。8は鉄錠頭部片である。玄室奥壁側の左隅より出土している。

小結 SO07は墳径5mを測る小形の円墳であり、主体部も小形の横穴式石室である。この横穴式石室でも敷石を有することや主体部内に副葬須恵器をもつていていたことは、他の古墳の状況と一致している。ただ、この片袖様の石室構造は周辺においてもさほど類例のあるものでない (註)。小形であることに加えて、SO07の特殊性が現れているともいえよう。横穴式石室自体は他の古墳に比して、遺存状況がよいものであった。玄門部で閉塞し、通路部分に天井を持たない (前庭部を有する) という石室構造が判明したことは、不明な点が多い当古墳群内においても貴重なものであるといえる。時期に関していえば、主体部内に置かれた蓋杯が遺物の中では古相を有し、TK10型式期の特徴を示している。SO07の築造時期もこの段階に比定することができるだろう。

ところで今回調査した古墳では、TK10型式期に有羨道と無羨道の石室が混在しており、有羨道化の過渡期がこの段階にあるようである。有羨道化のプロセスを解明する上でも、今回調査した古墳は良い資料になりうるものといえる。この責はいずれ機会を改めて果たすことにしたい。

(註) 周辺では類例として、羽根戸南古墳群F-2号墳、金武古墳群吉武L-2号墳、G-3号墳を挙げることができる。

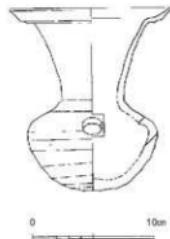


Fig. 62 SO07周溝内出土遺物 (1/4)

SO08

墳丘 墳丘東側を大きく削り取られているが、残存部分をみれば、墳径9~11mを測る円墳であることが分かる(Fig. 63)。墳丘の周囲には周溝が巡っている。破壊により不明な部分もあるが、おそらく古墳の周囲を全周していたのだろう。周溝は幅1.5~2.0m、深さ20~30cmを測る。墳丘は削平を受けており、盛土は残っていない。

主体部 南西方向(S-40°-W)に向かって開口する単室構造の横穴式石室である(Fig. 64)。石室の遺存状況は良好で各壁体も50~60cmの石積みを残している。玄室は長さ2.3m、幅1.8~2.0mの長方形プランを呈する。前壁幅に比べ奥壁幅が広く、主軸に対しても右側壁側は平行するのに対し、左



Fig. 63 SO08 墳丘 (1/200)

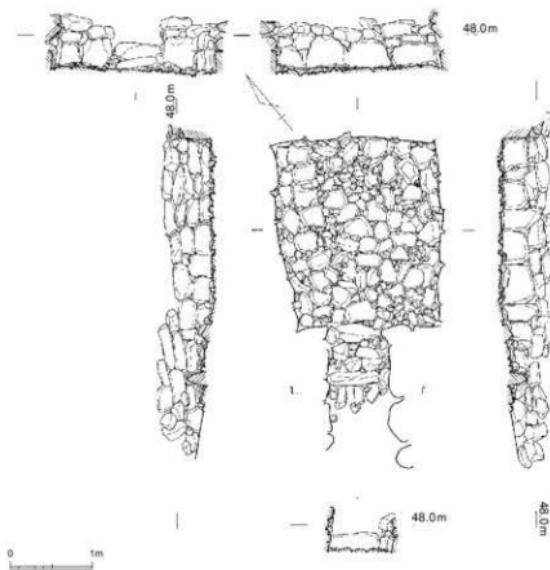


Fig. 64 SO08 主体部 (1/60)

側壁側は奥壁側へ向かってやや開き気味となる。各壁の基底部にはやや大きめの石材を使用する。板状の石材を立てて用いており、その上部には石材を横積みにして壁体を組み上げている。奥壁には4石、左・右側壁には6石ずつと、基底部には多くの石材を配していることが特徴であるといえる。床面には敷石がある。主として一辺30cm程の大きめの石材を用いており、小石の使用は部分的に認められるに過ぎない。敷石面は1面のみである。前壁側では右袖部には2石、左袖部には1石の基底石を配し、玄門部はやや左側に偏る。玄門幅は70cmを測り、これは羨道幅に比してわずかに狭く、玄門袖部はやや内側へ突出している。

玄門部からは1.5~1.7mほど石積み部分が延びる。

玄門部から1m程はしっかりとした石積みを行って

おり、この部分まで天井石が存在したのであろう。つまり羨道は1mほどのごく短いものを想定できる。羨道部の石積みは玄室部分とは異なり、基底部に石材を横位に据えている。また玄室床面に比べて、羨道床面はやや高く、墓道部分は入口側に向けてスロープ状に更に高くなっている。羨道部にはその途中と玄門部とに2重の樋石を配する。第1樋石と第2樋石の間に敷石を施している。第2樋石は第1樋石に比してかなり高く突出したものとなっている。尚、第2樋石の部分には閉塞石が一部残存していた(Fig. 65)。閉塞は第2樋石の先に塊石を使って行う。閉塞部分からの遺物出土はなく、追葬その他の痕跡もみることはできなかった。

最後に墳丘と主体部の構築状況についてみておくことにする(Fig. 66)。先にも述べたように墳丘盛土は残っていない。石室築造時の墓坑は50~70cmの深さが残っていた。これは基底部石上面の高さとほぼ等しい。基底部より上部の石材積み上げには板状石材を小口積みしているが、この積み方を行う場合、墓坑が基底石上面の高さを大きく超えることはないだろう。したがって、地山整形面に関しては、当時と現況ではさほど大きな差はなかったものと考えられる。古墳の築造はまず、墓坑を掘り石室基底石を配した後、石積みと一緒に墳丘構築がなされていたことが分かる。なお、石室の主軸断面をみても石室内はすべて地山面に比して低い。

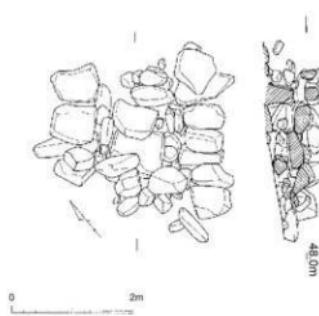


Fig. 65 SO08主体部閉塞 (1/40)

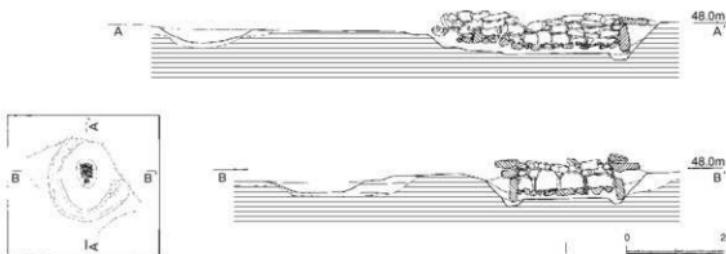


Fig. 66 SO08墳丘・主体部断面 (1/100)

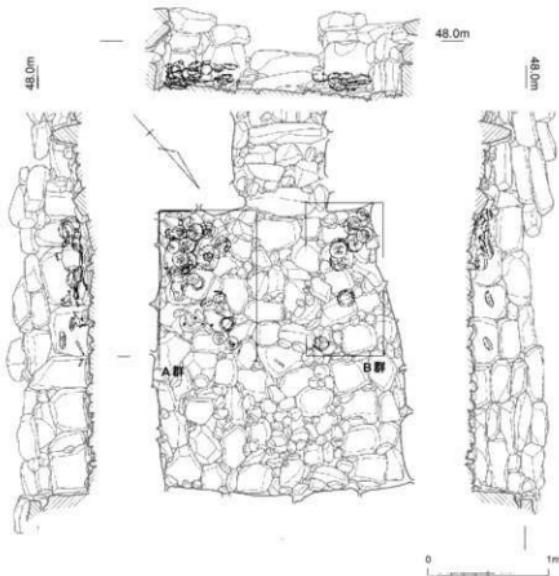


Fig. 67 主体部内遺物出土状況（1/40）

遺物出土状況 主体部内からは両袖部にまとめて遺物が検出できた (Fig. 67)。両袖部に遺物のまとまりがあり、それから中央部へと遺物が筋状に分布しているが、この部分の遺物は床面より浮いた状態にあり、両袖部隅より流れ出たものであることは明らかである。よって、主体部内の遺物は大きく各袖部に所属する2群に分けることが適当であろう。そこで、右袖部の遺物群をA群、左側のそれをB群と呼ぶこととする。各袖部隅の遺物は床面直上に位置しており、ほぼ原位置を留めているものと考えて良いだろう。A群からは、蓋杯 (Fig. 69)、無蓋高杯 (Fig. 70-1)、壺 (2) 短頸壺 (3・4)、土師椀 (5)、瓶類 (6・7) といった容器類、鐵鎌 (Fig. 71-6~10)、鎌 (1)、刀子 (1~3)、馬具 (4・5) などの鉄製品や耳環 (11)、玉類 (12~17) 等が出土し、B群には蓋杯 (Fig. 70-8~19)、広口壺 (20) が含まれていた。数量の多さ、そして種類の豊富さと共にA群が圧倒的であり、これは玄門部が左側に偏し、右袖部が幅広になっていたことと無関係ではないだろう。また、B群は須恵器蓋杯が大半を占めており、器種構成の上でも特徴的なものとなっている。

周溝からは西側の一部に遺物の集中地点が存在した (Fig. 68)。須恵器が主体を占め、壺の他に蓋杯、甕が出土している (Fig. 72)。また、周溝中からは紡錘車が2点出土している (Fig. 72-22・23)。

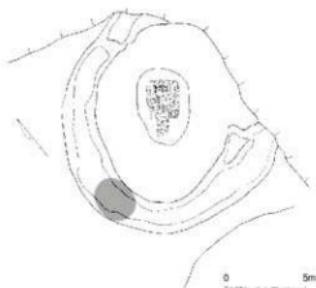
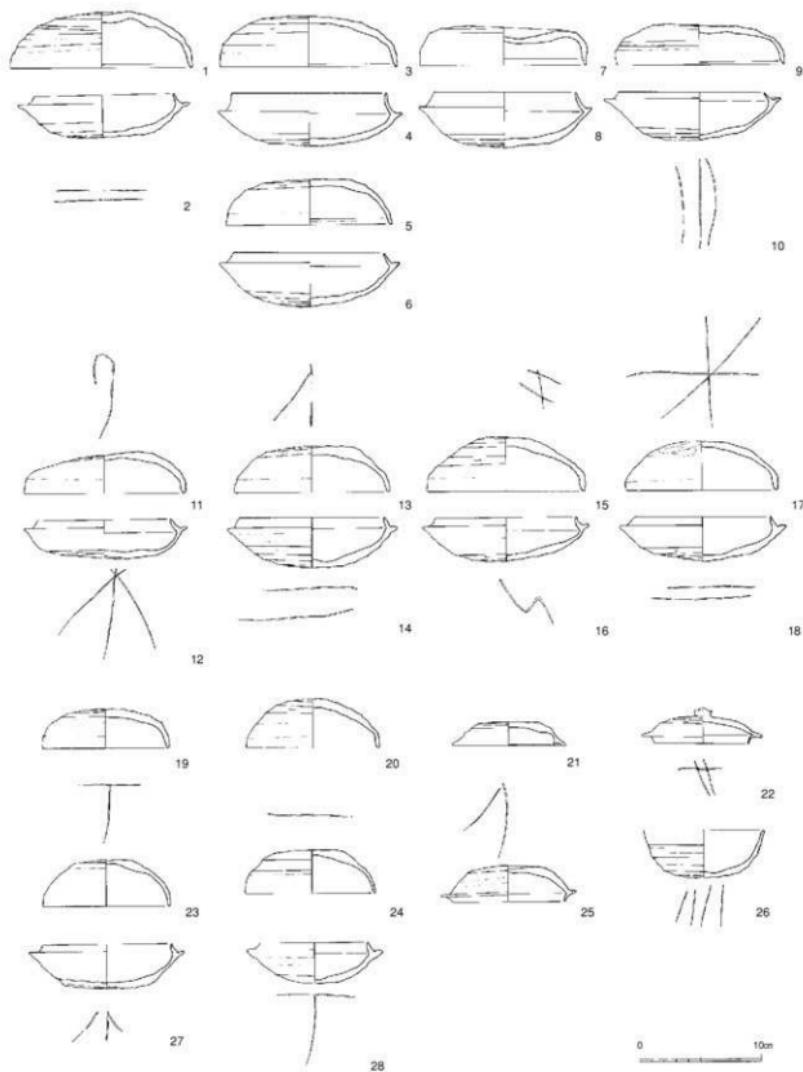


Fig. 68 SO08周溝内遺物出土状況（1/300）



A群

Fig. 69 SO08主体部内出土遺物 1 (1/40, 1/60)

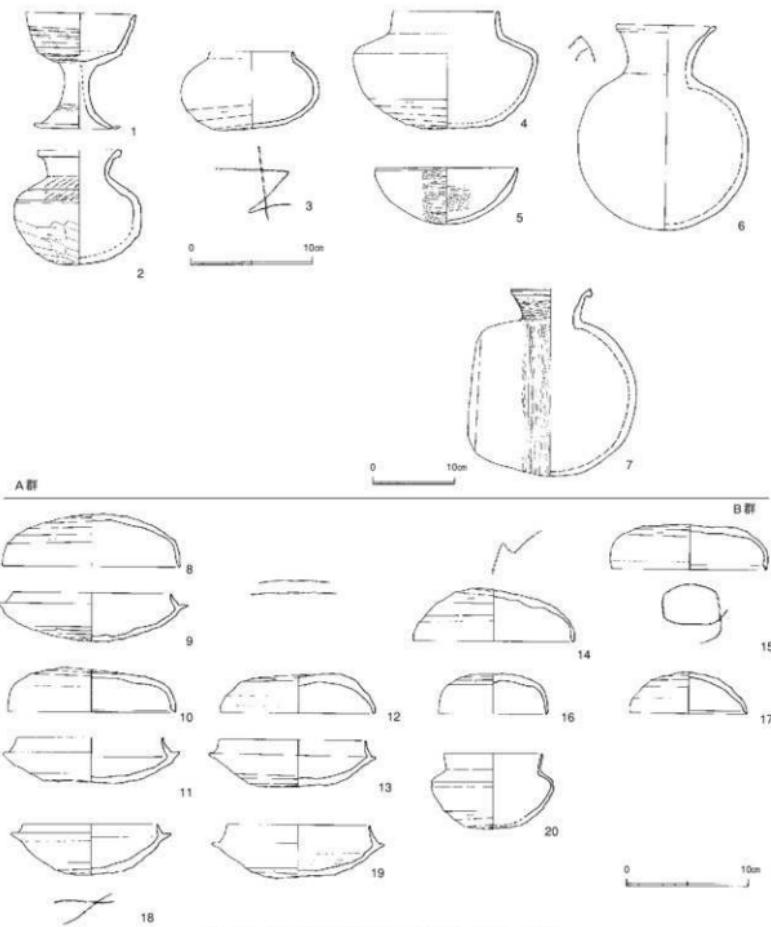


Fig. 70 SO08主体部内出土遺物 2 (1/4, 1/6)

小結 SO08は墳径9~11mを測る円墳であり、主体部の横穴式石室は比較的良好に遺存していた。石室構造をみれば、定型化した有蓋道石室となっており、SO02そしてSO06との共通性が指摘できる。SO08の築造年代については、まず良好な遺物の出土をみた主体部内出土遺物の検討から始めるべきであろう。主体部内出土の須恵器の内、古相のものはTK10型式期でも新しい段階に位置づけることができるだろう。周溝出土遺物をみてもこの状況に変化はない。したがって、SO08の築造年代をTK10（新）型式期に位置づけておきたい。今回調査した諸古墳もおむねTK10型式期に位置づけられるものであるが、この諸古墳の中でもSO08は若干新しい一群に含めて考えることができるのかもしれない。

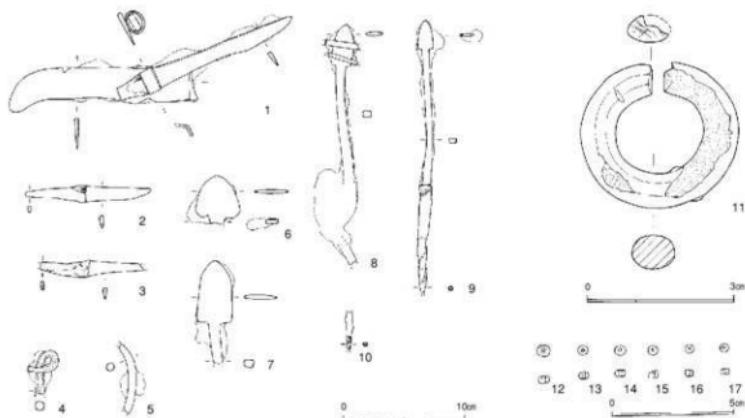


Fig. 71 SO08主体部内出土遺物 3 (1/2, 1/4)

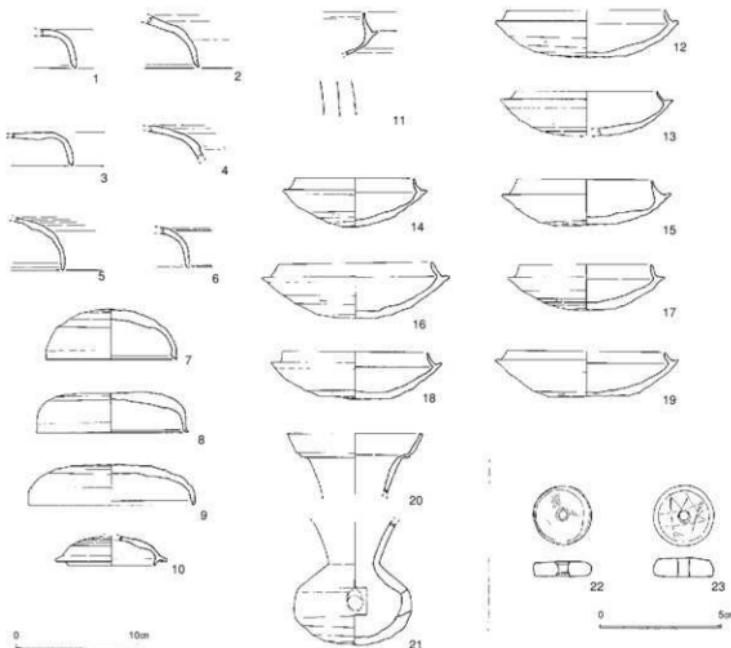


Fig. 72 SO08周溝内出土遺物 (1/2, 1/4)

SO09

墳丘 墳丘南側が大きく削平されており、全体は明らかではない。しかし、残存部分の状況を考えれば、墳径9~11mを測る円墳であると想定できるだろう (Fig. 73)。墳丘の周囲には周溝が巡っている。北側の周溝は掘り込みも明確に認識できたが、東側へ行くにつれて次第に浅くなり南東側では周溝の存在が確認できなかった。Fig. 73では周溝が全周する場合を想定しての推定線を入れているが、次第に浅くなるという周溝の状況を考えれば、本来この周溝は南東側の周溝が途切れる馬蹄形を呈するものであった可能性も高い。周溝の幅は1.2~2m程で、周溝北側の深さは1.2mを測る。SO09においても墳丘は削平されており、盛土は残っていない。

主体部 北西方向 (S-10°W) に開口する単室構造の横穴式石室である (Fig. 74)。各壁体とも40~50cm程の石積みが残っており、石室の遺存状況は良い。玄室は長さ2.3m、幅1.5mの長方形プランであり、右片袖を呈する。各壁の基底部には大形の石材を横位に配し、その上に塊石積みを行う。基底石上には各壁2~3段の石積みが残っている。基底部には奥壁3石、左・右側壁4石ずつの石材を使用する。玄室床面には敷石を持つ。敷石は一辺20cm程の石材を用い、全面

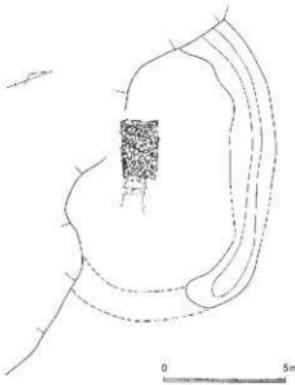


Fig. 73 SO09墳丘 (1/200)

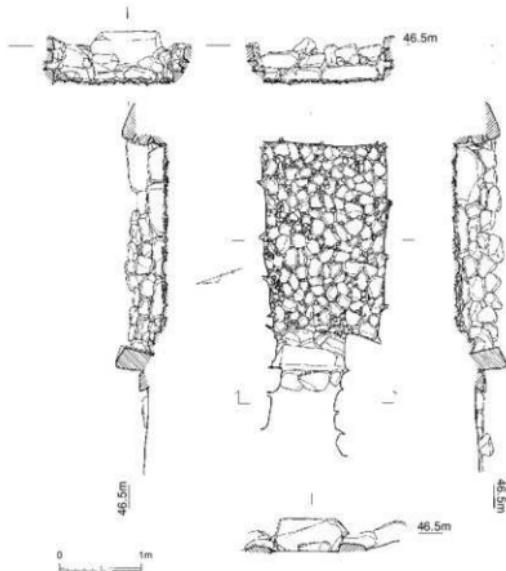


Fig. 74 SO09主体部 (1/60)



Fig. 75 SO09墳丘-主体部断面 (1/100)

に敷き詰めている。その隙間に小石をいくらか充填する。玄門部には敷石の上に塊石を数石2段積み上げ、これを根石として、楕円状の大形石材を据える。筆者はこれを閉塞石ではなく、石室構造に伴うもの、つまり仕切石として捉えている。この仕切石の外側にも塊石を数石置き、仕切石の更なる固定を図っている。通路部分には1段の石積みしか存在していない。壁体の石積みとしては脆弱な配置を行っており、この部分には天井石を架けることはなかったのだろう。つまり、SO09主体部の横穴式石室は無濠道の横穴式石室であった可能性が高い。右の袖部は内側に張り出すことなく、そのまま平坦に通路部分の壁面へと続いている。玄門幅は0.8m程度、通路幅は0.7~0.8mを測る。通路部分はあまり開くことはなく、そのまま各壁が平行するように造られている。

ここで、主体部と墳丘の状況についてみておくことにする (Fig. 75)。先にも述べたように、墳丘は削平を受け、盛土は残っていない。墓坑の掘り込みは現在深さ30~60cm程度が残っている。この上面は現在残っている石室石材の高さより少し下に位置している。今回調査した他の諸古墳では、基底石設置後の段階に石室や墳丘構築上の一つの画期があったが、このSO09ではこれが該当しない。古墳墓坑内で既に数段の石積みが行われているのであり、基底石上の石積みのどこかが作業上の画期となるのだろう。

遺物出土状況 主体部内からは、須恵器のような容器類の他、大刀、刀子、鐵鎌といった鉄製品、そして玉類が出土した (Fig. 76)。この内、玉類は玄室掘り下げ時の堆土中からの出土である。遺物の出土状況から、遺物を以下の4群に分けることとする。

A群 玄室右袖部に置かれた一群

須恵器：短頸壺2、蓋2、提瓶2

鉄製品：無し

B群 玄室奥壁右側に置かれた一群

須恵器：蓋杯2

鉄製品：大刀、鐵鎌、刀子

C群 玄室前壁左隅に置かれた一群

須恵器：無し

鉄製品：鐵鎌

D群 玄室奥壁左側に置かれた一群

須恵器：横瓶

鉄製品：無し

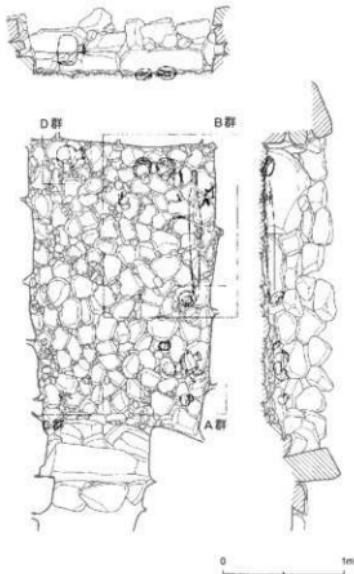


Fig. 76 SO09主体部内遺物出土状況

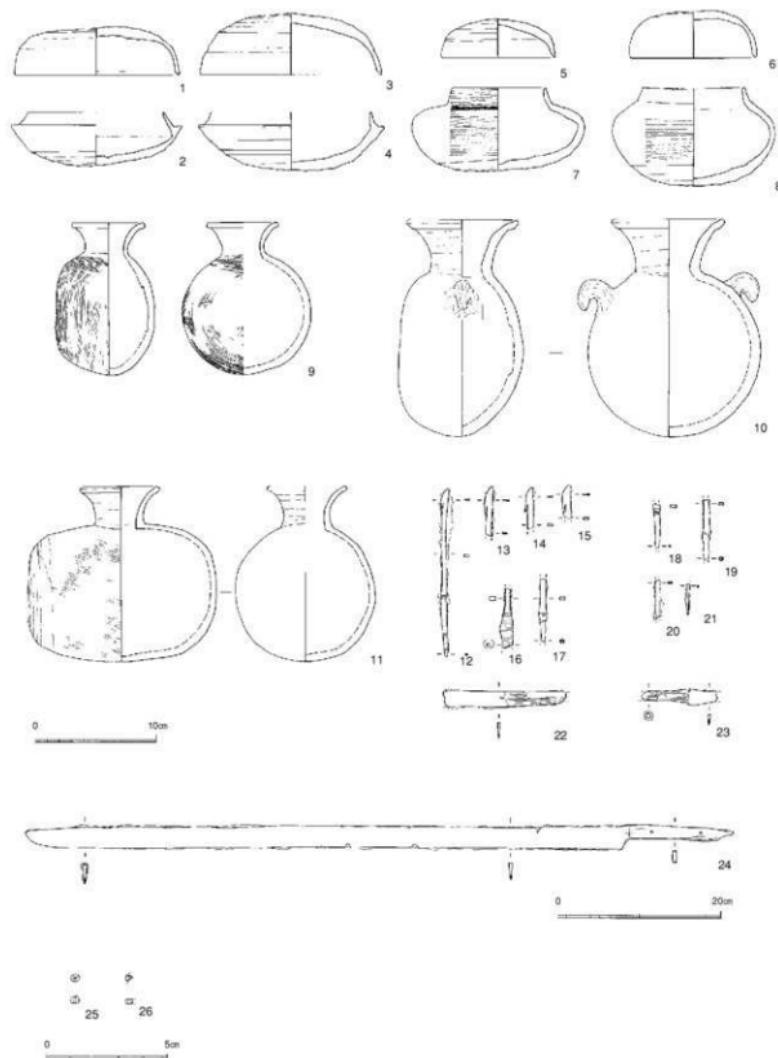


Fig. 77 SO09主体部出土遺物 (1/2, 1/4, 1/6)

A群では蓋2に対し、身である短頸壺が1しか存在しない。A群の須恵器はいずれも配置が乱れた状態にあり、若干移動している可能性も考え得ることがで
きるだろう。そこで、B群の大刀のそばにある短頸壺はA群

に伴うものとして考えておくことにしたい。D群の横瓶は床面から浮いた状態にあり、本来その位置にあったのか、配置を考える上では若干の問題があるといえる。以上のように整理すると、右袖部前方には瓶類、壺類を置き、右側壁にそって大刀、鉄鎌、刀子を並べ、その奥壁寄りには杯類を2つ並べるという、基本的な配置をみることができる。また、C群 (Fig. 76-10) やB群中にみる鉄製品のまとまりにも注意を払うべきだろう。この配置をみれば頭位を奥壁側に置き、石室主軸と平行する形で遺体を安置するという、室内使用のあり方が浮かび上がってくる。

出土遺物 主体部内出土の遺物はFig. 77に示した。1~4は蓋杯である。1~3の杯蓋は口縁部わずかに段をなし、3は特に体部と天井部との境に沈線上のくぼみを有する。7~8は短頸壺であり、5~6はその蓋であろう。5~6の口縁部はわずかに段をなし、7~8は胴部にカキメ調整、底部に回転ヘラケズリを施す。9~10は提瓶、11は横瓶である。12~21は鉄鎌である。12は長頸鎌である。鎌身は片刃で刺逆を有する。13~15は12と同じ形式の鎌身部である。18~21は茎部を中心とした破片である。22~23は刀子。24は大刀である。全長86.2mを測る。茎部には目釘孔が2つ認められる。25~26は小玉である。玄室掘り下げ時の排土中より出土したものである。いずれもガラス製で、黄色を呈する。

周溝内出土の遺物はFig. 78に示す2点のみを図示した。いずれも須恵器であり、1は壺口縁部、2は壺等の底部である。

小結 SO09は径9~11mを測る円墳であり、主体部は片袖の横穴式石室である。片袖という石室形態は九州全体をみても珍しいものである。主軸平行葬を探っているということでも注目して良いだろう。また石室形態だけでなく、その構築方法も今回調査した他の諸古墳と異なっている。そして、片刃鎌を主体として副葬するという点も大きな相違点であり、この形式の鎌はSO05に1点が認められるに過ぎない。九州における横穴式石室は、基本的に玄室と通路等を区切る仕切状の石材を配する。そのため、SO09石室玄門部の大形石材を閉塞ではないと解釈したのであるが、これが仕切石であったとしても、この石材は敷石上に造られているのであり、そもそも横穴式石室の重要な構成要素として石室構築段階（ひいては設計段階）から考慮されている九州の仕切石とは明らかに異なるものである。この仕切石について、これ以上の詮索は行わないが、SO09主体部の特異性を象徴する要素としてここに挙げておくことにしたい。

最後にSO09の築造年代について述べることにする。これまでと同じように主として出土土器（須恵器）をみるとことにより、この問題について考えることにする。主体部から出土した蓋杯はTK10型式期に位置づけることができるものであり、周溝出土の遺物の中にもこれを認める資料はない。明確な漢道構造を持たない石室構造からもこの年代観は首肯される。よって、ここではSO09の築造年代をTK10型式期と考えておきたい。他の諸古墳と大差ない年代でありながら、この違いは何を意味するのか、SO09に対する評価はまた機会を改めて行うことにしておきたい。

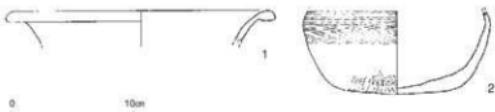


Fig. 78 SO09周溝内出土遺物 (1/4)

SO15

墳丘 調査区の北東隅に存在する古墳であり、墳丘の半ば近くを調査区外に持つ (Fig. 79)。古墳の周囲には周溝を有するが、調査範囲内にはその $1/4$ 程が存在したに過ぎない。したがって、周溝の調査も極めて限的なものとなった。周溝は幅2.5~3m、深さ70~80cmを測る。調査区内の周溝は円弧を描いており、SO15が円墳であることは確かであろう。仮に主体部である横穴式石室（後述）の中心を墳丘の中心と想定すれば、墳径は15m程に復元できる。墳丘は削平が激しく、盛土はほとんど残っていない (Fig. 81)。

主体部 西方向 (S-89° - W) に開口する横穴式石室である。墳丘削平の際、石室石積みの多くは失われ、また右側壁側には用水路が通っていたため、



Fig. 79 SO15 墳丘 (1/200)

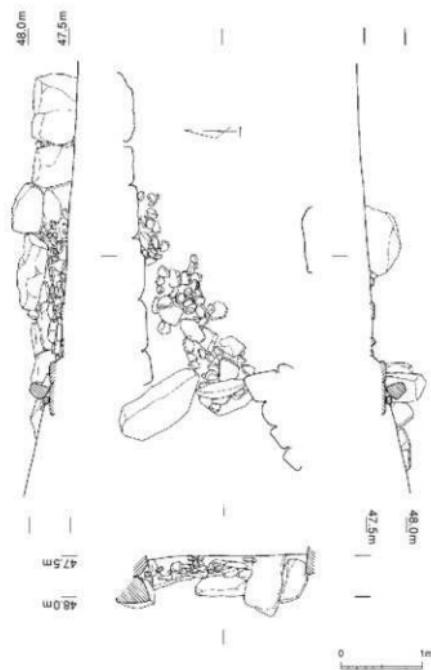


Fig. 80 SO15 主体部 (1/60)

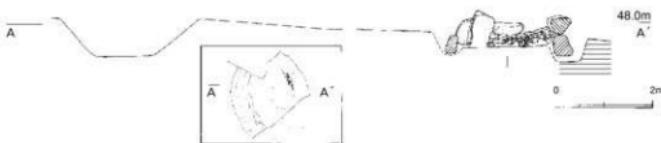


Fig. 81 SO15 墳丘・主体部断面 (1/100)

右側壁・奥壁は1石を残し失われていた。したがって、石室壁体で石積みを残しているのは左側壁と玄門袖部および前庭部石積みのみである。わずかに残った右側壁材及び右袖部石材をみれば玄室幅は1m程と考えることができるだろう。また、左側壁の状況をみれば長さは3.5m程に復元できるだろうか。側壁にはかなり大形の石材を横位に配しており、現状では1~2段分の石積みが残っている。玄室床面には左袖部分を中心に敷石が残る。1辺20~30cmほどの大形石とやや小形の石材が重層的に分布している状況が看取でき、2面の敷石面が存在した可能性がある。玄門部には柱状石を立てて袖部となしている。左袖石は引き倒されているが、櫛石をみれば、玄門幅は60cm程と考えることができるだろう。石室入口前には右側壁の状況を見る限り、「ハ」の字に聞く前底部があったようだ。現在1段分の石積みのみが残る。

遺物出土状況 主体部内からは敷石の遺存部分を中心に須恵器や鉄製品等が散乱していた (Fig. 82)。いずれも原位置を留めるものではないだろう。また、周溝内からは、須恵器を中心とした遺物が出土している (Fig. 84)。

出土遺物 主体部内からは須恵器等の容器類の他、馬具、刀子といった鉄製品、玉類が出土している (Fig. 83)。1~10の資料は石室床面、他のものは排土中の出土である。1~9、11~25は須恵器蓋杯である。10は土師器の杯。いわゆる模倣杯である。28は短頸壺。27は高壺脚部である。26は甌。29~31は唇の残片。32は鉄鎌、33は鉄斧の刃部片、34・35は刀子、36は鉄鏃である。37・38は小玉で、淡緑色を呈する。周溝からも須恵器を中心とした容器類が出土した (Fig. 84)。1は甌、2は提瓶である。

小結 調査区隔で検出されたため、SO15 墳丘の全容を明らかにすることはできなかった。しかし、検出した周溝部分より復元すれば墳径15m程の円墳とみなすことができる。主体部である横穴式石室は「ハ」の字に聞く前庭部を有し、強い長方形プランを呈するなど、初期横穴式石室の形態を強く留めるものである。SO15出土の須恵器は、古相のものでMT15型式期の特徴を有している。これは石室構造とも矛盾するものではない。したがって、ここではSO15の築造時期をMT15型式期と考えておくことにしたい。

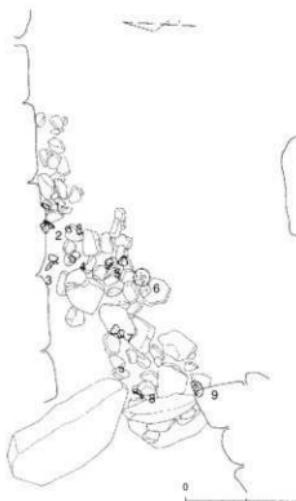


Fig. 82 SO15 主体部内 遺物出土状況 (1/40)

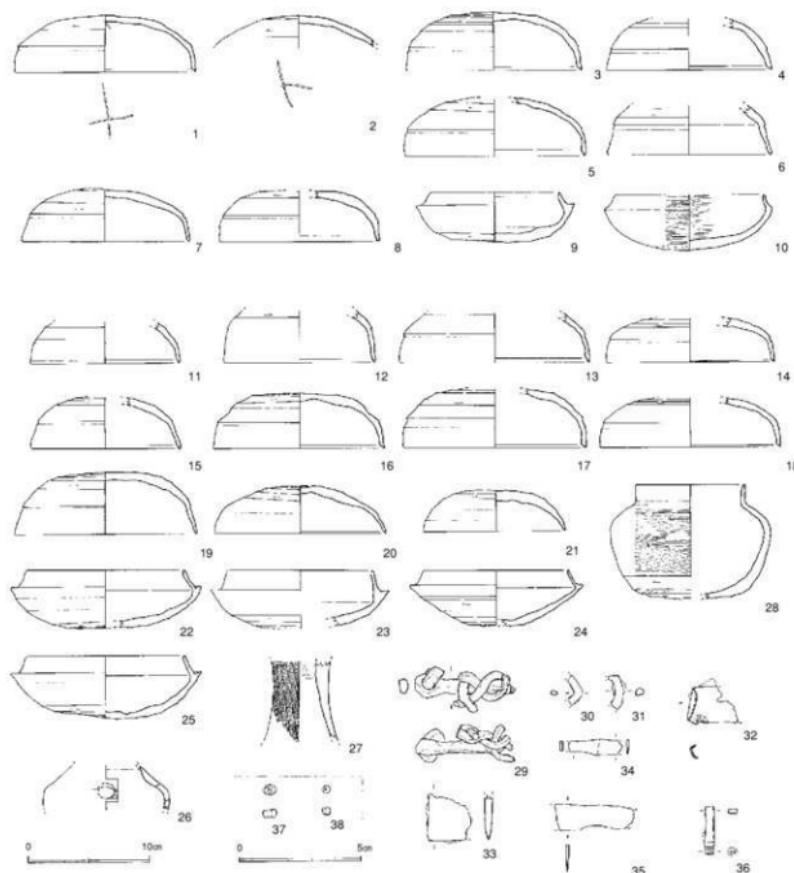


Fig. 83 SO15主体部内出土遺物 (1/2, 1/4)

Fig.82 Fig.83
No.1 — No.10
3 — 1·4
6 — 2
7 — 2
8 — 8
9 — 7

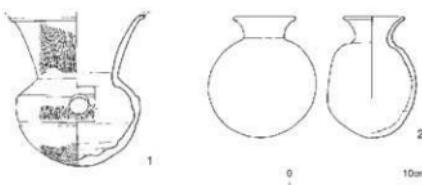


Fig. 84 SO15周溝内出土遺物 (1/4, 1/6)

SO53

墳丘 調査区北端で検出した古墳である (Fig. 85)。北側が破壊され古墳の大半は失われている。主体部は無く、弧状に巡る溝を検出したのみであったが、この溝が径 9 m 程の円形に復元できること、須恵器等多くの遺物が溝内から検出されたことをみて、古墳 (SO53) と判断した。SO53 の南東側には SO08 が存在する。墳丘は削平されており、周溝部分のみが遺存する (Fig. 86)。周溝は幅 1.3~2 m、深さ 20~30 cm を測る。

出土遺物 周溝からは須恵器を中心とした遺物が出土した。1~9 は蓋杯である。10 は壺。11 有蓋坏で、透かしのない短脚を有する。

12 は短頸壺、13 は甕である。口頭部には波状文を巡らす。

小結 周溝を部分的に検出したのみで、SO53 の詳細は不明である。出土遺物をみれば、TK10 (新) もしくは TK43 型式期に位置づけることができるだろう。

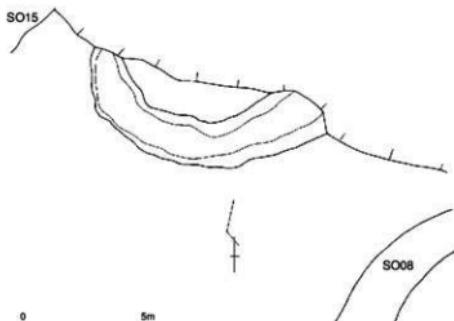


Fig. 85 SO53 墳丘 (1/200)

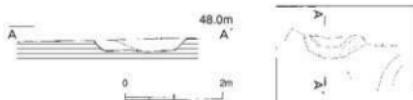


Fig. 86 SO53 墳丘断面 (1/100)

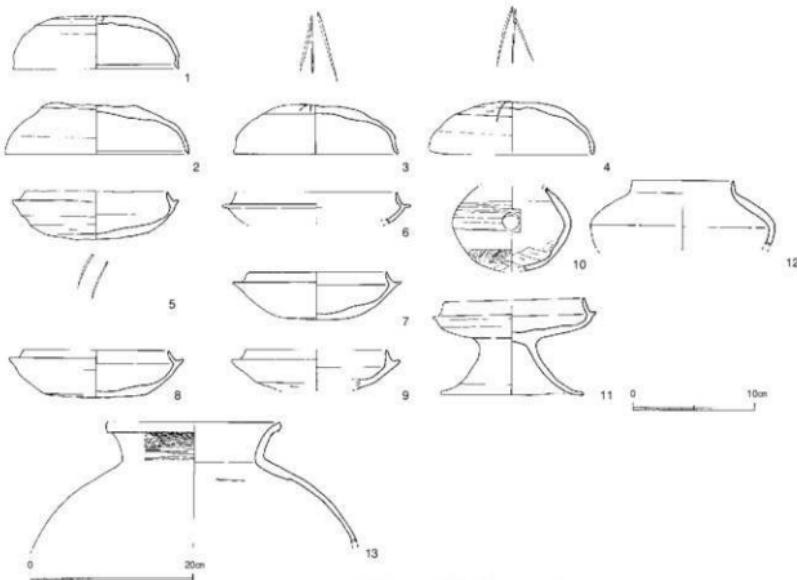


Fig. 87 SO53 周溝内出土遺物 (1/4, 1/6)

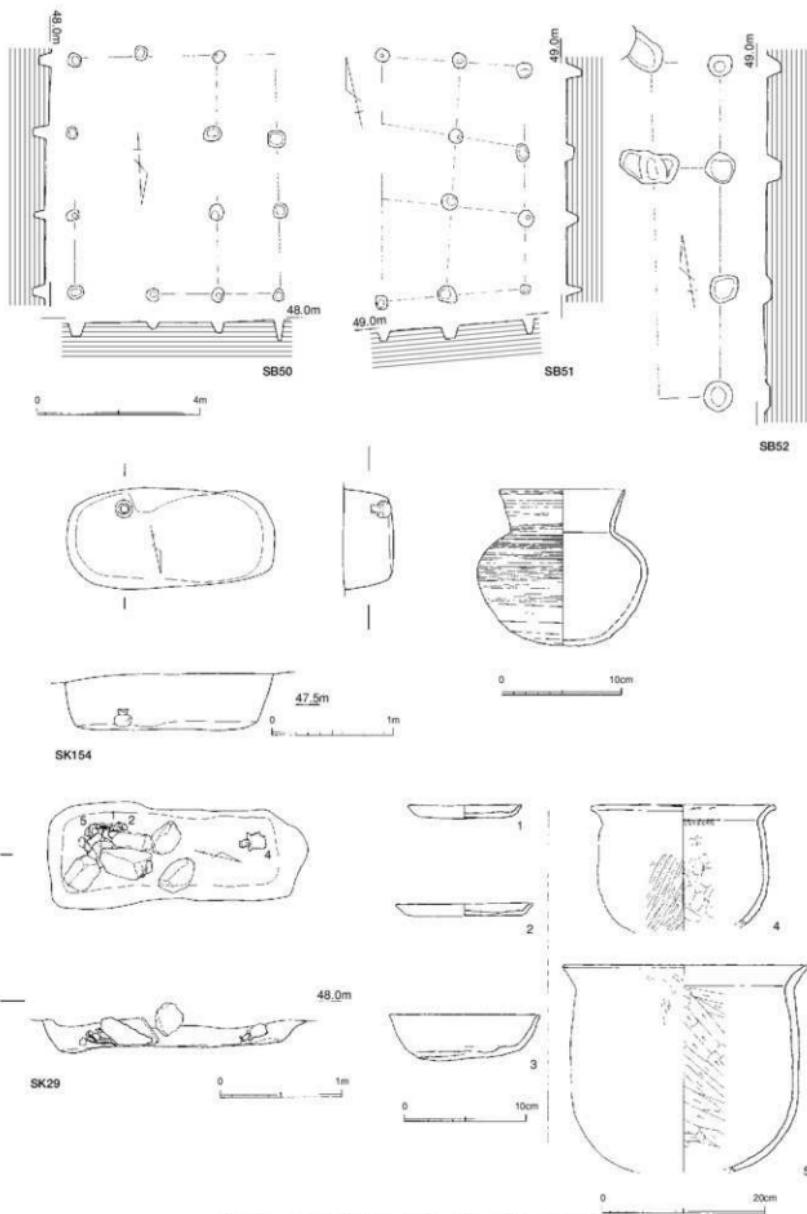


Fig. 88 その他の遺構 (1/4, 1/6, 1/40, 1/120)

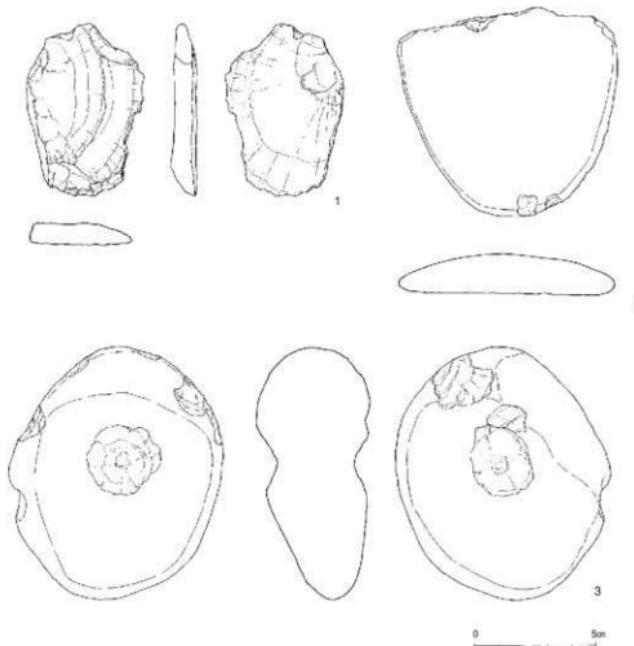


Fig. 89 その他の遺物 (1/2)

その他の遺構 以下では古墳の他、3区で検出した古墳時代以後の遺構について述べることにする (Fig. 88)。掘立柱建物は3棟検出している。時期は不明だが、おそらく中世頃に位置づけることのできるものだろう。SB50は 2×3 間の建物で、東側に庇がつく。SB51は 2×3 間の総柱建物であろうか。SB52は 1×3 間の建物になる可能性が高い。

土坑は2基検出できた。SK154は平面が楕円形を呈し、長さ1.7m、最大幅0.8m、深さ40cmを測る。内部には完形の須恵器広口壺が納められており、土壙墓である可能性が高い。出土遺物である広口壺は口径10.3cm、頸部径8.6cm、器高12.9cmを測る。外器面にはカキメ調整を施す。周辺の古墳と同時か、やや新しい年代を想定できるだろう。SK29は平面が隅丸の長方形を呈し、長さ2m、幅0.7~0.8m、深さ20cmを測る。内部からは4つの花崗岩礫の他、土師皿、椀、甕が出土している。1・2の土師皿はそれぞれ口径9.2cm、11.1cmを測り、底面はへラ切り。3の椀は口径12.3cm、器高3.8cmを測り、底面はへラ切り。4・5は甕である。両者とも外器面に煤の付着が著しい。4は粗い平行タタキの痕跡が認められる。出土遺物から、10世紀の前半頃に位置づけられる。

その他の遺物 最後に古墳の周溝より出土した他時期の遺物について報告することにする (Fig. 89)。1はスクレイバーである。長さ7.1cm、幅4.8cm、厚さ0.9cmを測る。SO06周溝より出土。2は用途不明の石器である。長さ8.6cm、幅9.1cm、厚さ1.7cmを測る。SO07周溝より出土。3はくぼみ石である。長さ10.3cm、幅8.8cm、最大厚4.7cmを測る。SO06周溝より出土。

3) 5・6 a区

5区は事業対象地内の西端に位置する。南北約30m、東西約60mの略三角形の範囲である(Fig. 90)。この東側に6区が続くが、同じ田面の範囲であった幅約5m、長さ約15mの部分を6a区として分離し、ここでは合わせて報告する。この範囲は調査前に水田であり、南側に農道、北側に農業用水路が設けられていた。5区の中央にはほぼ東西方向に小谷地(SX01)があり、これを境に基盤土壤の差異があった。南側の基盤は礫混じりのローム質粘土であり、古い扇状地形成土であった。北側の基盤は砂礫層であり、新しい扇状地形成土である。中央の小谷地の形成と埋没時期は明確でないが、下部の砂礫層中から今山産玄武岩製の大型蛤刃石斧(Fig. 96-16)が出土し、埋没土中位を基底面とする土坑SK11から古式土師器甕片(Fig. 96-15)が出土した。

これから弥生時代中期前半までは流路が存在し、古墳時代前期には埋没していたと考えられる。SX01を挟んで北側には古墳SO02、SO03、南側にはSO04がある。SO02の東側墳裾には土坑SK05～07があり、古墳に関連する遺物が出土した。東端のSK10は弥生時代の遺構である。6a区では弥生時代の竪穴式住居SC04があり、これを切る溝状遺構SD05は砂が充満し須恵器甕片が出土した。またSC04が切る土坑SK07は縄文時代早期の遺構であり、土器、石器類が出土した。

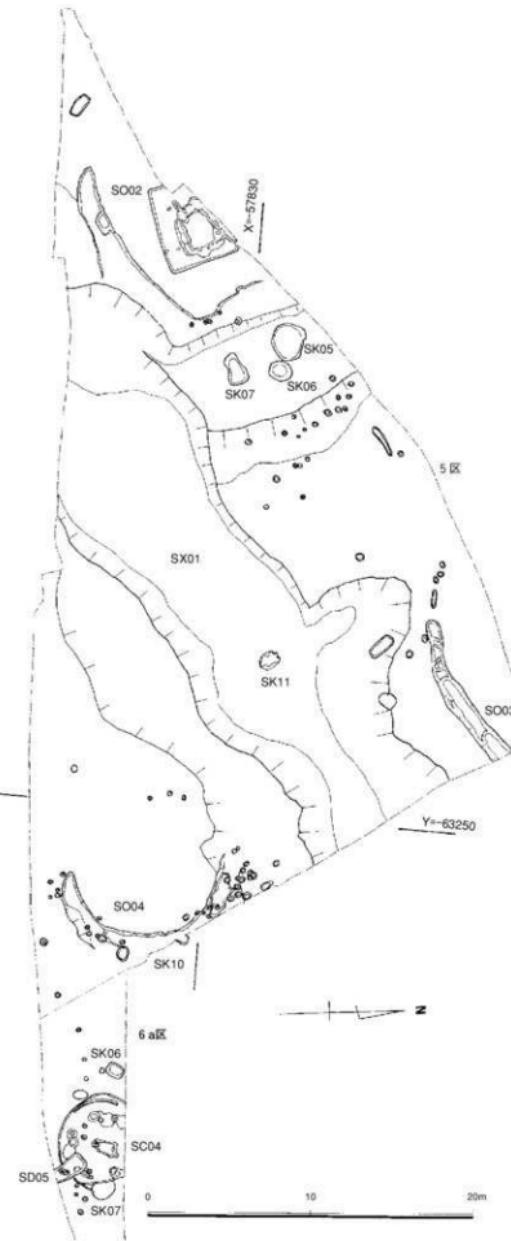


Fig. 90 5区・6a区全体図 (1/300)

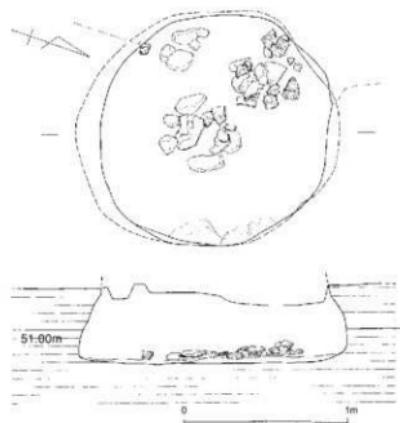


Fig. 91 SK07 (1/30)

SK07 (Fig. 91~94)

6 a区の竪穴式住居跡SC04の東壁部にあり三分の一ほどが切られている。当初は弥生時代の遺構と推定していたが、遺構内からの遺物や埋土の科学分析などを通じ縄文時代の遺構と判断した。上部は住居とともに大きく削平を受けている。遺構は基盤のローム質の疊混じり黄褐色粘質土に掘り込まれている。規模は検出面で南北1.4m、東西1.4mである。平面形態はほぼ円形であり、壁面はせり出し、断面がフラスク状を呈する。底面には一部に基盤礫の突出もあるがほぼ平坦であり、柱穴などはなかった。床面での規模は南北1.6m、東西1.45m、深さ0.5mを測る。遺構内の埋土は上部が暗色粘質土、中～下位は茶褐色粘質土であった。遺物は上～中位には出土せず、床面上に土器片、石器類、石数個が集中して出土した。

出土遺物には土器類と石器類がある。石器には

剥片4点と両面加工石器1点がある。1～4は何れも黒曜石を素材とする碎片であり、折損が見られる。1, 3, 4には自然面が残り、その特徴から針尾産に類似する円盤素材とみられ、分析結果と一致する。石器、石核調整に伴なうものとみられる。5は黄橙色のアブライトを素材とする両面加工石器である。中央で折損しているが、槍先形尖頭器か小型の石斧と考えられる。表面は風化が著しく剥離面の観察が困難である。現状での大きさは長さ6.5cm、幅3.7cm、厚さ2.0cmである。

出土した縄文土器は破片で150点程度である。接合及び個体識別作業の結果、11個体の縄文土器が確認された (Fig. 93, 94)。図化、報告し得ない破片の大半は概ね個体1～4に本来帰属するものと考えられる。以下、個体別に報告する。

個体1（1～5）は外面に口縁部付近では横方向に、胴部付近からは右斜め方向に1段の撚糸文を施す。復元口径は38.0cmである。口縁部は直立し、胴部もまっすぐ立ち上がる。底部は屈曲の度合いから判断すると、尖底になるものと考えられる。内面は棒状の工具による条痕調整で、上部は横方向、胴部下半から斜め方向に施す。個体2（6・7）は外面に右斜め方向に1段の撚糸文を施す。復元口径は30.1cmである。口縁部は直立する。内面は棒状の工具による条痕調整。外面胴部下半に煤が付着している。個体3（8～10）は、胴部で、外面に右方向に1段の撚糸文を施す。8は内面に縦及び斜方向の条痕調整を行なうが、9・10などからも顕著にナデが行われたことがわかる。個体4（11～13）は、外面に細密な条痕調整を施した後、口縁部から原体幅1.4cmで2段階条痕を施す。胴部に近づくにつれ、ナデ調整が顕著になる。個体4はひずみが著しく、判別

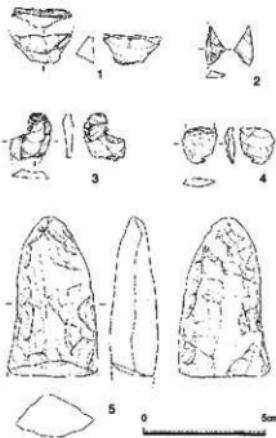


Fig. 92 SK07出土遺物 1 (1/2)

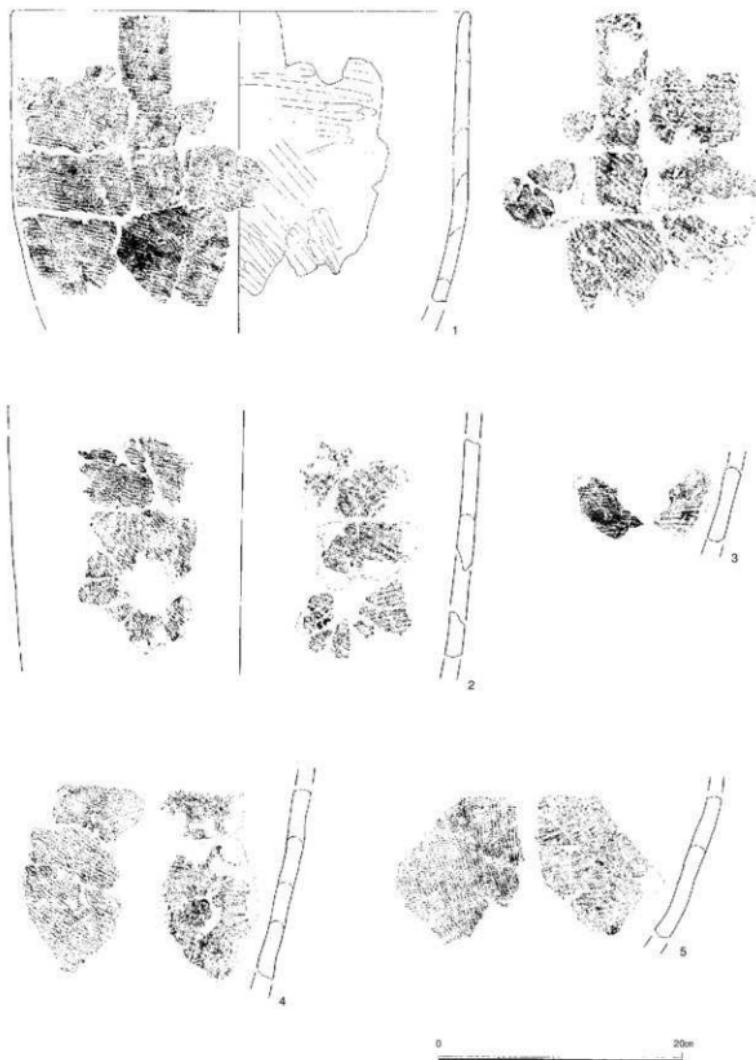


Fig. 93 SK07出土遗物 2

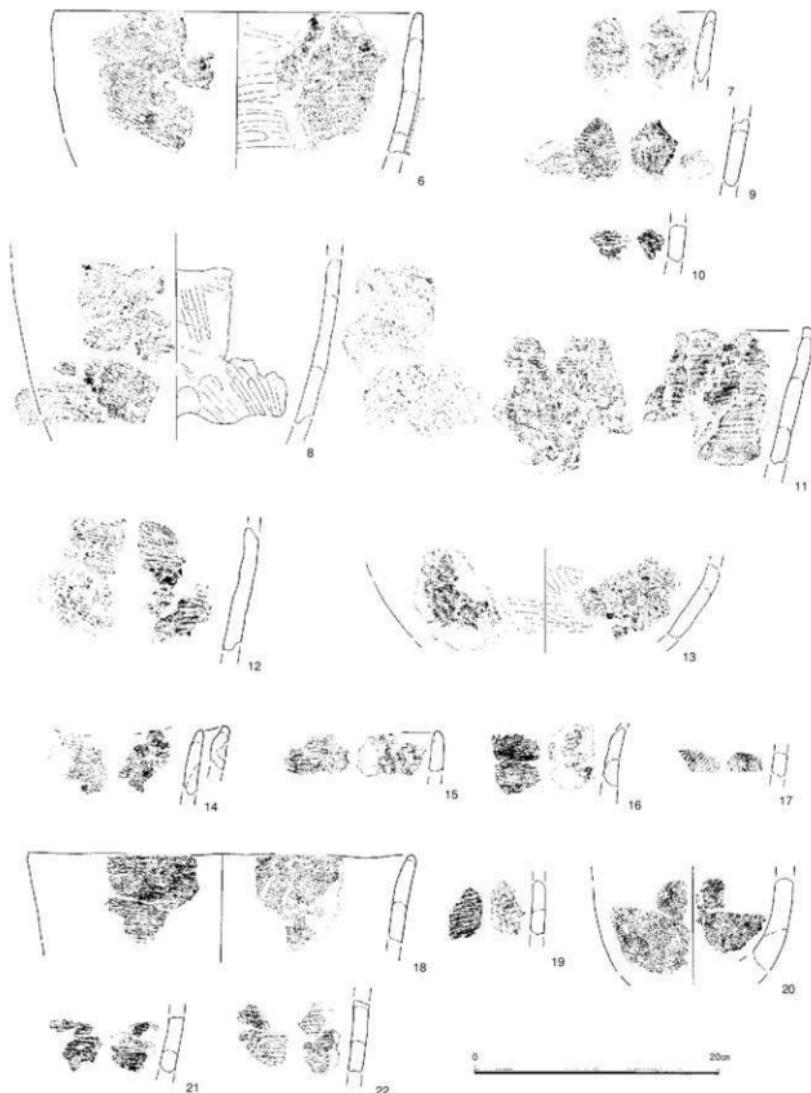


Fig. 94 SK07出土遺物 3 (1/4)

が難しいが、内面調整工具の違いなどから、11と12・13は別個体となる可能性もある。個体5（14）は口縁部が小波状を呈する。外面、内面とも絡条体条痕を施す。内面に凹凸がある。個体6（15）は口縁部が直立し、外面に絡条体条痕を施した後、ナデ調整を行う。内面もナデ調整。個体7（16）は外面に絡条体条痕を施し、内面にも条痕を施す。外、内面ともナデ調整が顕著である。個体8（17）は胴部で外面に絡条体条痕を施す。内面はナデ調整。個体9（18・19）はなだらかな波状気味の口縁部を有する。復元口径は31.6cmを測る。外面に絡条体条痕文を施すが、内面は然系文を施す。個体10（20）は厚さが1.6cmで、口縁部はないが、器形は円筒で、底部は小さな平底になるものと考えられる。他の個体と比べて異質で、政所式ないしは中原式に該当する可能性が高く、当遺跡の3区を中心とする包含層から出土している円筒形の土器とも類似している。個体11（21・22）は内外面に横方向に条痕調整を施す。以上、浦江遺跡6a区SK07から出土した土器群は撫糸文土器3個体、絡条体条痕文土器5個体、外面絡条体条痕+内面撫糸文土器1個体、円筒形土器1個体、条痕文土器1個体とバラエティに富む。出土状況の一括性は高く、焼成、胎土に1mm以上の砂粒、石英を含むこと等、個体10・11を除き、概ね似通っており、撫糸文と絡条体条痕文の近縁性を個体9は示しており、近い時期の土器群と考えられる。ただし、破片が個体1～4などは大きいものの、例えば個体8のように極端に小さい個体が存在することには注意が必要である。浦江遺跡SK07出土の土器群は、底部が存在しないものの、胴部の屈曲等から尖底の器形と考えられ、小波状口縁（個体5）、内面施文（個体9）が存在することや、胎土、焼成などから松木田遺跡の土器群と近い関係であることがわかる。しかし、口縁部端部がくびれる松木田遺跡に対し、SK07ではほぼ直立する。外面の撫糸文の施文が松木田遺跡では明瞭なものが目立つが、SK07では明瞭でなく、撫糸・絡条体条痕文後、ナデ調整を行っている。またSK07では絡条体条痕文が主体を占め、内面の調整は主に棒状工具で行うことなど、相違点も目立つ。何より、松木田、浦江の両遺跡において、それぞれの土器群がまとまって出土している。こうしたことから両者に時期差等を考える必要がある。（土器は遠部慎担当）

SC04 (Fig. 95~96)

6a区にある円形の堅式穴居であり、北側三分の一は調査区外に延びる。一度の建て替えがあり中心軸が西に移動している。西側の壁溝は一次住居に伴なうものである。現状での規模は東西1.6m、南北4.0mである。上部は削平され床面まで10cm前後の深さが残る。床面はほぼ平坦である床状の薄層があった。主柱は6本柱であり、中央に長さ1.5m、幅0.9mの平面椿円形の土坑がある。内面は熱変していないが、埋土は焼土、炭化物含層が互層をなし、炉と推定した。土坑の両脇には小穴が土坑が、柱穴周辺に貼あり、数回の切り合いがある。いわゆる「松菊里型」住居に類似

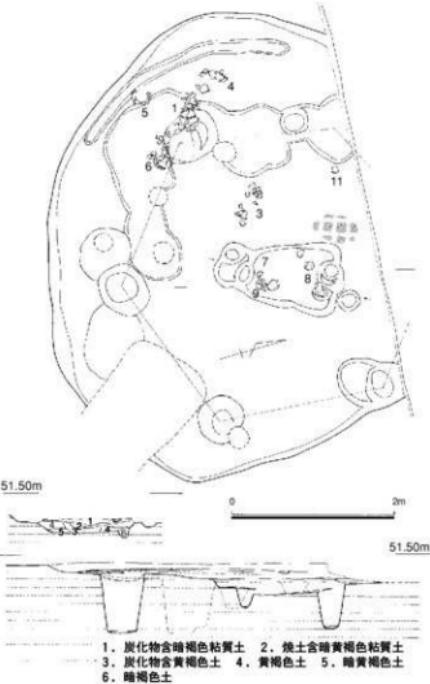


Fig. 95 SC04実測図 (1/60)
住居内の数字はFig. 96に一致する

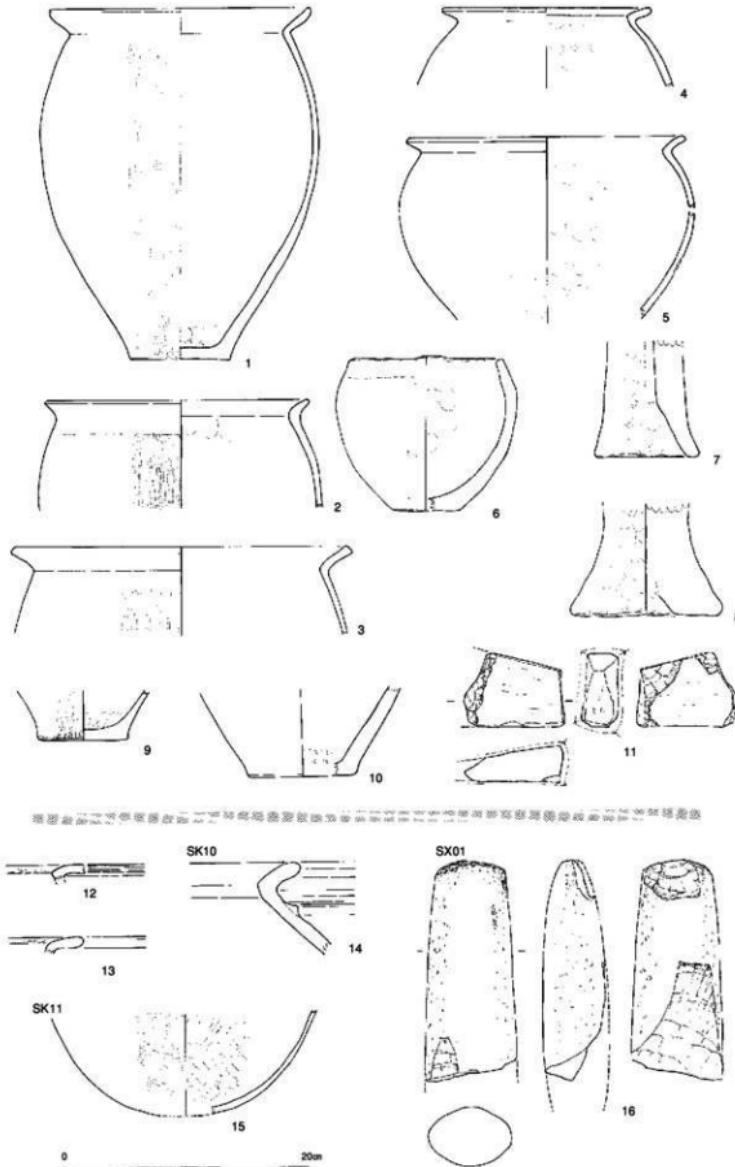


Fig. 96 SC04・その他の弥生時代遺物 (1/4)

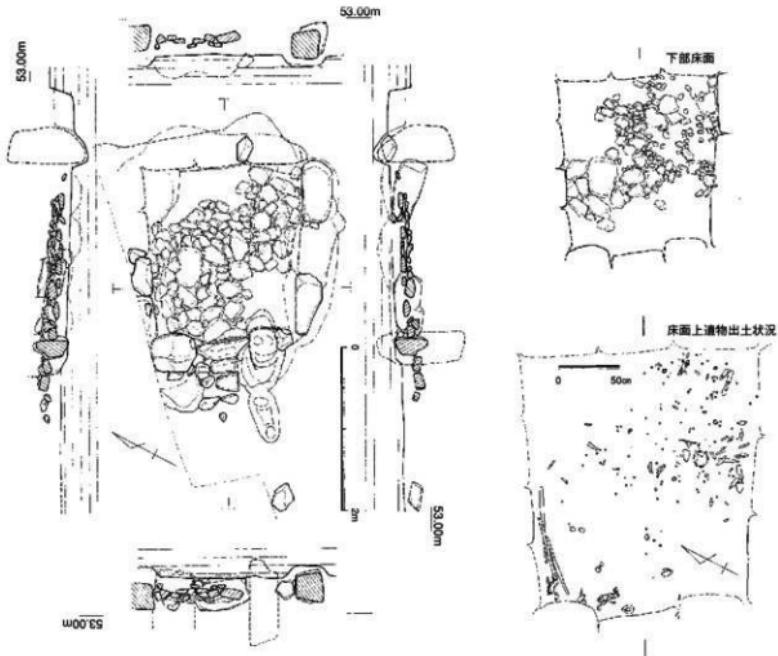


Fig. 97 2号墳(SO02)石室実測図、遺物出土状況図(1/60, 1/40)

する。本住居からは二次住居床面上にまとまった遺物が出土した(Fig. 96)。遺物には土器と石器があり、土器には壺(1~3・7), 壺(4・5・8), 鉢(6), 器台(9・10)がある。器台は中央土坑から出土しており、炉内での使用が推定される。石器には砥石(11)がある。これらの遺物は弥生時代後期頭に位置づけられる。

SO02 (Fig. 97~100)

5区西端にあり、水田床土直下で周溝底面と主体部である石室床面を検出した。

墳丘は、地表面まで削平され全て失われる。周溝底は南~東側が深さ0.1m程度残されていた。これから推定すると周溝底内側で直径10m前後の規模と見られる。主体部は、西南西に開口する横穴式石室である。墳丘と共に基底部まで削平され、腰石と石室内床面の一部を残すのみであった。石材抜跡などから本来の石室規模は全長約3.5m、石室は長さ2.1m、奥壁幅2.0m、羨門側幅1.7mと判断できた。羨道は短く約1.4mとみられた。床面の敷石は羨道一面、石室二面ある。下部の第1面は羨道より10cm低い。敷石第1面は左壁側に大きな石で幅0.7mの棺床状の範囲を造り、その他は小さな円礫を敷いている。第2面は羨道と同じ高さとなり、全面に同様の石を敷いている。出土遺物は石室内外にあり、石室内では床面に須恵器、装身具、武具、馬具があった。装身具のうち耳環は近接して2点ずつセットであったが、玉類は広範囲に散らばって出土した。武具のうち刀と馬具は近接して西隅から出土した。石室外では石室掘方内と

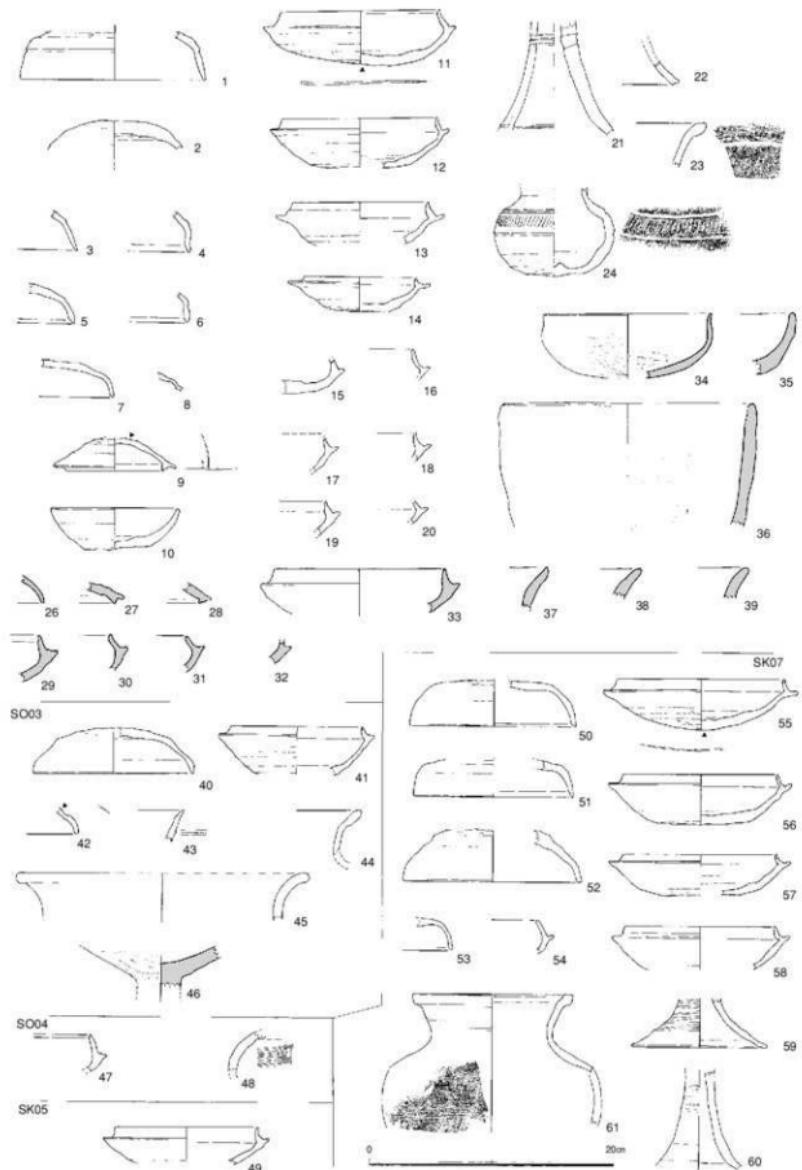


Fig. 98 SO02出土遺物 1 その他

アミは土師質・赤焼のもの

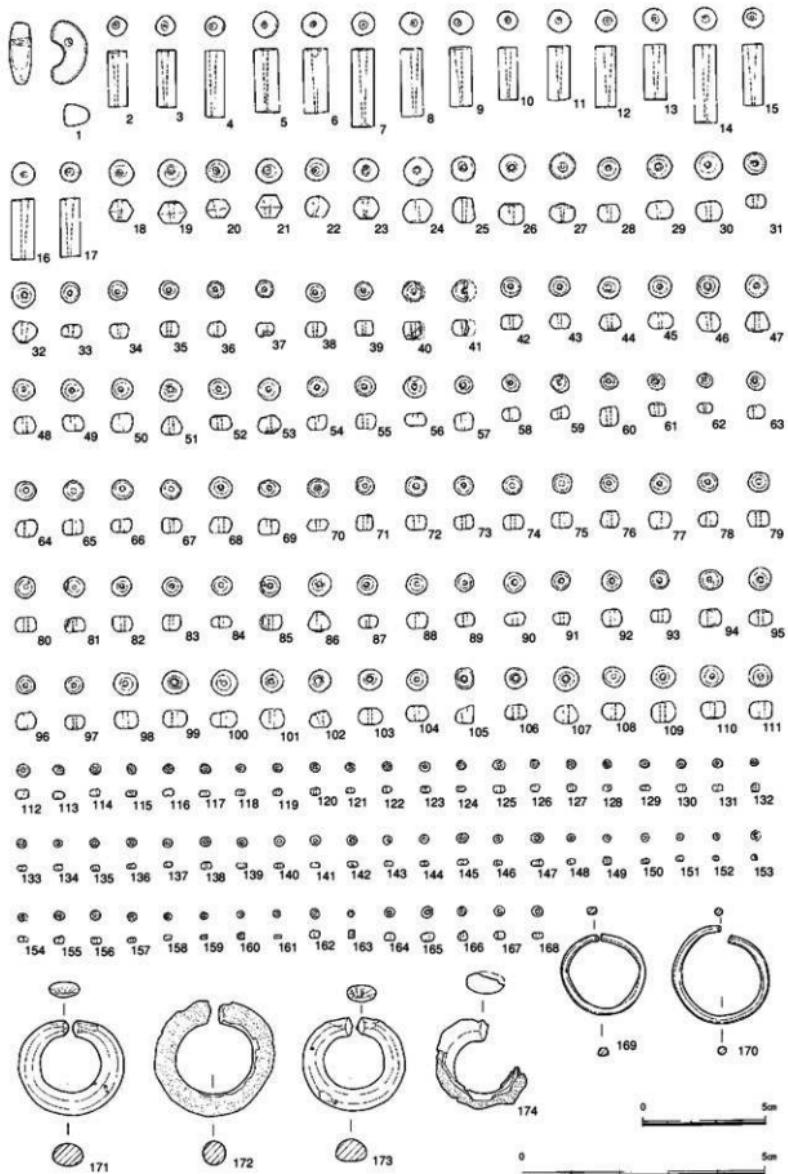


Fig. 99 SO02出土遺物2

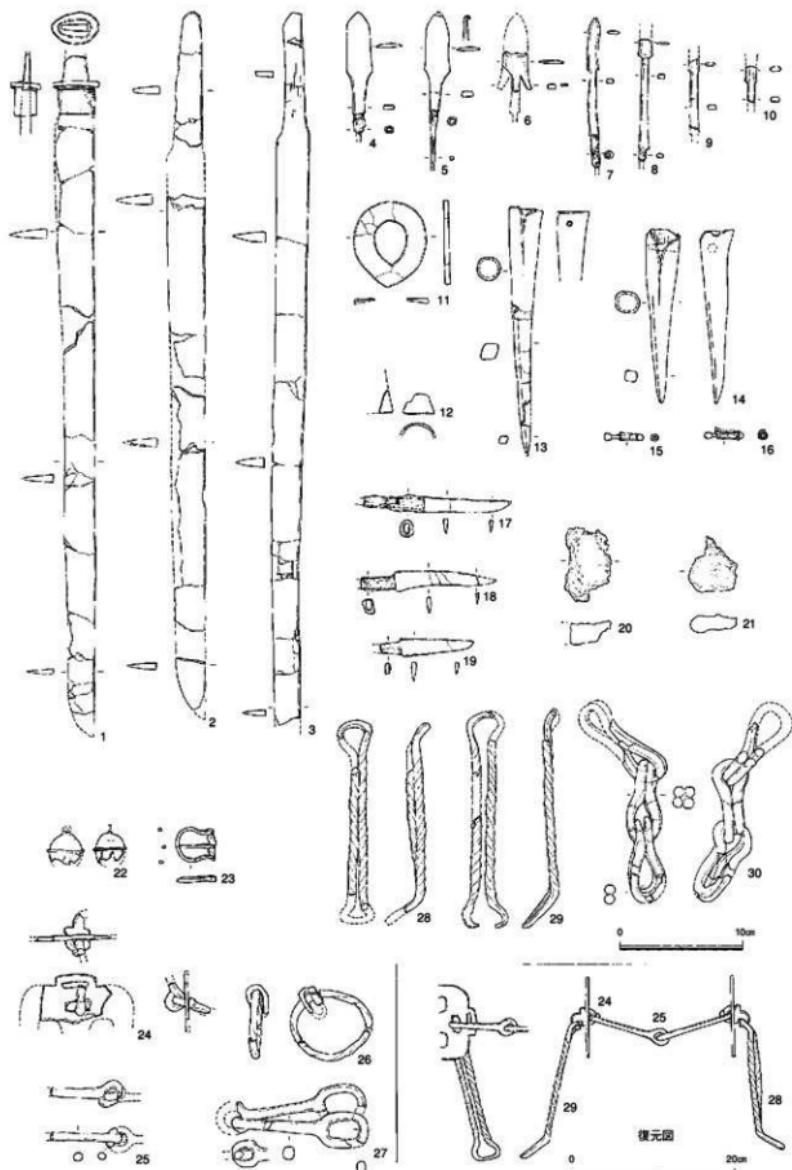


Fig. 100 SO02出土遺物 3

周溝内に須恵器、土師器があった。また周溝外のSK 5・7から出土した須恵器類も型式的特徴から本古墳関連遺物と見られる。

遺物のうち供献品には須恵器、土師器類がある。石室掘方内から須恵器、土師器、石室内から須恵器、周溝内から須恵器が出土した。その時期は掘方内と石室出土のうち古相が小田富士雄編年によるⅢA新段階、石室内中相とSK07がⅢB段階、石室出土新相がⅣ～V段階である。

副葬品には装身具、武具、馬具類がある。装身具(Fig. 99)には玉類と耳環があり、玉類は親玉の硬玉製勾玉(1)と碧玉製管玉(2～17)、水晶製切子玉(18～23)、瑪瑙製丸玉(24・25)、ガラス製丸玉(26～111)、ガラス製小玉(112～168)がある。小玉には通常の青～緑色以外に赤色(155～163)、黄色(164～168)がある。耳環は6点出土し、2点ずつのセットと見られた。

武具(Fig. 100)には鉄刀(1～3)、鉄鎌(4～10)、鉄鋸(13・14)、刀装具(11・12)、刀子(17～19)、弓金具(15・16)がある。馬具には銅鈴(22)、銅製鉄具(23)、轡(鏡板)(24)、銜(25・27)、引手(28・29)、遊環(26)、鐙(兵庫鎖)(30)がある。轡は2組が推定され、復元した轡は捻りのある引手や鏡板の特徴から初葬時の副葬品と考えられる。他に石室内から鉄滓2点(20・21)が出土した。

SO03

5区北端にあり、周溝の一部を検出した。主体部は調査区外北側にあり、隣地には石室石材とみられる大石が点在していた事から主体部は横穴式石室であったと推定される。墳丘規模は不明であるが、遺存する周溝の円周から復元すると直形約20mの規模と考えられる。周溝内や石室推定地付近の地表で須恵器や土師器があった。須恵器には壺類(40～42)、甕(43)、壺(44・45)、土師器には高壺(46)がある。これらはⅢB～IV段階とみられる。

SO04

5区東端にあり削平が著しい。墳丘や主体部は失われ、東側周溝底の一部を検出した。周溝の円周から復元すると直形約9mの規模と考えられる。周溝内から少量の遺物が出土した。遺物には須恵器壺(47)、甕(48)などがあり、ⅢA段階とみられた。

表2 土器観察表(Fig. 93・94に対応)

個体番号	部位	表面及び裏面		色調	厚さ (cm)	胎土	地成	備考
		外 面	内 面					
1 個体1	口縁部	横：前方向の熱文系 縦：ナデ調整	横：前方向の構状工具 縦：ナデ調整	灰黄 (2.5Y6/2)	1.0～1.3	石英、斜長石、白粒子、金色雲母を含む。	良好	
2 個体1	胴部	横：前方向の熱文系 縦：ナデ調整	横：前方向の構状工具 縦：ナデ調整	灰黄 (2.5Y6/2)	1.2～1.4	石英、斜長石、白粒子、金色雲母を含む。	良好	
3 個体1	口縁部附近	横方向の熱文系	横方向の構状工具によ る条痕・ナデ調整	灰黄 (2.5Y6/2)	1.3	石英、斜長石、白粒子、金色雲母を含む。	良好	
4 個体1	胴部下半	横方向の熱文系 ナデ調整	横方向の構状工具によ る条痕・ナデ調整	灰黄 (2.5Y6/2)	1.3～1.4	石英、斜長石、白粒子、金色雲母を含む。	良好	
5 個体1	胴部下半	横方向の熱文系 ナデ調整	横方向の構状工具によ る条痕・ナデ調整	灰黄 (2.5Y6/2)	1.2～1.4	石英、斜長石、白粒子、金色雲母を含む。	良好	
6 個体2	口縁部	横方向の熱文系 ナデ調整	横方向の構状工具によ る条痕・ナデ調整	灰黄 (2.5Y6/2)	1.1～1.4	石英、斜長石、白粒子、金色雲母を含む。	良好	
7 個体2	口縁部	横方向の熱文系 ナデ調整	横方向の構状工具によ る条痕・ナデ調整	灰黄 (2.5Y6/2)	1.1～1.2	石英、斜長石、白粒子、金色雲母を含む。	良好	
8 個体3	胴部下半	横方向の熱文系 ナデ調整	横方向の構状工具によ る条痕・ナデ調整	灰黄 (2.5Y6/2)	1.1～1.2	石英、斜長石、白粒子を含む。	良好	
9 個体3	胴部	横方向の熱文系 ナデ調整	横方向の構状工具によ る条痕・ナデ調整	灰黄 (2.5Y6/2)	1.3～1.4	石英、斜長石、白粒子を含む。	良好	
10 個体3	胴部	横方向の熱文系 ナデ調整	横方向の構状工具によ る条痕・ナデ調整	灰黄 (2.5Y6/2)	1.4	石英、斜長石、白粒子を含む。	良好	
11 個体4	口縁部	横方向の熱格子体系 ナデ調整	横方向の構状工具によ る条痕・ナデ調整	灰黄 (2.5Y6/1)	1.2～1.3	石英、斜長石、白粒子を含む。	良好	取り上げ際の割 れが多い。
12 個体4	胴部	横方向の熱格子体系 ナデ調整	横方向の構状工具によ る条痕・ナデ調整	灰黄 (2.5Y6/1)	1.2～1.4	石英、斜長石、白粒子を含む。	良好	取り上げ際の割 れが多い。
13 個体4	底部付近	横方向の熱格子体系 ナデ調整	横方向の構状工具によ る条痕・ナデ調整	灰黄 (2.5Y6/1)	1.1～1.2	石英、斜長石、白粒子を含む。	良好	
14 個体5	口縁部	横方向の熱格子体系 ナデ調整	横方向の構状工具によ る条痕・ナデ調整	灰黄 (2.5Y6/2)	1.1	石英、斜長石、白粒子、金色雲母を含む。	良好	内面下部に斜方向 の細い調整痕あり
15 個体6	口縁部	横方向の熱格子体系 ナデ調整	横方向の熱格子体系 ナデ調整	灰黄 (2.5Y6/1)	1	石英、斜長石、白粒子を含む。	良好	
16 個体7	口縁部附近	横方向の熱文系 ナデ調整	横方向の構状工具によ る条痕・ナデ調整	灰黄 (2.5Y6/1)	1.1～1.2	石英、斜長石、白粒子、金色雲母を含む。	良好	
17 個体8	胴部	横方向の熱格子体系 ナデ調整	横 (SYR6/8)	1.1	石英、斜長石、白粒子、赤粒子を含む。	良好		
18 個体9	口縁部	横方向への熱文系・ナ デ調整	横 (SYR6/8)	1.1～1.2	石英、斜長石、白粒子、赤粒子を含む。	良好		
19 個体9	胴部	横方向への熱格子体系 ナデ調整	横 (SYR6/8)	1	石英、斜長石、白粒子、赤粒子を含む。	良好		
20 個体10	底部付近	ナデ調整	灰 (SYR7/8)	1.7	角閃石、石英、斜長石、白粒子を含む。	良好		
21 個体11	胴部	奈良調整	奈良調整	明赤褐色 (2.5YR5/6)	1.2	石英、斜長石、白粒子、赤粒子を含む。	良好	
22 個体11	胴部	奈良調整	奈良調整	明赤褐色 (2.5YR5/6)	1.2	石英、斜長石、白粒子、赤粒子を含む。	良好	

4. 科学的分析

1) 年代測定

金武は場整備に伴う浦江遺跡群第5次調査の自然科学分野報告（放射性炭素年代測定）

パリノ・サーヴェイ株式会社

1. 試料

試料は、袋状貯蔵穴に類似する土坑（SK07）底部付近から採取された土壤試料1点および炭化材である。その直上からは、縄文時代早期に比定される土器が出土しており、土坑使用時あるいは遺棄・廃棄直後のものと考えられる。これら試料について、土壤試料を対象に花粉分析・植物珪酸体分析・微細断面分析を実施し、炭化材については、任意に抽出した炭化材3片を対象に放射性炭素年代測定を実施する。

2. 分析方法

測定は、株式会社加速器分析研究所の協力を得ている。なお、炭化材は、いずれも微細であり、比較的の遺存状況の良好な試料を抽出したが、いずれも微量であった。そのため、加速器質量分析（AMS）法を実施する。放射性炭素の半減期は、LIBBYの半減期5568年を使用する。なお、分析試料とした炭化材については、樹種同定を行い試料の由来について調査する。

3. 結果

結果を表3に示す。測定の結果、3試料は、9350～9580BPとほぼ類似した年代値が得られた。

なお、表中に示した $\delta^{13}C$ の値は、加速器を用いて試料炭素中の ^{13}C 濃度（ $^{13}C / ^{12}C$ ）を測定し、標準試料PDB（白亜紀のペラムナイト類の化石）の測定値を基準として、それからのずれを計算し、千分偏差（‰：パーミル）で表したものである。今回の試料の年代値は、この値に基づいて補正した年代である。

4. 考察

放射性炭素年代測定の結果、土坑底部付近から採取された針葉樹の炭化材3点は、9350～9580BPとほぼ類似した年代値（補正年代）が得られた。この年代値は土坑使用時、あるいは遺棄・廃棄直後の年代の可能性がある。キーリ・武藤（1982）や谷口（2001）によれば、今回得られた年代値は縄文時代早期頃に相当し、出土遺物から推測されている年代観と調和する。

表3 放射性炭素年代測定結果

遺構	試料採取位置	試料の種類	補正年代(BP)	$\delta^{13}C$ (‰)	測定年代(BP)	Code. No.
SK07	土坑底部付近	炭化材(針葉樹)	9580±60	-17.50±1.44	9460±50	IAAA-30436
		炭化材(針葉樹)	9580±50	-19.85±0.76	9290±50	IAAA-30437
		炭化材(針葉樹)	9350±60	-16.71±1.18	9220±50	IAAA-30438

注1) 年代値：1950年を基点とし、何年であるかを示した値。

注2) 測定：標準偏差(ONE SIGMA)に相当する年代。

注3) $\delta^{13}C$ ：試料炭素の $^{13}C / ^{12}C$ 原子比を加速器で測定し、標準にPDBを用いて同様に算出した値。

2) 石材同定

浦江遺跡出土黒曜石の蛍光X線分析による产地同定

佐賀大学文化教育学部 角緑 道

出土した黒曜石4試料について、蛍光X線分析による产地同定をおこなった。測定は佐賀大学文化教育学部の波長分散型蛍光X線分析装置（日本電子製 JSX-60S7）を使用し、蒸留水中で超音波洗浄された各試料について、角緑・宇都宮（2003）にしたがい非破壊により各元素の特性X線強度を測定した。分析結果を表4に示す。測定されたRb, Sr, Zrの3元素のX線強度について百分率を求め、三角形にプロットした（Fig. 101の黒丸）。同図には比較のために北部九州内の黒曜石原産地の化学組成範囲もプロットしてある。今回測定をおこなった4試料はいずれも類似した化学組成を有しておりFig. 101では狭い範囲に集中してプロットされる。この値は針尾島から産出する黒曜石の化学組成の範囲（Fig. 101の点線の領域）にプロットされている。針尾島産の黒曜石は針尾島内の产地によりいくつかのグループに分かれるが、今回の黒曜石は針尾中町から産出する黒曜石の化学組成に最も近い。以上の結果から、今回分析した黒曜石はいずれも針尾島産であると同定される。

文献

角緑 道・宇都宮 恵（2003）、蛍光X線分析による黒曜石の产地同定(2)、佐賀大学文化教育学部研究論文集、vol. 7、No. 2、47-58。

表4 分析結果

Nb (%)	4.8	5.8	5.1	4.6
Zr	39.5	40.8	39.5	41.5
Y	11.8	9.7	11.9	10.8
Sr	13.4	14.0	13.2	14.2
Rb	30.6	29.8	30.3	28.9
Nb/Sr	0.359	0.413	0.390	0.325
Zr/Sr	2.955	2.911	2.988	2.923
Y/Sr	0.880	0.689	0.899	0.760
Rb/Sr	2.294	2.124	2.296	2.033
Rb (%)	36.7	35.2	36.5	34.1
Sr	16.0	16.6	15.9	16.8
Zr	47.3	48.2	47.5	49.1

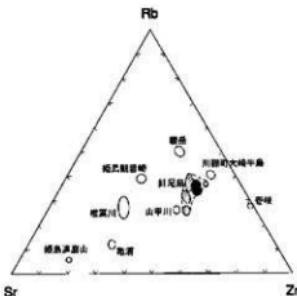
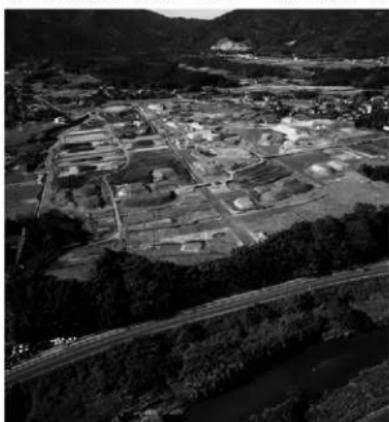


Fig. 101 Rb-Sr-Zr 強度比



1. 浦江遺跡5次調査・柳遺跡・全景（南東から）



2. 浦江遺跡5次調査全景、手前は室見川
(東から)



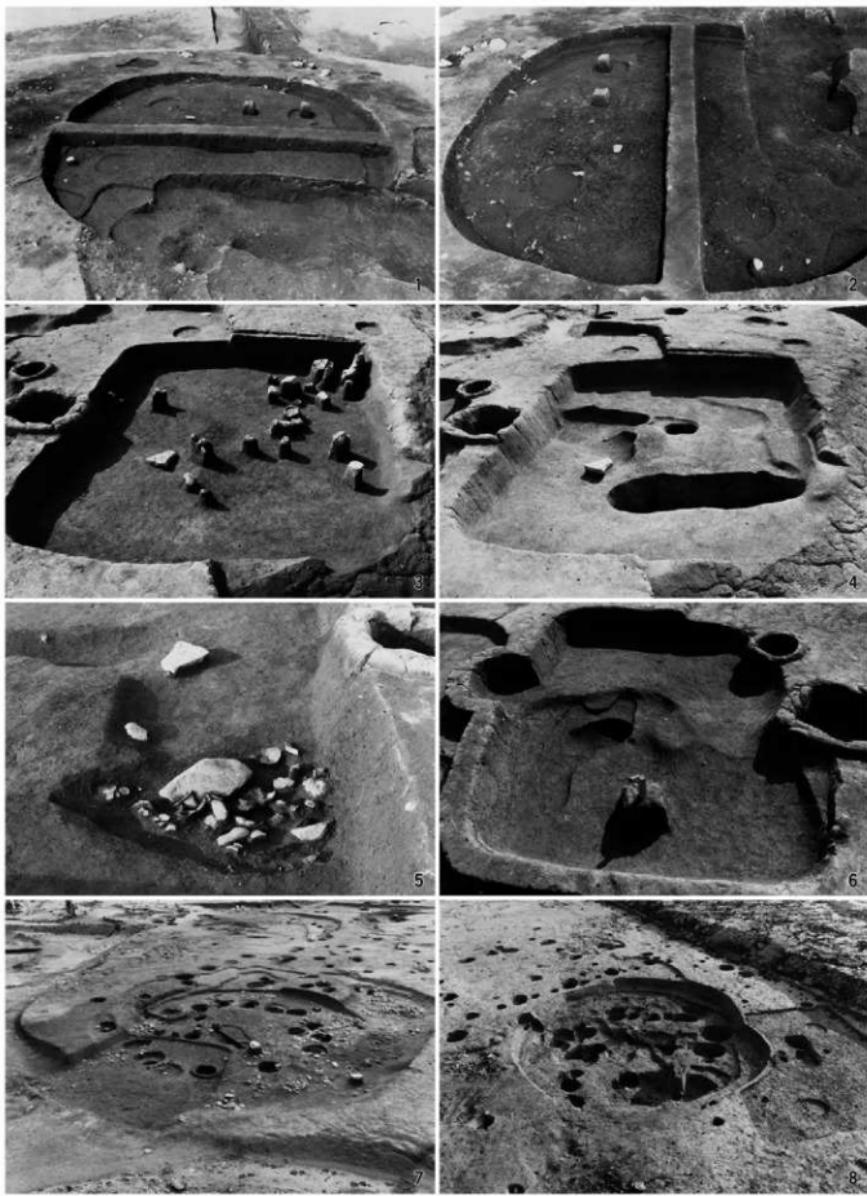
3. 浦江遺跡肩端部地形（南から）



1. 3・5・6区全景（南から）



2. 3区全景（東から）



1. SC23 (東から)
3. SC47遺物出土状況 (北から)
5. SC47墳丘土坑 (南から)
7. SC80・81 (北から)

2. SC23 (南から)
4. SC47 (北から)
6. SC54 (北から)
8. SC124・125・SB122 (北から)



1



2



3



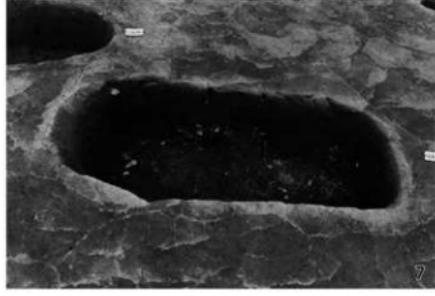
4



5



6



7



8

1. SC124 (東から)

3. SB175 (西から)

5. SK18・19・20・21 (西から)

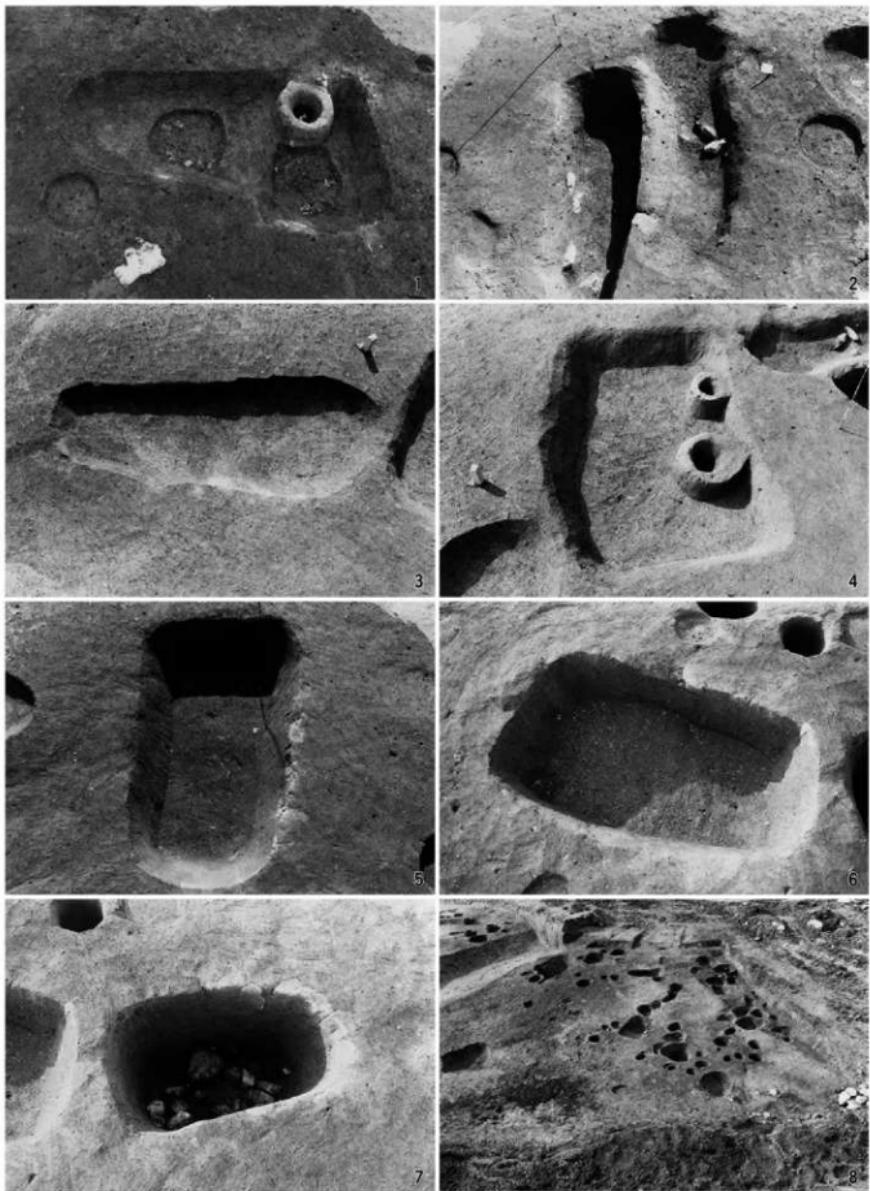
7. SK19 (南から)

2. SB121・123 (北西から)

4. SK126 (北西から)

6. SK18 (東から)

8. SK20 (南から)



1. SK83 (北から) 2. SK84・85 (東から)
3. SK87 (東から) 4. SK88 (北から)
5. SK89 (北から) 6. SK100 (東から)
7. SK101 (東から) 8. 15号墳墳丘下ピット群 (東から)



3区古墳群遠景1 (SO06西側から)



3区古墳群遠景2 (SO05南東側から)



3区古墳群遠景3 (SO08北西側から)



3区古墳群遠景4 (SO07・08北西側から)



1. SO02古墳全景（東から）

3. SO02主体部左側壁（北東から）

5. SO02主体部完掘状況（東から）

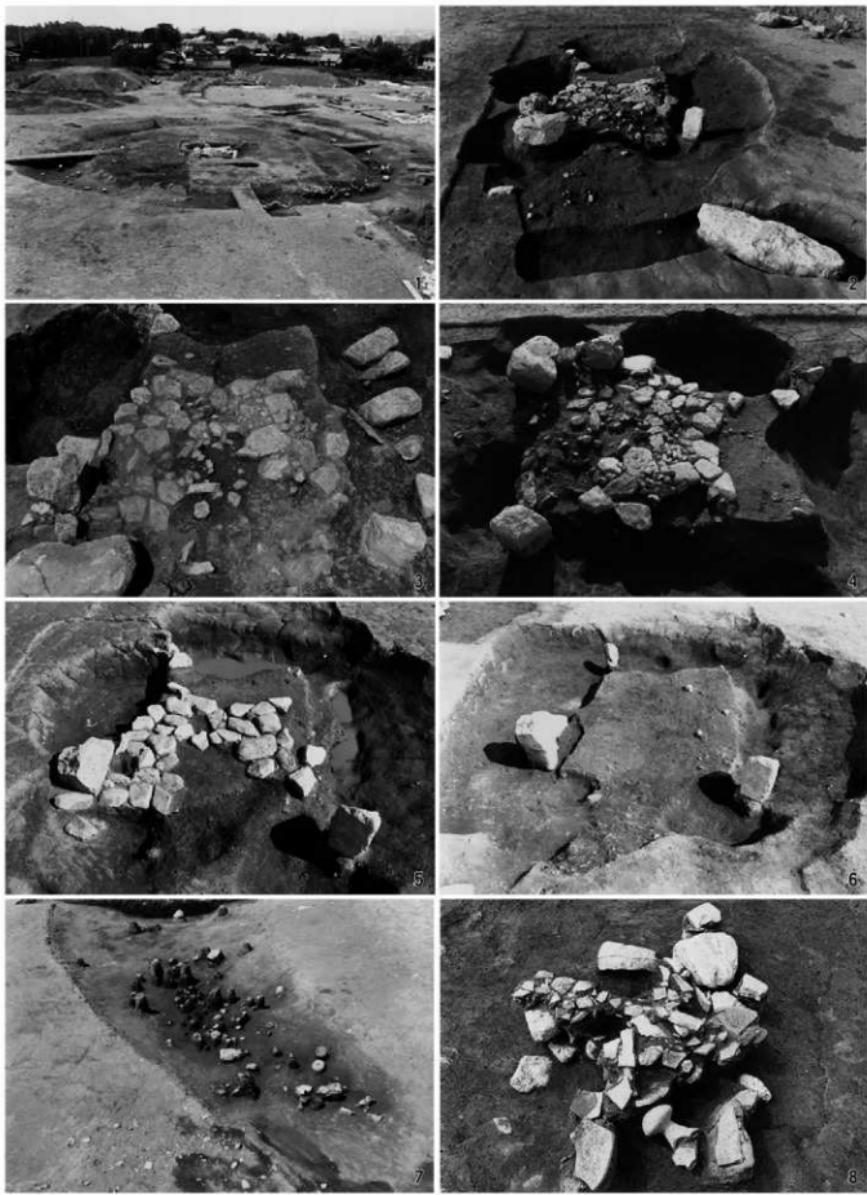
7. SO02主体部内遺物出土状況1（西から）

2. SO02主体部全景（南東から）

4. SO02羨道部（北東から）

6. SO02閉塞（東から）

8. SO02主体部内遺物出土状況2（北から）



1. SO03古墳全景（東から）
 3. SO03主体部検出状況（北から）
 5. SO03主体部敷石2（北から）
 7. SO03遺物出土状況1（北東から）
 2. SO03主体部全景（北から）
 4. SO03主体部敷石1（西から）
 6. SO03主体部完掘状況（北から）
 8. SO03遺物出土状況2（南から）



1. SO04古墳全景（南から）
2. SO04主体部全景（南から）
3. SO04主体部敷石1（南から）
4. SO04主体部敷石2（東から）
5. SO04主体部下面敷石1（南から）
6. SO04主体部下面敷石2（東から）
7. SO04主体部完掘状況（南から）
8. SO04主体部内遺物出土状況（北から）



1. SO05主体部第2面敷石1（南から）

3. SO05主体部第1面敷石1（南から）

5. SO05周溝内遺物出土状況（東から）

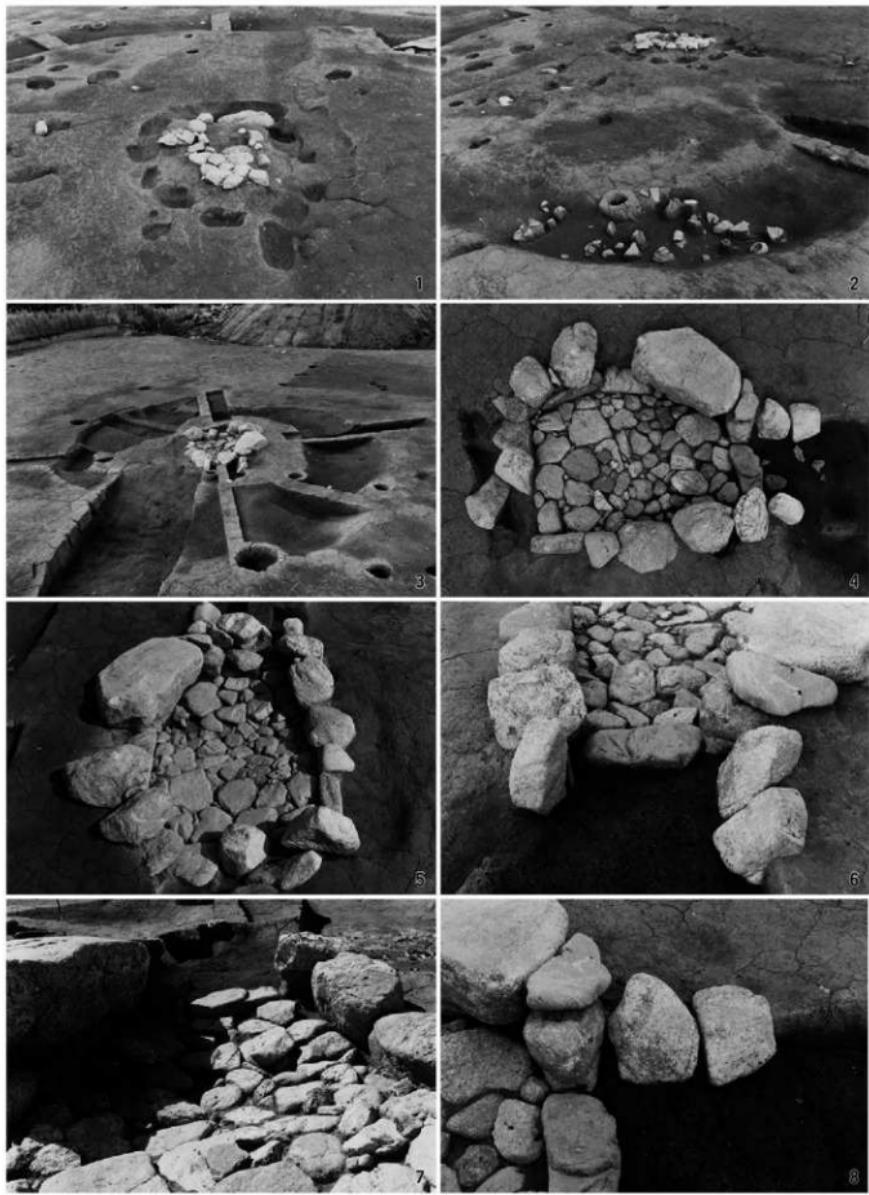
7. SO05主体部内第2面遺物出土状況2（西から）

2. SO05主体部第2面敷石2（西から）

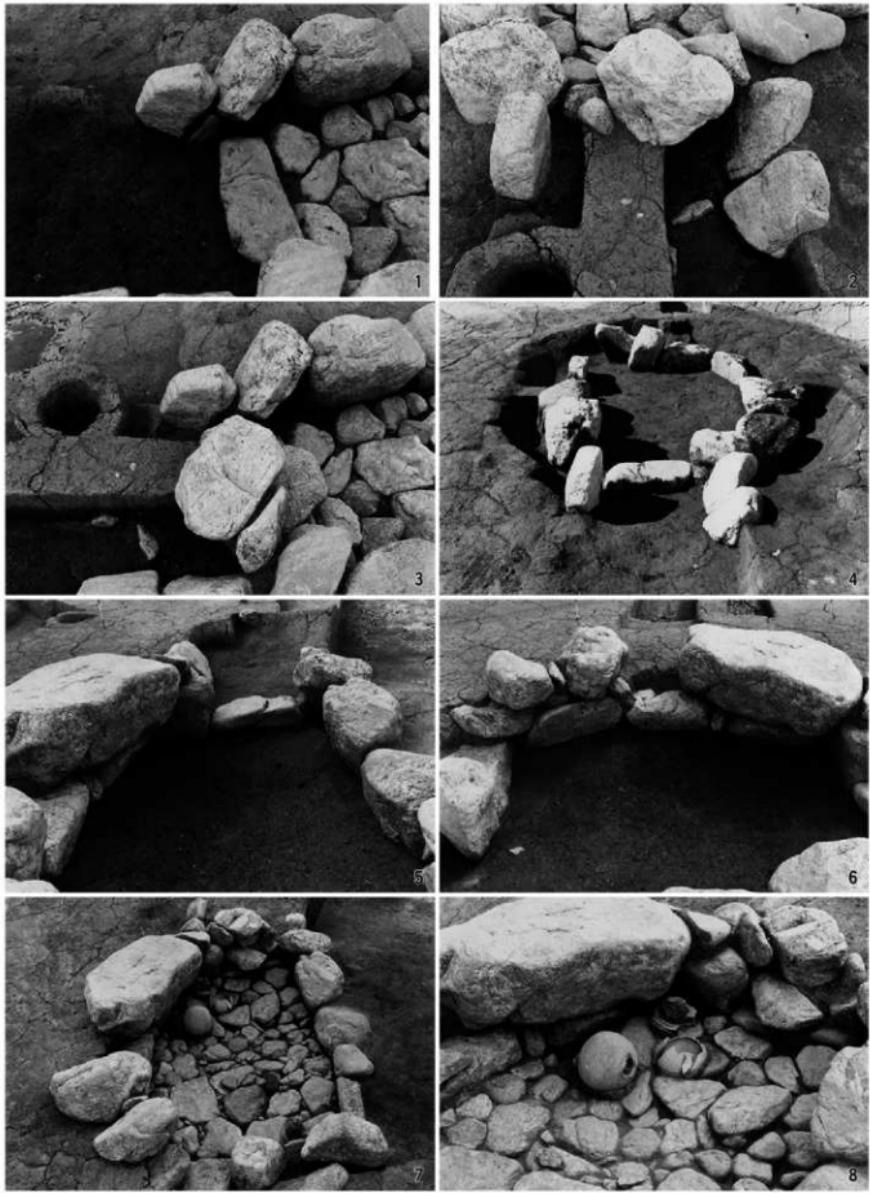
4. SO05主体部第1面敷石2（西から）

6. SO05主体部内第2面遺物出土状況1（北西から）

8. SO05主体部内第1面遺物出土状況（南西から）



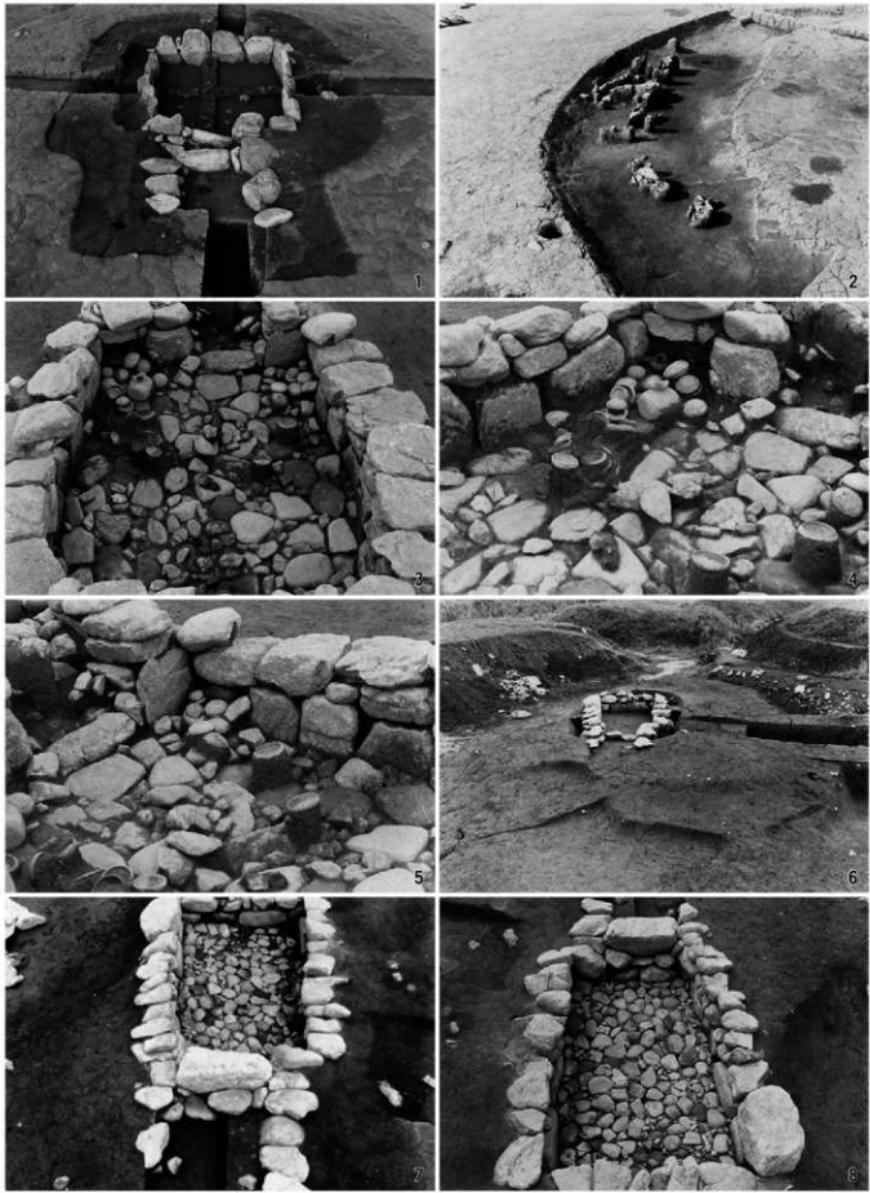
1. S006古墳全景（西から）
2. S006周溝内遺物出土状況（北西から）
3. S007古墳全景（南から）
4. S007主体部全景1（上から）
5. S007主体部全景2（北から）
6. S007主体部玄門部1（南から）
7. S007主体部玄門部2（北から）
8. S007主体部入口右側壁（西から）



1. SO07主体部入口左側壁 (東から)
2. SO07主体部開口1 (南から)
3. SO07主体部閉塞2 (東から)
4. SO07主体部完掘状況1 (南から)
5. SO07主体部完掘状況2 (北から)
6. SO07主体部内遺物出土状況1 (北から)
7. SO07主体部内遺物出土状況2 (北西から)



1. SO08古墳全景 (南西から)
2. SO08主体部全景1 (南西から)
3. SO08主体部奥壁 (南西から)
4. SO08主体部全景2 (北東から)
5. SO08主体部右側壁 (北から)
6. SO08主体部玄門部 (北東から)
7. SO08主体部閉塞 (南西から)
8. SO08主体部敷石 (北西から)



1. SO08主体部完掘状況（南東から）
 3. SO08主体部内遺物出土状況（北西から）
 5. SO08主体部内土器B群（東から）
 7. SO09主体部全景1（西から）
 2. SO08周溝内遺物出土状況（南から）
 4. SO08主体部内土器A群（北から）
 6. SO09古墳全景（西から）
 8. SO09主体部全景2（東から）



1. SO09主体部入口1（東から）

3. SO09主体部入口3（北西から）

5. SO09主体部完掘状況（東から）

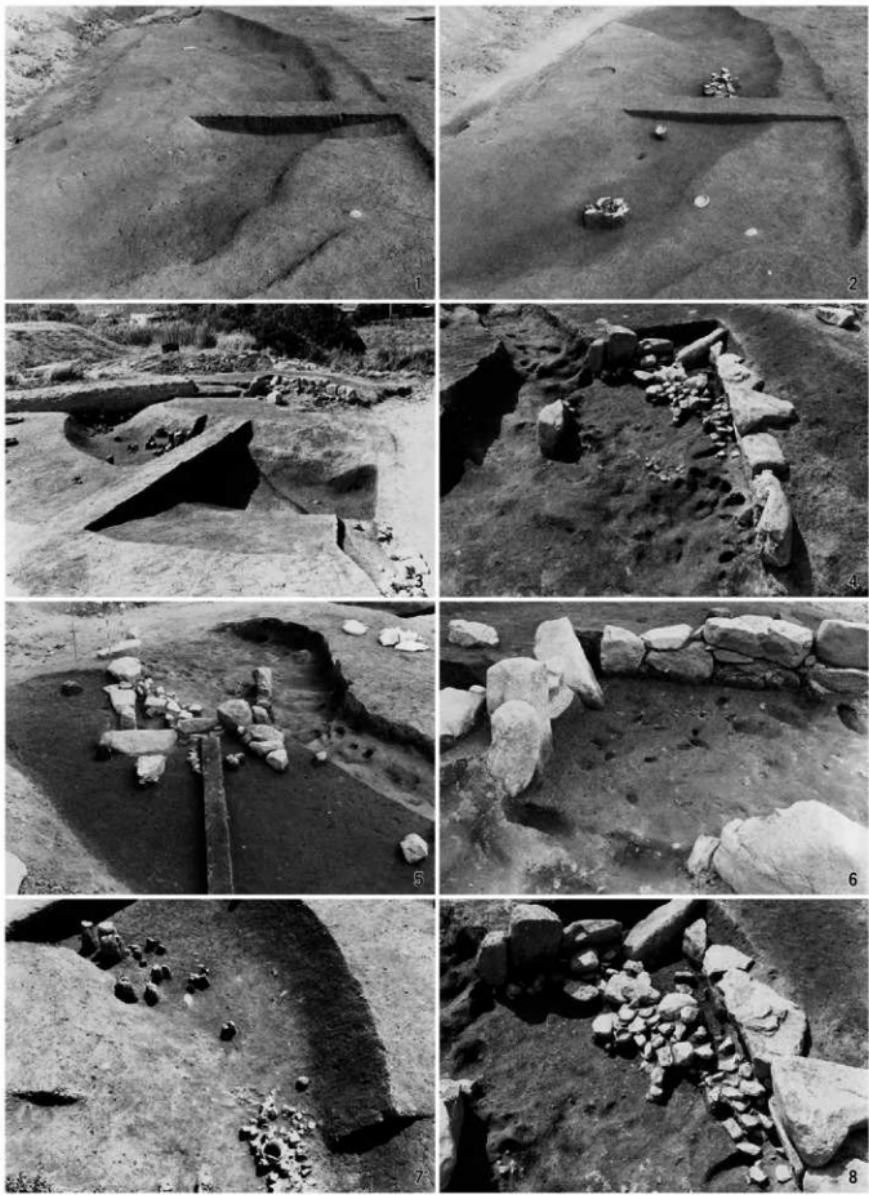
7. SO09主体部内遺物A群出土状況（北東から）

2. SO09主体部入口2（西から）

4. SO09主体部入口4（西から）

6. SO09主体部内遺物出土状況（西から）

8. SO09主体部内遺物B群出土状況（北西から）



1. SO53全景（西から）

3. SO15古墳全景（東から）

5. SO15主体部全景2（西から）

7. SO15周溝内遺物出土状況（西から）

2. SO53遺物出土状況（西から）

4. SO15主体部全景1（東から）

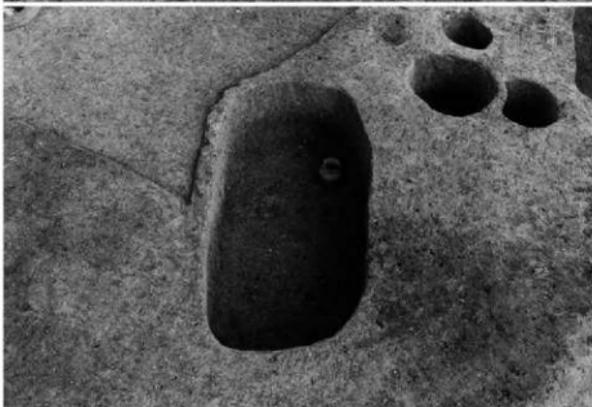
6. SO15主体部完掘状況（南から）

8. SO15主体部内遺物出土状況（東から）

PL18



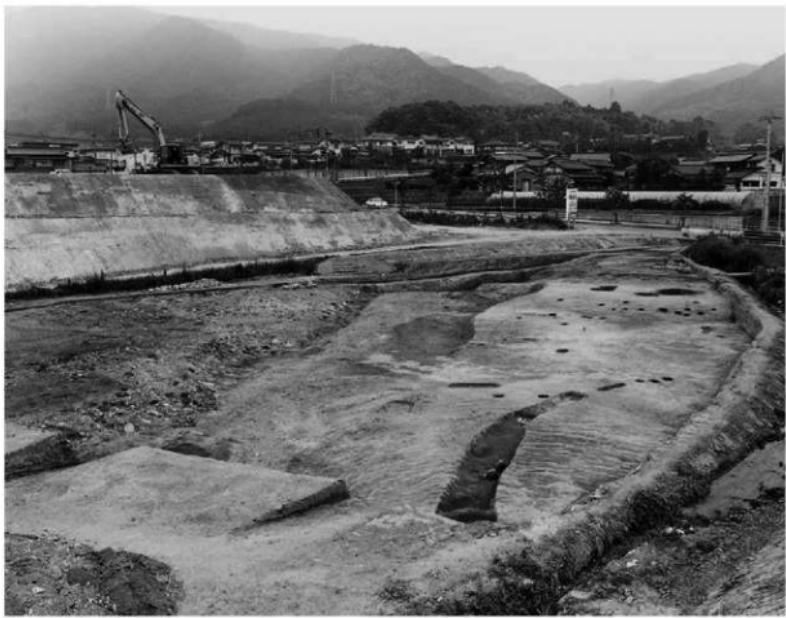
SB50 (北から)



SK154 (西から)



SK29 (北から)



1. 5区全景（東から）



2. 古墳 SO02石室（東から）



3. 古墳 SO02石室掘方（東から）



4. 古墳 SO04全景（南から）



5. 6 a区住居 SC04（南から）



1. 6 a区 SK07全景（東から）



2. SK07遺物出土状況（東から）



1



6



8



14



18



15



20



5

3. SK07出土遺物（番号は挿図の個別番号と一致する）

報告書抄録

ふりがな	かなたけ					
書名	金武 1					
副書名	金武地区農村振興総合整備統合補助事業関係調査報告1－浦江遺跡第5次調査1－					
卷次						
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書					
シリーズ番号	792					
編著者名	吉留秀敏／米倉秀紀／藏富土寛／赤坂亨					
編集機関	福岡市教育委員会					
所在地	福岡市中央区天神1-8-1					
発行年月日	2004年3月31日					
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東經	調査期間	調査面積
やなぎ 柳遺跡	福岡県福岡市 西区大字金武字 柳、塚原、大塚	40135	33度 31分13秒	130度 19分19秒	2001.5.9 ~ 5.16	200m ²
うらえ 浦江遺跡					2002.1.7 ~12.30	37,000m ²
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
柳遺跡	散布地	縄文時代		石器		
浦江遺跡	包蔵地・集落・ 墳墓・水田	旧石器・縄文時代	土壤1	土器・石槍・剥片		
		弥生時代	堅穴式住居 土壤墓 土壤	弥生土器 石斧・石包丁 板状鉄斧・剥片		
		古墳時代	古墳14基 溝	須恵器・土師器 馬具・武具・ 装身具・石製品		
		中世	掘立柱建物	輸入陶磁器 国产陶磁器 瓦器・土師器		

福岡市埋蔵文化財調査報告書第792集

金 武 1

金武地区農村振興総合整備統合補助事業関係調査報告1
－浦江遺跡第5次調査1－

2004年(平成16年)3月31日

発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1丁目8-1

印刷 高松印刷有限会社

福岡市東区松島1丁目4-10